（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

明治三十五年七月五日發兌

女鑑

第貳百五拾六號

東京國光社

女鑑第貳百五拾六號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事

○郵券代用は（一錢、三錢）一割増の事

○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事

○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊 金拾錢

六冊三ヶ月分 前金五拾七錢

十二冊半年分 前金壹圓拾錢

廿四冊一年分 前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金參拾錢

半頁 金八圓

一頁 金拾貳圓

表紙一頁 金拾六圓

色刷は特に御相談に應す

明治三十五年七月四日印刷

明治三十五年七月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

編輯兼發行人 渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地

印刷人 並木眞雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

發賣元 株式會社國光社出版部

（電話新橋二六九三番）

（電話新橋特八八）

國光社出版部發行圖書割引券

注意	注文書名	合計	申込者住所氏名
◎本券にて御注文の分（教科書を除く）に限り總て定價の一割引を以て御送本可仕候 ◎御注文の節は必ず郵便爲替を以て遞送料を合せ御送金被下度候 ◎郵便爲替受取局は東京新富町局と御指定下されたく候 ◎本券有効期限は明治三十五年八月三十一日迄と相定め候		冊 此代 外に遞送料	

切取箋

▲本誌購讀者に告く▼

本誌愛讀者にして代金御拂込延滯相成居候向も尠なからず帳簿整理上甚だ差支候に就ては此際至急御送金相成候樣御取斗被下度此段廣告仕候也

追て郵便爲替にて御拂込下され候節は受取局を東京新富町局と御指定被下度候

明治三十五年七月

東京市京橋區築地二丁目
株式會社 國光社出版部
（電話新橋二六九三番）

文科大學教授文學博士小杉榲邨先生題詠 ● 定價 金貳拾五錢
國學院講師丸山正彦先生批評 國學院内 松韻會編 ● 郵税 金四錢

今様 新風滿都乃響

四六版表紙畫丸山穩枝女史筆 紙數二百二拾餘頁

本書まつのひゞきは松韻會丸山先生を戴ける會員諸氏の傑作を集めたるもの、趣味津々たり目次●詩論和歌及新體詩を論ず、文學博士萩野由之、新體詩の形式を論ず、高橋龍雄、詠詩には本居若水、小森松風、平澤稻村、池山谿泉、三浦雙鯉、中島鷺泉、小林靜軒、實相寺一二三、市原自適、川邊洗月、彌富秋村、大和田檀山、岡崎霞村、大塚幽香其他五十有餘名の玉什佳作を收む。題目には幽谿の梅、春遊、行路柳、摘草、花下遊、少女櫂を執りて短艇に立てり、春懷、舟遊、磯山、郭公、夏風、案山子、秋燈、紅葉、雪戲、雪の朝、爐邊閑話、債鬼、歲將に暮れんとす政治家、貧寒窟、汝を破らむ、善惡、むらさき、君ならで、忍ぶの亂れ、上野動物園の獅を見て、扇山、西詩、我が好める音樂、大堰川、壯士、兄弟、朋友、上杉謙信、藤原鎌足、曾我兄弟、兒島高德、平敦盛、釋迦、基督、世を憤りて讀める、露營月、盲啞院、有爲轉變、詩人、嬉しきもの、鷲、亡き父を懷ふ、母の御墓、病床苦吟、袖屛風、諷諭體、嵯峨の古寺その他詩潮詩界漫言(池山谿泉)鬼言一束(三浦雙鯉)詩と題目(市原自適)等氣焔當るべからず附錄熊鷲、丸山松廬作

發行所 東京神田鎌倉町三番地 東洋社 ● 大賣捌 ○東京 目黑 ○ 林平 ● 大阪 吉岡 其他

女子作法夏期講習會

本會は女子教育上最も必須なる禮式作法を實用に適せしむるやう教授するを目的とす講師には宮中禮式を本旨として旁ら伊勢、小笠原、松岡、吉良、會我の諸流禮式及西洋禮式に精通し其教授に熟練せる石井泰次郎氏を主任に擧げ別項記載の諸氏亦親切に教鞭を執らる

一學科　起居進退　日常應接　物品取扱　儀式諸法　配膳給仕　飲食心得

一講師

宮中作法臣民作法講師	石井泰次郎君
女子高等師範學校講師	小野順子君
日本女學校講師	松岡しげ子君
愛敬女學校講師	中村濱子君
東京女學館講師	有住常子君
東京裁縫女學校講師	中島義式君
女子東京美術學校講師	石井湧太郎君
日本女學校講師	大谷きよ子君

一會期
普通科　八月一日より同十日まで毎日午前八時より同十一時迄
高等科　八月十一日より同廿日まで毎日午前八時より同十一時迄

一會費
普通科　金壹圓五十錢
高等科　金貳圓

一證明　修業者には希望により證明書を授與す

一申込　申込期限は七月二十五日を限る入會者は左の書式により申込書を差出すべし

> 講習申込書
>
> 私義貴會開設の夏期講習會に於て左の學科講習仕度此段申込候也
>
> 一普通科(又は全科)
>
> 族籍　番地
>
> 姓名　㊞
>
> 明治三十五年　月　日
>
> 大日本禮節學會御中

明治三十五年六月

東京市神田區一ツ橋通町帝國教育會内

大日本禮節學會

●わきが（腋臭症）根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當舘新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**すること確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新舘藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話本局二二五四六番）

●肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

大改良 最新式 時計形文具兼用錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は墨池肉壺檢印等**文具**を備へ一面は**錢入**銀貨銅貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢▲上製八拾錢七拾錢並製六拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割增し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新舘商店**

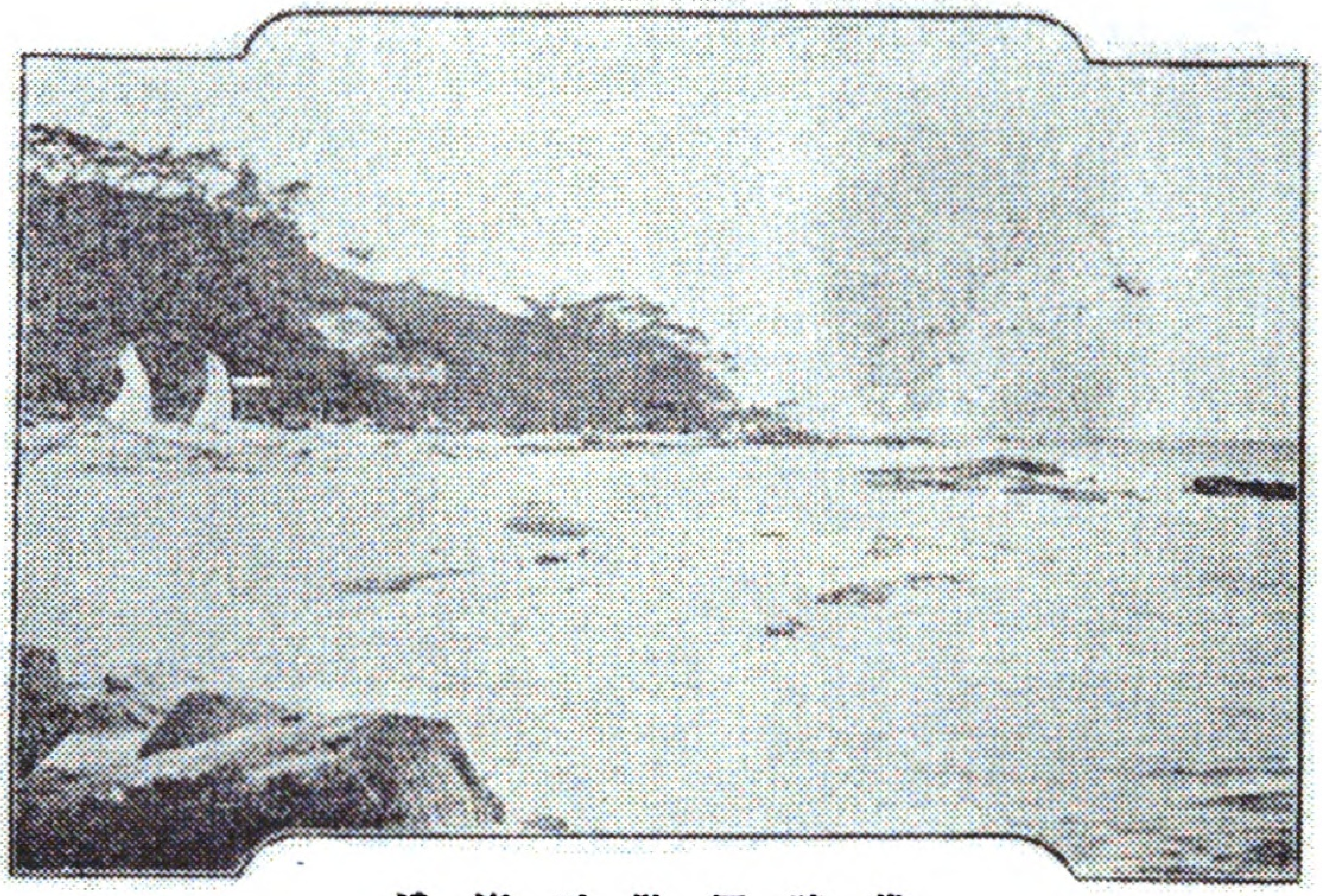

小林しん子


宮島いね子


橋本むめ子


佐藤つる子

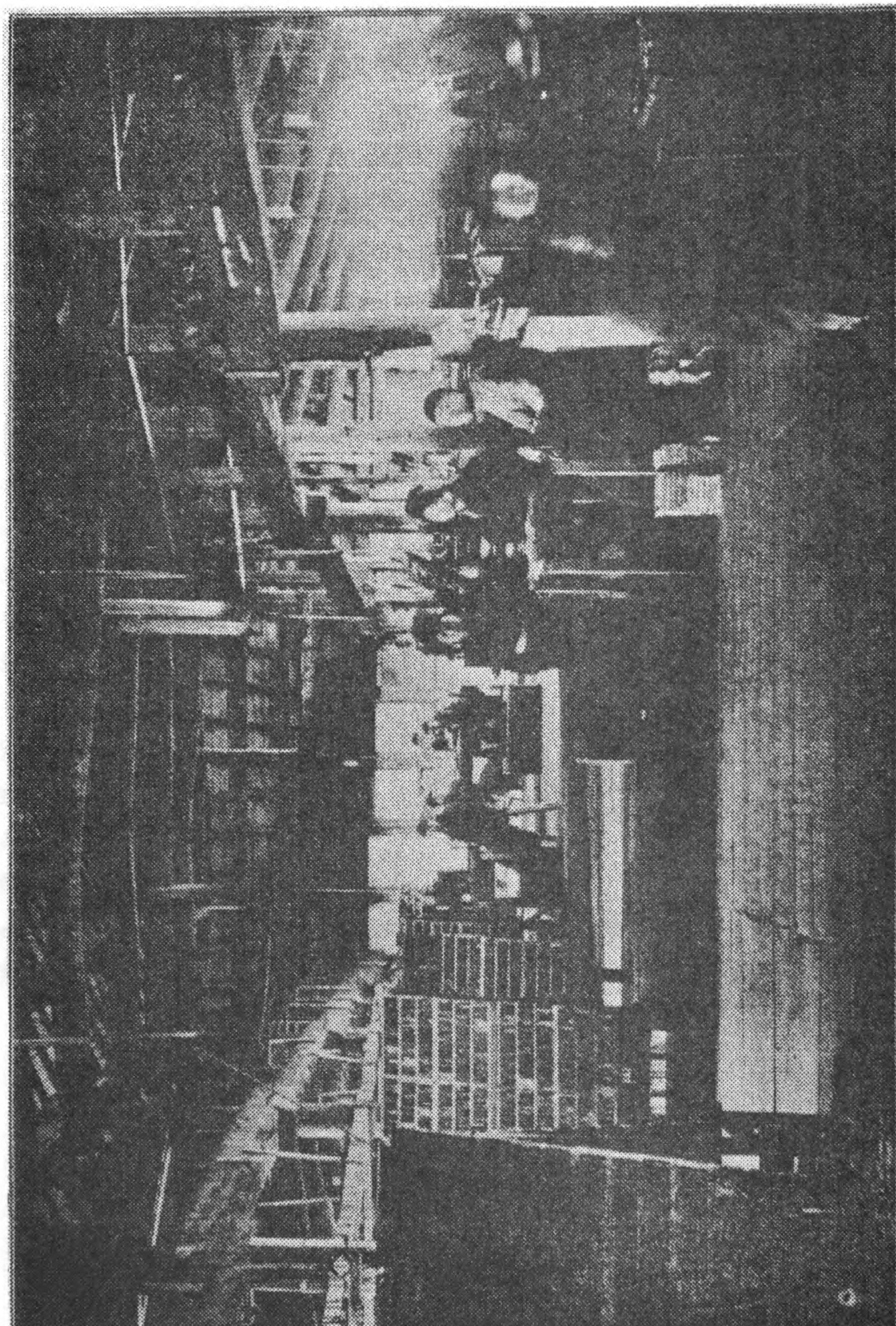

淺井こふ子

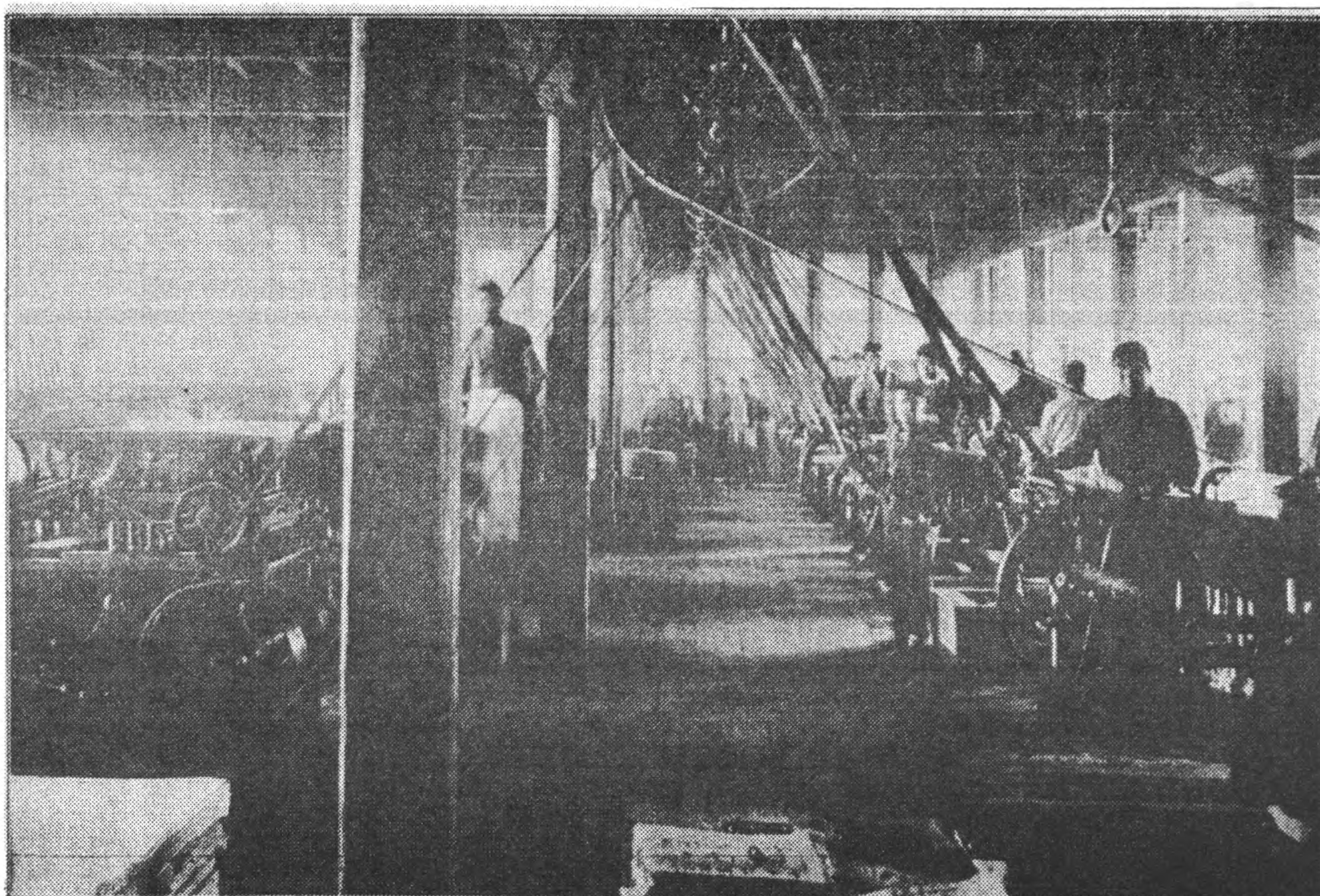


常陸國助川海邊



水戸市常盤公園好文亭





國光社印刷部工場內部（其の二）

東京女學館講師　國分操子編纂●第十一版●

日用寶鑑　**貴女之栞**

文學博士小杉榲邨先生校閲幷序　齋藤圓子編輯

套入美製金壹圓八拾五錢郵税二十錢

和製美製全二冊金壹圓六拾五錢郵税十八錢

女子敎科　**包結之栞**

套入美製金壹圓拾錢　郵税金拾錢

和製全二冊金九拾五錢郵税金九錢

落合直文著

女子雅文教範

正價金七拾錢

和裝　美製　全一冊　郵税金十錢

華族女學校教授　坂正臣作幷書

女子習字　**文のやまくら**

正價各金三十五錢

和裝　美製　全一冊　郵税各四錢

三輪田女學校長　日本女子大學校教授　三輪田眞佐子著

女訓之栞

近時女子教育の事を論ずる事少からずと雖も其當を得たるもの少し本書は一身を女子教育に傾倒せらるゝ三輪田女史が卓拔なる見識と多年の經驗とによりて新に走らず舊に失せず溫健着實なる筆を以て賢母良妻のとるべき道を述べられたるものなりその條目數十議論に交ふるに偶感あり經歴談あり然も皆女子一生の訓戒ならざるはなし世の女子たるもの又其父兄竝に教育に志ある諸士は必ず一本を備ふべき良書也

最新刊　和裝　美製　全一冊

正價金四拾五錢　郵税金六錢

農學士　白坂哲著

○實驗　**養蠶と栽桑**

洋裝全一冊　金三十五錢　郵税四錢

醫學士　佐野彪太著

○通俗　**療養法**

洋裝全一冊　金三十五錢　郵税六錢

小野鵞堂書

女子手紙之友

和裝●正價四十錢　郵税四錢

増補日用　**西洋料理法**

附支那料理及玉突指南

洋裝正價四十錢　●郵税六錢

發行所　東京日本橋區通一　電話本局四一四一番　大倉書店

優美と華奢

猶太の聖者の言に曰く、野の百合花を視よ、紡まず、績かざるなり。されど、ソロモンの榮華の極みの時だにも、其装此花の一本にだに及ばざりきと。嗚呼是れ彼れがヨルダン河畔の山上に世の爲め人の爲めに訓へたる、萬世不易の眞理にあらずや。

王ソロモンの都をジユルザレムに奠めて、イスラエルに君臨するに方りてや、世界の土産方物は東より西より貢献せられ、南より北より輻湊して、珊瑚、玳瑁、寶玉の珍、綾羅、錦繡、瓔珞の美みな盡く集注せられざるなく、黄金の宮殿に住ゐ、珠玉の樓閣に遊び、人間無上の榮華を一身に纏ひて、世上無比の歡樂を極む。而かも其裝や、眇たる一枝の百合花にだも及ばざるは何ぞや。怪むを休めよ、天來一片の美は、人間千萬の修飾よりも遙に優さりて麗はしきものあるを。蓋し、人爲の工夫を凝らして造りなしたる艶麗は、天質の美を發揮したる優美の前には、譬へば霜雪の朝陽に向ふが如く、忽ち消え亡せて、其影をだに止むる能はざるなり。ソロモンの榮華を以てして、尚は且つ然りとせば、世の謂ゆる華麗といひ、艶美といひ、鮮娟といふものゝ價値や知るべきなり。

人はその天性に於て美を好み、美的精神を有す、隨つて美を求むるは自然の傾向なり。而て女子が最も美の心情に富みて、磨澤し、潤色し、修飾して以て、此の心情を滿足せしめんと努むるは、蓋自然の慾望にして、强ち咎むべきにあらざれど、その磨澤や、潤色や、修飾や、みな天然の美を發揮するに止めざる可らず。若し磨澤その度を過ごし、潤色その規を失ひ、修飾又た修飾を重ぬるに至りては、自然の美は損傷せられ、掩蔽せられ、遂に亡滅して、全く其影を留めざるべく、斯の如くにして、天與自然の美は復び之を求むるに由なからん。

文明とは美を意味す。美は或意味に於ける贅澤なり。奢侈なりとは或學者の唱道するところなり。文明の美を意味するや固より論なし。然れども美が贅澤奢侈の謂なりといふに至つては、予輩は之に首肯する能はず、否な極力之に反對するは、寧ろ世道人心の爲に謀りて、忠なる所以の道なりと信ず。世界文明の進歩して生活程度の昇進するに隨ひ、美的要求も亦た益す進みつゝあるは、自然の數なりと雖も、美の要求の頗る急激なるが爲め、遂に奢侈に耽らざるべからざる必要あるか、贅澤に流れざるべからずとの理由あるか、而て奢侈と贅澤とが、却て美を求むる所以の道にあらずして、偶々以て天然の美を損傷し、蔽掩し、亡滅する所以たるに止まるを知らば、誰れか奢侈と贅澤とを以て購ひたる人爲の矯飾が、如何に至愚に始まりて至愚に終らざるべからざるを笑はざらんや。蓋斯の如くなれ

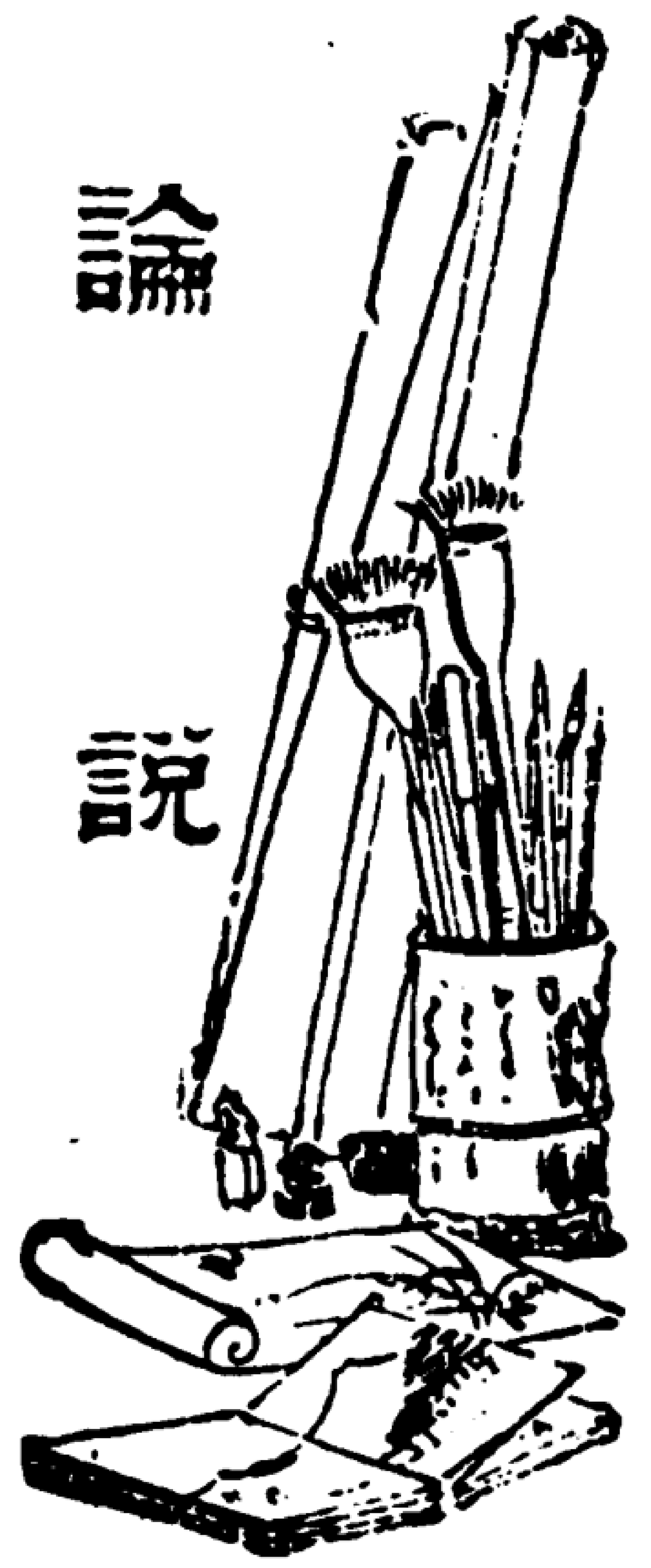
ば、謂ふところの文明もまた恐らくは其の光輝を失ひ、其美を沒せずんは非ざればあり。故に予輩は言はんとす、奢侈贅澤は文明の謀反者にして、矯飾は則ち美の賊なりと。說いて此に至れば、予輩は喟然として嘆ぜずんば非ざるなり。現今世界の風潮が、奢侈贅澤に流れて、殆んど究極するところなきの狀勢あるは暫らく言はず。我國上下社會一般婦人の風習が、美を求むるの頗る急なるより、その容顏を潤澤する點に於て、其の衣服を裝飾する點に於て、競ふて華麗ならんことを是れ勉め、知らず識らず、妖艶の姿を呈露し、淫蕩の風を馴致して、其弊の及ぶところ嚴肅なる家庭の婦女を席卷し、讀書勤學に身を委ねたる女學生をも之が渦中に投じ去らんとするの形勢あるが如きは、是れ豈に歎すべき現象にあらずや、それ我國婦女頭髮、衣裳の流行といふもの、多くは妓流娼家の間より出づるを常とす。而て今日の流行なる者が、唯だその艶ならんことを競ひ、麗ならんことを爭ひて、毫も高尚優美の氣風なく、徒に華美艶麗を尊ぶによりて之を見れば、その因る所、基く所又た知るべからずや。試に例を擧て之を謂はんか、束髮は今の流行の一なるべし、然れども香を施し、油を傅け、梳櫛結束一毛絲も擾れざるに至りては、高島田、銀杏髷と何の選ぶところかある。蝦茶の袴は女學生たるに適すれども、衣袖を長うし、衣服を派手にし、長帶紅裙して憚からずんば、袴を着くるの効用は自ら減殺せられざるを得ず。之を聞く、往きに文部省に招集せられたる高等

女學校長等は、痛く都下女學生の風習の華奢に流れんとするの傾きあるを慨し、之が救濟の方策を講じて當局の反省を促がせりと、焉んぞ知らん、此の風習は獨り東京府下に止まらずして、漸やく各地にまで浸潤せんとしつゝあるを、予輩近ごろ西南の各地に遊び、また東北の各縣に行きて、女學生と相逢ふ毎に其の衣服調度の好尙頹然として奢侈に傾けるを見て慨然たらずんばあらざる也。

我國古へより東方美人國の稱ある所以は、吾國の婦女子が高尙優美の風に富み、品位のすぐれたるものあれば也、粉飾に巧みして艶麗なるが故にあらず。潤色を専らにして妖冶なるが故にもあらざる也。夫れ高尙優美なる品位は天然の美の發揮にあらずや。今や則ち天然の美の發揮を抑止して、人爲の工夫なる矯飾艶麗を以て之に換へんとするに至つては、高尙優美の品位は忽ち埋沒せられて、東方美人國の名もまた長へに湮滅せん。斯の如きは心ある婦女子の堪ゆべきところなるか、心血を有する女學生の忍び得るところなるか。

芥子園は唱ふて云はく。語を寄す故鄉の窈窕兒。花の如きは是れ好容姿にあらず。西施笑ふ勿れ東家の醜。垢面蓬頭未だ必ずしも痴ならずと。垢面蓬頭猶は痴ならずんば、簡潔蕭洒天然の美を失はざる裝ひこそ、一般婦人殊に女學生の尤も守るべきところなれ。徒に花の如くならんことを求むるは、偶々以て其の運命を薄からしむる所以たらずんばあらざる也。（青眼子）

論説



女學の勃興

三輪田女學校長兼日本女子大學講師　三輪田眞佐子

歳月流水の如しと、げにさる心地こそすれ。おのれ、本紙に於て、讀者と相親むこと十數年ありしかば、筆は折れ、紙はつきんまでも、女子界の研究を共にせんと誓ひしが、唯だに多忙なる身を以て、こたび、三輪田女學校を設立し、ます〳〵、女子教育のため盡さんと思ひ、一層の多忙を増しけり。これを以て、鶯の初音を聞きしころ筆をとめし以來、今や杜鵑の忍音を聞くころまで、讀者に消息を傳ふること能はざりしは、本意なきわざにこそ。さればにや、四方の讀者より、文を以て、なに故女鑑にものせぬかと、たづねらるゝこと二三に止まらざりき。加之、記者の君よりも寄稿せよと求めらるゝこと切なりけり。されど、怠るにはあらず、止むを得ざりしを察し玉へよかし。勿論爾來閑を得んには、つとめてものすべし。

目下おのれの念頭最も歡ぶべき現象は、女學の勃興にこそ。見よ、いづれの女學校も定員を越え、いづれの女學雜誌も盛大を極むる姿にはあらざるか。されど、つら〳〵考ふるときは、盛者必滅の理にもれざるなきか。即ち女學の勃興は、一時の流行的風潮にはあらざるかと疑はるゝなり。如何となれば、女子にして高等の學問を研究せんとするものは、果して學問の價を知りて、所謂學問のため學問するか。或は、その學校の効果を實地に豫期して學問するか。更に普通の女子教育を受

げんとするものも、眞に教育の必要を感じて校門に入るか。

思ふに、高等の女學を修めつゝあるものは、一種の夢想を懷きて、これを理想とするものなきにあらず。されば、之は失望を以て終るべし。從ひて、その反動女學の衰退を來すべし。亦普通の教育を受くる女子は、單に卒業といふ形式上の名を以て滿足するものなきか。勿論、世に卒業せし處女の稀なる數年前にありては、そがため良緣を得、好運に逢ひし例なきにあらざれども、今日は、既に實力と實踐を尊ぶを以て、單に名目のみに安んずるものは、異日の悔あるべし。由りて、其の影響するところは、女學の隆盛を妨ぐるならん。されば、今日女學の勃興を見て、直に歡ぶべきにあらざるなり。

本來、ものは自然に從ふものにあらざれば、遠大の勢力を有するものにあらず。然るに今日の女學は、自然の發達進步にあらずして、殆ど人爲的の增大なり。蓋し人爲を以て自然を助くる必要はなきにあらざれども、人爲のみに職由する結果は恐るべきなり。然るに今日の女子教育は、人爲にて增大せしが如し、如何となれば、一時に數多の女學校を起し、その人氣に驅られて、流行的に就學するもの少からざればなり。

おのれが、つねに最も憾みと感ずる點は、せめて女子教育のみなりとも、女子の手にて施されんことを望むべきに、數多の女學校は、男子に由りて設立せられ、甚しきは、教育の如何なるものかを解せざる人にして、女子教育を業とするものも出づるに至れり。これ明治の女子教育上一大汚點ならずや。

或人曰く、女子は統御の才に乏しきを以て、止む

を得ず男子に依囑せざるを得ずと。されど、女子教育の要は、良妻賢母を作るにあり。而かも良妻賢母の實は、徒らに學問技藝を授くるも、目的を達すること能はざるべし。唯かゝる完全なる婦人を作る方法は、身を以て感化の任に當るにあり。故に人の妻たりしことなく、人の母たりしことなき男子にして、感化の任に當らんとするは難きわざならずや。

勿論男子と女子に共通なる德性は、兩性中いづれが感化の任に當るも可なりと雖も、女子に特有なる性格は、女子にあらざれば知る能はざるべし。但し男子とは言ひながら、古今東西の學に通じ、或は自ら、日本は更なり、歐米の地を踏みて深く觀察せし如きものは、一種の理想的女子教育を施すを得べし。決して身に學識あるにあらず、亦經驗あるにあらず、唯一時の機に投じて、女子教育を職とする如きものゝ能くするところならんや。要するに今日の女子教育は、人爲的に増大せしのみ。未だ自然の發達にあらざるべし。果して自然の發達を待つに至らんか。女子自ら女子界の福祉を謀らんため、教育の道を開くべし。況んや、各種婦人會の如きも、女子自ら經營する能はざる限は、自然の發達進歩と言ふべからず。惜哉今日の婦人會は、多く男子の助力を仰がざるもの稀なり。故に異日女子自ら女子界を支配する能はざる限は、女學の勃興も名のみにして、實なしと言はざるべからず。

斯く言ふも、おのれは、男子の女子界に干渉するを以て、強ち非とするにあらず。唯今日の女學に於ける勃興は、男子の誘導補助に由るを以て、眞に婦人の名譽にあらざるを言ふのみ。亦且つ男子は、婦人の心理に通ぜざるを以て、必ず女子教育

は、將來婦人の手に由りて行ふべきものと信せり。少くとも、女學校の設立及び婦人會の創立の如きは、固と女子自らの任なり。勿論其の任をば女子の手に盡されんか。一朝男子にしてこれを管理するも、歷史上感化の効あるを以て妨げなし。希くは、女學勃興の結果として、有爲の婦人輩出して、名の實に適はんことを。

禁酒禁煙について（承前）

靜岡縣師範學校長　大島多計比古

私は考へます、苟も世の中流以上に立つ所の人は社會の模範を以て自ら任じ、自己肉体の慾を犧牲に供するばかりでなく、社會の爲風敎の爲には、社交上種々の不便、不都合、困難、迷惑をも耐へ忍ぶ位な覺悟を持たねばなるまいかと思ふので御座います。況んや家庭を淸め、社會を正し、風俗を矯め直さうといふ高尙純潔なる理想を有して居らるゝ貴婦人令孃に於てをや。

そこで喫煙ですが、是れは其の以前私が考へて居たやうな無害無益なものではないのです、世人の多くは以前の私と同じやうに禁煙をインノーセントな者と解して居るやうですが、夫れはとんだ間違ひであります、禁煙は人の氣力を消耗するものである、人の體力を消耗するものである、呼吸機を害し、視力を害し、齒牙を害し、味覺を害する等の外に、身體及精神の發達を妨害するものである。ですから喫煙家及喫煙家の子孫は通例身體の發達が不完全で、元氣が乏しくて、記憶力が鈍いやうです、禁煙の害は飲酒の害に劣らないやうであります。

抑煙草は食物ではなくて毒物です、「ポピュラルサイ

エンス、モンスリー」に、二本の巻煙草の中には一度に之を頓服せしむれば人を殺すに足る程のニコチンが含まるゝと言ふてある、通例始めて之れを喫するものが恐るべき苦惱を受くるを見れば其の毒物たることがわかるでせう、又喫煙は愉快平穏の感を生せしむる効ありといひますが、これは一時毒性の爲め神經を麻痺して或る局部を不感覺と爲すに由るからである、故米國大統領マケンレー氏が狙撃に遭ひしとき、手術功を奏せざりしは、其の平素嗜みし煙草の毒の爲であつたといふではありませんか？ロルド、ベーコン、は『喫煙の人は腦を奪ひ去る秘密の快樂である』と曰ひ、「發狂及び神經病評論」の記者は兒童の神經病及び白痴の大部分を父母の煙癖に基因すると斷言しました。

ベンジャミン、フランクリンは左の通り申して居ました。『如何なる暴虐な政府でも人民が愚痴惡癖によりて自身に重く課税するに比すれば、其の半額をも敢て課税せざるべし』と。

實に然り、今日我國で用ゐる煙草の量は毎年千〇八十一萬千九百三十二貫目であると申すことですが、之れを代價に見積ると少くとも三千六百五十萬圓計りとあるので此の夥しき金額が毎年空しく燒き盡されるのである。今試みに、外國から我國に艦隊を派遣して、毎年三千六百萬圓の國產を破壞するとしたならば、我國民の愛國的憤激は果して如何計りでありませうか？又或謀逆者が斯る巨額の國寶を破滅するとせば、國民の正義的憤激は一層高く且つ大なることでありますまいか？然るに毎年斯る巨額の財寶が空しく火中に投せらるゝのみならず、國民の體力と心力とを斷えず消耗しつゝあるのを傍觀坐視するとは、餘りにのんきな

譯ではありませんか？そうして財政困難なり、外資を輸入すべし、人民窮迫せり、租税を輕減すべしなど〻いふ嘆聲は吾人の屢耳にする所であるが、しかし、財政の困難を醫するは外資輸入の他に好手段がないでせうか？人民の窮迫を救ふは租税輕減の外に良方法がありますまいか？否々、これ等の手段方法は抑末です、枝葉です、即ち策の最も得たるものとは申されますまいかと思ふので御座います。

財政の困難と人民の窮迫を救治せんには、枝葉の術を後にして、根本の策を講せねばならぬのでありまして、結局國民全體が質素儉約を重んじ、着實眞面目を貴ぶやうにあらねばならぬと考へられますから、何はともあれ、第一着に質素着實といふ此の良風美俗を妨害せる其の一大原因に大に打撃を加へ、之れをして全く其の跡を絕たしむるやうにするのが即ち人民の根に培ひ、國家の本を養ふ所以であらうと思ふので御座います。

夫れ故吾人の最も恐れねばならぬものは、敵國外患でもない、竹槍席旗でもない良風美俗を妨害する一大原因にして、而かも日常個人が耽溺しつ〻ある所の酒と煙草で御座います。然り喫煙飲酒に費す金額の夥しさと、之れに伴ふ害毒と損失とを思ふたならば、誠に寒心すべきの極みではありませんか？

然るに飲酒喫煙の弊風を悉く社會から排除したならば、政府は巨額の税源を失ふではないかと心配するものがないとも限らぬが、元來政府が人民の愚痴と惡習とに依りて國庫を充實さうとするは、德義上正當ならず、財政上利益ならず、寧ろ人民を一層善き有樣に教育するこそ財政上、德義上、共に益ありと申さねばなりません。而して若し人

民が此の巨額の財産を貯畜するとせば、今まで政府が課税したる金額を支出するは蓋し容易でありませう、加之國民の健康、道徳、名譽、財産其の他、有形、無形の幸福の増進は、實に驚くべきものであらう、そして警察、監獄、裁判所等の費用は減じ、貧民の如き、棄兒の如き、租税滯納處分を受くるもの丶如き、皆其の數を減ずるに至るは疑ふべからざることであります。

我國古來冠婚葬祭等の祝儀不祝儀に必ず酒を用ゐる習慣ですが、元來葬禮や、法事のやうな、悲みの情に堪へない時に酒を用ゐるのは、絶對的よろしくない風習ですから、斷然やめるにしくはない、冠婚の場合の如きも、別に酒を用ゐぬ儀式を定むる必要がある。これも風俗改良の重要問題です。少くとも今の飲酒を重んずる風習を改めて、世人一般が飲酒を卑むやうな風にしたいものです。

酒は毒です、毒は一滴でも服すべからず。蓋し、如何なる毒物でも其の分量が過ぎないときは、決して即坐に斃れるものではない、酒も少しく飲んで居れば急に人を斃すやうなことはないが、いつか、其の人の身體に害を爲すことは免る丶能はざる譯で、此の毒物なる酒を、自らも勇みて飲み、人にも強ひて勸むるといふは、返す／＼も淺ましき限りではありませんか？而して萬一にも、藥用として之れを用ゐる場合には決して自分丈の考で隨意に飲用してはならぬ、必ず嚴正禁酒主義を執る醫師の處方に據るを要するので御座います。

然るに、世に節酒説など丶いふ論を唱ふる人がありますが、元來節酒といふはなか／＼困難な事で、實際禁酒よりもむつかしいので、いつの間にか知らず識らず酒量が増すやうな譯になり勝なも

のであります。即ち全き禁酒は決して酔人を造らす、節酒は多くの鯨飲家を造り出すと申しまして、つまり節酒主義と云ふは駄目な事であります。或人の道歌に『雨ならば宿もかるべき夕暮に霧にぞいたく袖ぬらしける。』とありますが、實に其の通りで少しなればといふ油断は遂に袖ぬらしけるで、大害を來すので御座います。レビット夫人は、『一滴の「アルコホール」は其人を傷ふこと大砲の如し』と申されましたが、實に名言でありまして、飲酒家と自殺者とは同一様だと考へられます。即ち盃を口にふくむは刄を喉に當てると一般であると思ふてよろしからうと存じます。

曾て米人アケマン孃がこんなことを申されました。

『舊約全書に、女子は男子の肋骨より造られたといふことが書かれてあるが、夫れは兎も角もとして、今の婦人は今の男子の脊骨となつて働かねばならぬ』と。

實にその通りなので、柔弱なる、無氣力なる、自信力の乏しい、克己力の缺けたる男子が若し世の中にあるとすれば、どうかこれ等男子の腰骨又は脊骨と爲つて、あなた方に大に力を盡して戴かねばならぬので御座います、柔能く剛を制すとも申しますから。

實に酒は百厄の長です、喫煙と飲酒は百の害があつても一の利がないのです。どうか世の喫煙家飲酒家をして此の目に見えぬ、而かも強大なる束縛を脱せしめて、斯かる惡習癖から自由ならしめられよ！酒や煙草といふ無慈悲なる惡魔の奴隷たらずして、彼れを征服する主人たらしむるやう努められよ！どうか婦人の隱れたる涙を以て、此の汚れたる社會を洗ひ、濁れる風俗を清められよ！清

き樂しき家庭と、安き正しき社會とを形造り、良き美しき風俗の發達を期せられよ！

私は禁酒禁煙に就て世道人心の爲め、矯風進德の爲め、滿腔の熱誠を注いで、敢て貴婦人令孃に援助を請ふもので御座います、貴婦人令孃！どうか私の微衷を諒せられたまはんことを切望の至に堪へません、終に臨んで貴婦人令孃方の御健康を祝します。

（完）



史傳

常盤の松

藤の舍主人

朝日に匂ふ山櫻こそげに麗しけれど、風雨一たび至らば、花片長く枝に止まらず、菊花の香ゆかしけれど、また霜雪を待たずして凋落す。ひとり寒暑に撓まず風雪を物ともせず、亭々として操を保つ松の緑ぞ殊勝なる。茲に寶曆の頃、豐後杵築に山本定道といふ人ありけり。杵築侯に仕へて江戸の藩邸にありしが、江戸の北八里計なる赤山といへる里より妻を迎へて、樂しくこの世を過しけるが、遂に寶曆八年にみまかりぬ。其子安兵衞が妻は、攝州尼ケ崎侯松平遠江守の供頭をつとめける齊田清兵衞といふものゝむすめにして、名をゑりと呼べり。世の中は末の露もとの雫のならひにて、安兵衞は、すこし惱める事ありしが、父に後るゝことわづかに五年、同十三年十二月、あら玉の春をだにむかへず、老さらばひたる母を殘して黄泉路につけり。この時りゑの齡廿歲に滿たず、蘆の葉霜置いて鴛鴦の眠ひやゝかに、菱花影暗うして孤鸞

空しく鏡にまふさま、よその見る目もあはれありり。泣く〳〵なき人をば、品川天龍寺に葬り、子とてもいまだあらざれば、然るべき方より養ひ子を求めて、その後を繼がしめたれど、おさ〳〵敷心もあらで、遂に邸をぬけ出で、行方しれずなりにけり。今はたのむよすがもあらざれば、老母はりゑに向ひ、われは赤山の生れなれば、深きちなみもいと多かり。かしこに去りて心やすく老をも送り侍らん。そなたはなほをしむべき芳紀ぞかしさとの方へ歸りてぞ父母の御心もやすかりなむ、行末は人のはからふに任せよあど慰めけるに、いかなる事を仰せられ給ふぞ、それ山本の家に嫁ぎて以來、身を外に託するの意なし。況んや母上の齢も傾き給へば、か弱き女子にてそあれ、その起きふし見奉らで、いづかたへか歸らむ。たとへ山の奥野の末にても、御跡を慕ひ、御行末を見奉るべしとぞ申しける。老母は其節操の堅きを感せしものから、さていかにしても里に歸さん方然るべしと、いろ〳〵になだめけれどもみな首肯ざりけり。されば、老母もさすがに制しかねて、わざと憤怒の相を現したり。りゑは、心中おそれを懐きながら漸く涙を抑へ、せめて御供かなはずとも、御跡をば慕ひ奉るべし。赤山にて御家の中に起臥する事能はざるも、以前のよしみと思召しあはれ軒の下だにかし給はらば、よそながら後影を拜しまゐらせむ、是のみは許し給へと歎きけるにぞ、老母は、到底りゑの心の動かすべからざるを悟りけむ。そなたのいとはしきにこそ、斯くはいひつれ、思へば、つれなき事を申せしかな。田舎住居の淋しさも、そなたをかしこに伴ひ行かば、我子もいまだ世にある心地して、慰む節も多かるべしとて、共に赤山に至り、菴を結びて住み

しが、りゑの孝養は少しも忘る事なかりき。朝は星を戴いて家を出で、夕は月をふんで歸り、薪水の勞は更なり、よろづ馴れぬ業のみ多けれど、姑を思ふ一筋に、益つとめ勵みけり。善事又千里に聞えざらむ。この貞淑なること、はしなくも松平對島守に聞え、近侍岡田源左衛門を使とし、念比に仰ごとありて、奥女中に召したり。りゑ謹んで申けるは、誠にありがたき仰には候へども、われ一度夫に別れて邸中を退きし時、二たびこの世に出でまじと心に誓ひき。まして老母もわれを頼み侍れば、よきに傳へ給へとて應ずるいろなし。なほ重ねて命ありしかども、われは初心にそむかじとて、固く辭して受けざりき。この時、使たりし源左衛門に老母の語りけるは、この婦の貞淑至孝世にまたとあるべくも覺えず、彼方に見ゆる杜の内に天神の社あり。日毎に詣づるをおのが務めとせり。雪ふれる朝は疾く起きいでゝ通ひ路の雪を拂ひ、風雨強き時は、われを背負ひて詣で侍る。是等にて常のさまも推量り給へなど、むかし夫の友なれば、いと詳しく物語りけり。源左衛門は聖の道に心をよせ、義に勇む人なりしかば、しば〳〵同輩に對して其高節を嘆じて感涙に咽びたりとぞ。この事また尼崎侯にも達し、奥方の女中に召給ひたれども、既に我君公にさへ辭せり。己は唯老の末見とゞくるの外、他にのぞみなしとて出でざりき。其後三十年の雪霜に、常盤の松の色ふかく、母子とも恙なく世を過したりとぞ。あはれ繊弱はき女の身を以て、一人の老婆に孝養を致すだに難き業なるに、君公めせども榮華に迷はず、夫に對して堅く貞操を守りたるりん女の心操のごときは、目に一丁字を知らずと雖も、決して女子の模範たるに恥おずといふべし。

「西比利亞の孝女」

宮舘さだ子

佛人「コッチン」女史著「西比利亞の放逐者」と題する書は歐洲各國の語もて反譯せられ（我邦に於ても沙漠の花となん題して反譯せられたるやに覺ゆ）版を重ぬること無數、年を閲すること半世紀の久しきに渉りたれど江湖の愛讀、今尚は依然として上梓の當時に異ならず、蓋女史は一小説として之を物したれども、其事柄は今を去ること一百年前則ち千八百一年に崩御し玉ひたる露帝「ポール」一世の時に起りたる事實を基礎とし、之に多少の潤飾を加へて編出したるものなることは、世人の知悉する所なり。左に掲載するは、此孝女の實譚なり。

孝女名を「プラスコヴィー、ロポーロフ」と云ふ。家世々露國の貴族なりしが、祖父の代に故ありて洪牙利に移住してけり。父は少壯にして墺國黒騎軍の士官となりしも、後年露國婦人を娶りたるの縁故により、再び前代の國籍を回復して、露國に歸化し、其軍籍に入りて、幾多の戰役に從ひしが、就中露土戰爭中「イスメール」及び「オチャコッフ」の包圍に際しては、其功績特に顯著なりき。

露土戰爭、終焉を告げ「ロポーロフ」は滿肩の榮譽を荷ひて、其閭門に凱旋しぬ。されど運命は常に人を掀弄す、萬死を期して戰役に從ひたる彼は馬蹄恙なく、醒風血雨の野を通り拔け、門に倚るの妻兒に迎へられて、昨日迄の戰狀を過ぎにし夢の疑物語と爲したるの間は、甚だ短かりき、突然彼は、有司の手に捕へられ、終生西比利亞放逐を命ぜられたり。彼に對する裁判は、最も深く秘密を以て行はれ、嘗に其罪名の何たるを知ること能

はざるのみならず、一件書類さへ速に廢棄せられて、其罪狀を詳にするに由なし。彼は幾度か哀訴し、嘆願したれども省せられず、終に、妻及び孝女「プラスコヴィー」を伴ひ、檻車東を指して天涯二千里西比利亞の荒原地へと押送せられたるは、いとも憐なることなりける。

東西三千五百哩、南北千二百哩、露西亞帝國の大半を覆ひ、亞細亞大洲の三分の一以上を占め、氣候最も寒冽にして、地味最も磽确なる一帶の大荒原地を稱して西比利亞とは云ふ。忍酷なる露國の政府は此地を以て罪人の流刑地に充て、罪の輕重大小を參酌して氣候の寒暖地味の豐荒を分ち、亦た服役の難易をも定むるなり、故に、罪人にして或は鑛山に服役する者あり、或は開墾に從事するものあり、或は何等の作業をも賦課せられざるものあるなり。而して政府は、是等の罪人に對し、罪の輕重に從ひて、差等ある年金を給與すれども、其額たる極めて少く、僅に餓死を免るゝに過ぎず、亦た罪狀の輕きものには、其流刑地に妻子を伴ふことを許容する也。

「ロボーロフ」の罪の何たりしやは之を知るに由なきも、其配せられたる地の、割合に豐饒なりしこと、家族の携帶を許されたること、及び何等の服役をも賦課せられざりしこと等に徴すれば、其罪の重大ならざりしことは明かなり。先づ其配流地として定められたるは、「イシム」州に在る「イシム」村とて、南方「トボルスク」州に接し、同州の首府「トボルスク」は、西比利亞中の大都會なり。東「イルチシ」河を控へ西「トボール」河に瀕し、河岸一帶の地方は、危岩亂立して、滿目蕭條、唯樅樹の兩三株づゝ、此處彼處に散在するあるのみ。かゝる地方なるにも拘はらず、「イ

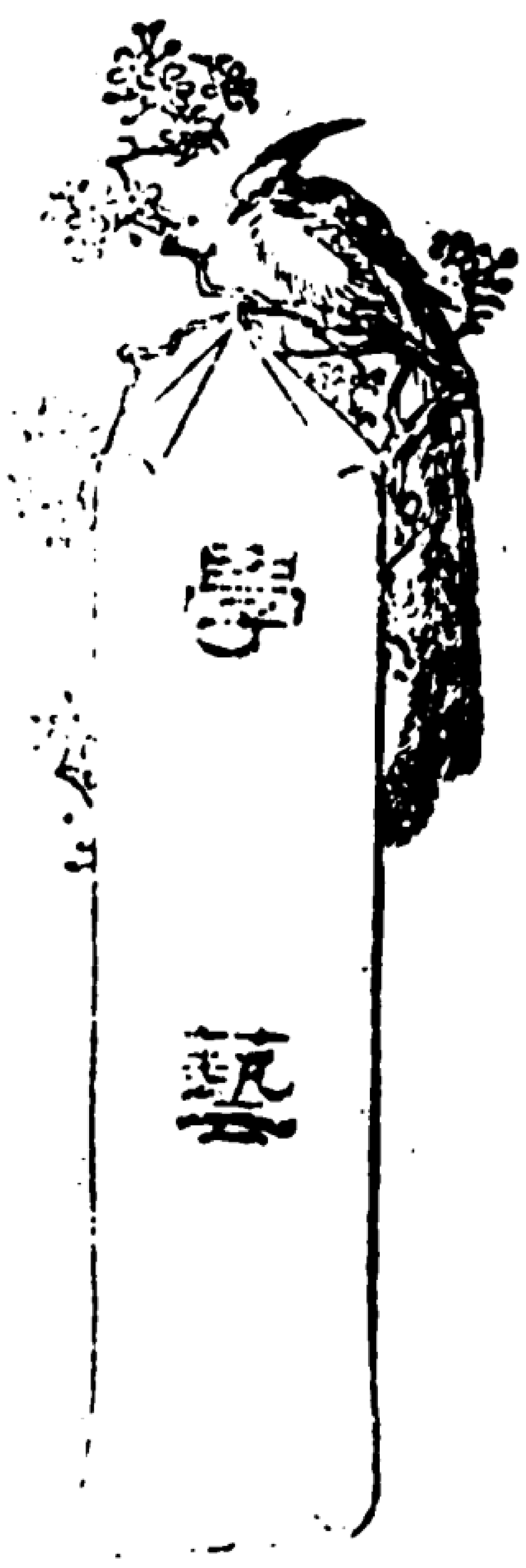
シム」一州は、荒原中の最も豐饒なる地方として、一般に是認せられ、剰へ「西比利亞の伊太利」といふ美名さへ下さるゝに至れり。蓋し同地方のかゝる名稱を附せらるゝに至りたる所以のものは、主として其一年中の四ヶ月間は、春意一齊に發動して、温き陽光に浴することを得ればなり、北地の習として、毎年九月には積雪既に大地を覆ひ、翌年五月に至らざれば、其雪解を見ること能はず。されど、造化は斯かる邊陬の地に在りても、尙四季の理法を曲ぐることなく、五月より八月に至る迄の間に於ては、樹々綠滴らんとして、鳥歌ふこと閑かに、田園穰々として、生々の氣到る所に充滿するを見る。斯くの如きは北國特有の現象にして、他邦人の夢想することさへ能はざる所なりとす。故に同地方に配流せられたる囚人にして、一定の服役なきものは、此時季を利用して、農作に從事し、多少の利得を收むることを得る也。

「ロポーコフ」は妻を挾け、一女「プラスコヴィー」を抱き、悄然として其配流地と定められたる「イシム」に到着しぬ。過ぎこし方を眺むれば、名に負ふ西比利亞の荒原は見渡すかぎり銀の如き雪に埋もれて、一緯の地平線、唯僅に大空と界を畫するのみ。嗟、昨は陣頭に劍を按じて兵士を叱咤したる人、今は寃罪を負ふて、天涯淪落の人となる。此時に於ける彼の感慨は如何なりしぞ。日々の支給金僅に十「コペックス」、（凡我五錢位に當る）是皇帝の名に依り、彼の一家を支ゆるが爲に、特に給與せられたる恩賜なりけり。當時彼の家族の少なかりしことは、まだしもの幸なりき。此時孝女「プラスコヴィー」は、未だ襁褓の中に在りて、其兩親の上に落ち掛りたる厄難の何た

るを解するには、餘りに頑是なかりし。のみならず、前後境遇の急變を知らざりしことゝて、其稍長ずるに迨びても、現在の境遇を、此上なきものゝ如くに思ひ居るこそ是非なけれ。左れども天禀至孝なる「プラスコヴイー」は、其未だ十二歳に達せざりし頃より、或は村人の爲に洗濯の手助を爲し、或は農作物の刈取りに雇はれ行きなどして、僅ばかりの賃金を得、家計の一端を補助することを以て、自己の任務とは爲したりき。

母は貧しきながらも、家事萬端の整理に忙はしく、まだ女心の優しさに、現在の運命をば、天の爲せる配劑と觀念して、多少諦めはしつれども、父なる「ロポーロフ」は、少壯より兵馬の間に人と成り、活潑なる生活を辿り來りしことゝて、滿腔の不平抑ゆるに由なく、折々大息を洩しながら、深き思ひに沈むことのみぞ多かりける。

或年の事にてありき。中央政府の一官吏公用を帶びて、西比利亞に派遣せられ「イシム」に到着したりしかば「ロポーロフ」は、此好機を利用し、西比利亞總督を經て、露國皇帝に上るの哀願書を認め、之を同官吏に托して、執奏を乞ひしに、快く其承諾を得たるのみならず、歸京の上は出來得る限りの力を盡し「ロポーロフ」赦免の爲に斡旋する所あるべき旨を誓ひて、袂を分ちたりき。爾來年は年と共に暮れ、天地春幾度か回りて雪解の荒原にさへ、草木一齊に其生氣を回復したること屢々なりしにも拘はらず、「ロポーロフ」の一家のみは、春風到らず窮命舊に依りて依然たり、朝夕門に倚りて、よき音信にてもあれかしと、待ち焦れたるは空望にして、聖彼得士堡なる皇帝の恩命、杳として聞くこと能はざりし也。(未完)



和歌講義

藤丸つま子

大伴家持

しき島の道のちはやぶる神代に起りたるゆゑよしは、今更めきていふべき事ならねど、その後、つぎ〳〵の帝、臣たちなどの歌ひけむ心の華もいと多かめれど、わづかに古き書どもに、その一端の匂ひを止め、大方埋木の朽はて丶、世に殘らざりしぞ口惜しき。然れども、あをによし奈良の朝に及び、上は仁徳天皇の御代より、下は淳仁天皇に至るまでの歌、四千余首を集めて萬葉集と名づけ、この道に裨益を與へしこと實に少なからず。かくてこの貴重なる歌集の撰者は誰ぞ、かの橘諸兄公の撰び置きたるを後に大伴家持が増訂して、始めてまつたきものとなしたる也。家持は、大伴旅人の子なり。天平年間越中守に叙せられ、次で數多の武官を經て、頻に累進し、延暦三年には持節征東將軍となり、常にさわがしき東北諸國を鎮めて治績ありしが、翌くる四年病んで歿しぬ。この時、左少辨繼人等、皇太子の命をうけて、藤原種繼を暗殺せしに、事顯はれて捕へられたり。されど、その科を輕からしめむとて、こたびの謀主は家持なりと訴へ、なき濡衣を地下の人におほせければ、ここに家持の名籍を追除し、忘れがたみの永手をば隱岐の島に流せり。後ち、彼等のよこしまなる奸計分明となりて赦還に遇ひぬ。桓武天皇遺詔

して、家持を本の位に復し、その耻辱をそゝぎ、赤き心を表し給へり。もと大伴氏は代々武士の家にて、家持は終世武事に従ひたれど、文の道にも深く、最も和歌に巧なりき。而も武勇に富める歌甚だ多ければ、國ぶりをたゞ女々しき業と嘲ける人々も、之を三誦する時は、將に顔色なからむとす。畢竟彼は、武人としてはあまり成効せざれども、和歌壇に於ては、後人の師表となり、その名聲を不朽に傳へたり。

慕レ振二勇士之名一歌一首　（萬葉集十九）

智智之實乃、父能美許等、波播蘇葉乃、母能美己等、於保呂可爾、情盡而、念良牟、其子奈禮夜母、大夫夜、無奈之久可在、梓弓、須惠布理於許之、投矢毛知、千尋射和多之、劔刀、許思爾等里波伎、安之比奇能、八峯布美越、左之麻久流、情不障後代乃、可多利都具倍久、名乎多都倍志母

◎語釋　智智之實云々　ちゝの實は、木の實なり。葉は楊梅に似て、實は胡黏木の子のごとしと。今箱根わたりにて、銀杏樹を然かいへり。調の上より父の枕詞とせる也。父の尊は父を尊びていひたる也。●波播蘇葉乃云々　柞の木の葉にて、槲の古名、母とかさねつゞけむための枕詞なり。●於保呂可爾大凡にの意。●其子奈禮夜母は、上の於保呂可爾云々に照應せり。父母の大凡に思ひ給ふらむ、その子にてあるか。決して然らず。深く心を盡して、育てられし吾身なれば、いかであだに年月を過すべきといふ意なり。夜はやはと同じく反語、母は歎きの助辭也。●大夫夜　益荒雄にて武人をいふ。このやは下の可在に呼應し、反對の意を顯はせり。●梓弓云々　古へは梓にて專ら弓を作りたれば梓弓と

いへども、たゞ弓の事と思ふべし。弓末は弓繃にて弓の上端の張り出したる所より先をいふ。弓を持ちて、いかにもをゝしき樣也。●投矢毛知云々、書記の神代卷の、高產靈神が天之若彥を殺す條に、於是取レ矢還投下之、云々とあるに基きたるならむ乎。單に矢と心得べし。前の梓弓にて矢を遠く射渡すこと。千尋は遠き形容にて、弓の強き事と、そを持つ人のなみ〳〵ならぬことゝは推し量られぬべし。●劍刀云々　刀劍を腰に帶び、多くの峰谿をふみ超えて、征伐に行く風情なり。　等里波佉は、取佩にて取はそへ言葉、はぎは佩ぶること。足曳。山はすそを長く曳く故にその枕詞としたる也。八峯は多くの峯の意。●左之麻久流云々は、古義に、差任る也、官の差任る情を障らず、いそしむは忠臣勇士の意なりとあるぞ眞に近かるべき。今是に從ふ。

さやるは、障るにて妨害の意也。●後代乃云々後世の人の語り傳ふべく、功名を立つべきものぞとなり。母は歎きの助辭也。

◎大意　こは家持が、勇士の名を立つるを慕ひて詠めるなり。其意をいはむに、父母が、大凡に思ひ給ふらむ子にてあらむや。隨分心を盡して育てられし吾身(家持にあらず廣く勇士をさす)なれば、ア、益荒雄たる者は、さても空しくくちはつべきにあらず、其恩を心に體して、常に心を練り、兵馬を養ひ、一旦叛亂あらば、その強き梓弓の手束を握りて、本末を振り起し、投弓を之につがへ、遠きに射渡して敵をたふし、また、刀劍を腰に帶び、多くの峰谿を超えて、朝廷より任命せし情を障らず、そのごとく、叛亂者を平げ、赫々たる威名を樹て、後人の、彼の人は實に英雄なりと語り繼ぐやうにするは勇士の本

分ぞ。宜しく斯ある可と也。抑萬葉集は古今集の如く温雅ならず、新古今集のごとく艶麗ならざれども、雄大悲喜、各自然のまゝを詠じ、恰も野の花のおのがむき〳〵匂ひいでたらむがごとし。故にをさなく詠みなしたる所、かへりて人を感動せしむ。この歌も、また自然にいで、をゝしさやさしさ交々迫まりきぬれど其勇士を形容したるあたりは、最もをゝしく、肉をどり魂慄きて、身も其境に在るの感あり。また父母はわれを心配しつゝ育てたる大恩あれば、その報恩として、家の風をも吹かせ、兼ねて國のために盡すべしといふ教訓的の意味を言外にふくめたるは、巧なりといふべし。士氣の萎微せる今日、この歌を講ずるも、また所以なきにあらずぞかし。

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（三十五）

よさりの、御ゆどのとても、さまばかり、しきりて、まゐる、ぎしきおなじ。

御ふみのはかせばかりや、かはりけん、伊勢のかみ、むねときのはかせとか、れいの孝經なるべし。

又、たかちかは、史記の文帝のまきをぞ、よむなるべし。

釋義

○よさりの、御ゆどのとても　夕の御湯殿の、御儀とてもの意なり。よさりは、夕さり、などと、同じこゝろにて、夜といふにおなじ。空穗物語、初秋の巻に、今は、よさりの御物になりて、云々、又、落窪物語一の巻に、よさりは、三日の夜なれば、いかさまにせん。今宵、

餅、いかで、參るわざもがなと、云々など見ゆ。
今も大和地方にては、たゞ、夜といふべきを、よさりといへり。

さて、こゝに、夕の御湯殿のことをいひて、朝の御ゆどのの御儀式をあげざるは、脱ちたるか、はた、はぶきたるか、とにかく、とゝのはぬかきざまなり。清水宣昭ぬしの釋に

こゝに、かくいへるに、前に、朝の御湯殿のことの見えぬは、脱ちたるにや、又は、前のとりのとき誤りなどあるにや。

と、いはれたるは、至當の考へなり

○さまばかり、しきりて　同じやうなる儀式のみ、くりかへして、御ゆどのの仕へまつるとの意。しきりは、かさねぐ\といふ意なり。しきは、もと頻きをはたらかしたる詞にて、(しきる、しきれ、しきら、しきり、しきれ、と、はたらく)度かさなること、續きいたることにいへり。榮花物語月宴に、內よりの御使、晝夜わかず、

しきりて參りつゞきたり――など見ゆ。

○まゐる、ぎしきおなじ　御湯殿に仕へまつる儀式は、同じことなりとの意なり。

まゐるは、奉仕することをいへる敬語なり。食ふ、飲む、着る、用ゐる等の敬語にかくいへるは、中古のことばづかひの一種なり。たとへば、御酒まゐる。御食まゐる。御裝まゐる。御手水まゐるなどのごとし。枕の草紙に、御くだものまゐりなどして、御前にまもゐらせたまふ。源氏物語若紫の巻に、御てうつ、御かゆなど、こなたにまゐる。など見ゆ。されば、湯を飲むことも、湯をつかふことも、敬語には、たゞ御湯まゐるといへり、上下の文をよくよまず、字典のみによりて、解

釈をくだす時は、奇妙不思議ある誤解もいでくることすくなからず、こゝろすべきことなり。

○御ふみのはかせばかりや　　御湯殿に奉仕する人たちに、かはりはなけれど、たゞ、御書を讀む博士はかりがの意。御書は下文に見えたる孝經をさす。はかせは、讀書博士なり。博士は、職員令、大學寮の條に、博士一人、掌教授經業、課試學生、助教二人、掌同博士と見え、猶、音博士、書博士、算博士、醫博士、陰陽博士、天文博士、曆博士、漏刻博士等あり。されど、もはら、博士といへるは、明經道、紀傳道の博士をいへり。

○伊勢のかみむねとき　　伊勢守中原致時

○れいの孝經あるべし　　何時もの、古文孝經、天子の章ならんの意なり。天子の章とは、

愛レ親者、不三敢惡二於人一、敬レ親者、不三敢慢二於人一。德教加二於百姓一、刑二于四海一、蓋天子之孝也。

甫刑云、一人有レ慶、兆民賴レ之云々

と、いへる章をさせり。この章を三遍讀むこと、御産部類記にも見ゆ。

○たかちか　　大江擧周

○史記の文帝のまき　　史記は、四庫全書簡明目錄、正史類に、史記、一百三十卷、漢司馬遷撰、凡一百三十篇、缺其十篇、褚少孫補之、考漢志載史記百三十篇、不云有缺、則當時已與少孫書合爲一矣。古註存者、有裴駰、司馬貞、張守節三家本、各爲書、宋元豈刊本、合三家駐爲一、至今仍之とあり。文帝の卷は、如何なる處あるか詳ならざれど、上に見えたる黄帝の章などと同じ意味の章なるべし。

○をぞよむなるべし　　べしは、べきの誤寫ならん、二段の係辭の、ぞのあるときは、かならず

べきと結ぶが定則なればなり。

評解

夕の御湯殿の儀式とても、たゞおなじ儀式を、いくたびも、くりかへして、御湯をあびせたてまつるのみにて、儀式は、いつもおなじ。奉仕の儀式には、別段かはりたることもあらざれど、たゞ、御湯殿の時、高欄のもとに立ちて、御ふみを讀む、御ふみの博士のみ、前の人とはかはりたるならん。今夕の御ふみの博士は、伊勢の守、中原の致時の博士とか申すことなり、さて、讀みあぐる御ふみは、いつもの古文孝經、天子の章ならんか。

また、大江の擧周は、史記の文帝の巻を讀むならんか。

和畫通信講義（第廿九回）

山崎彩峨

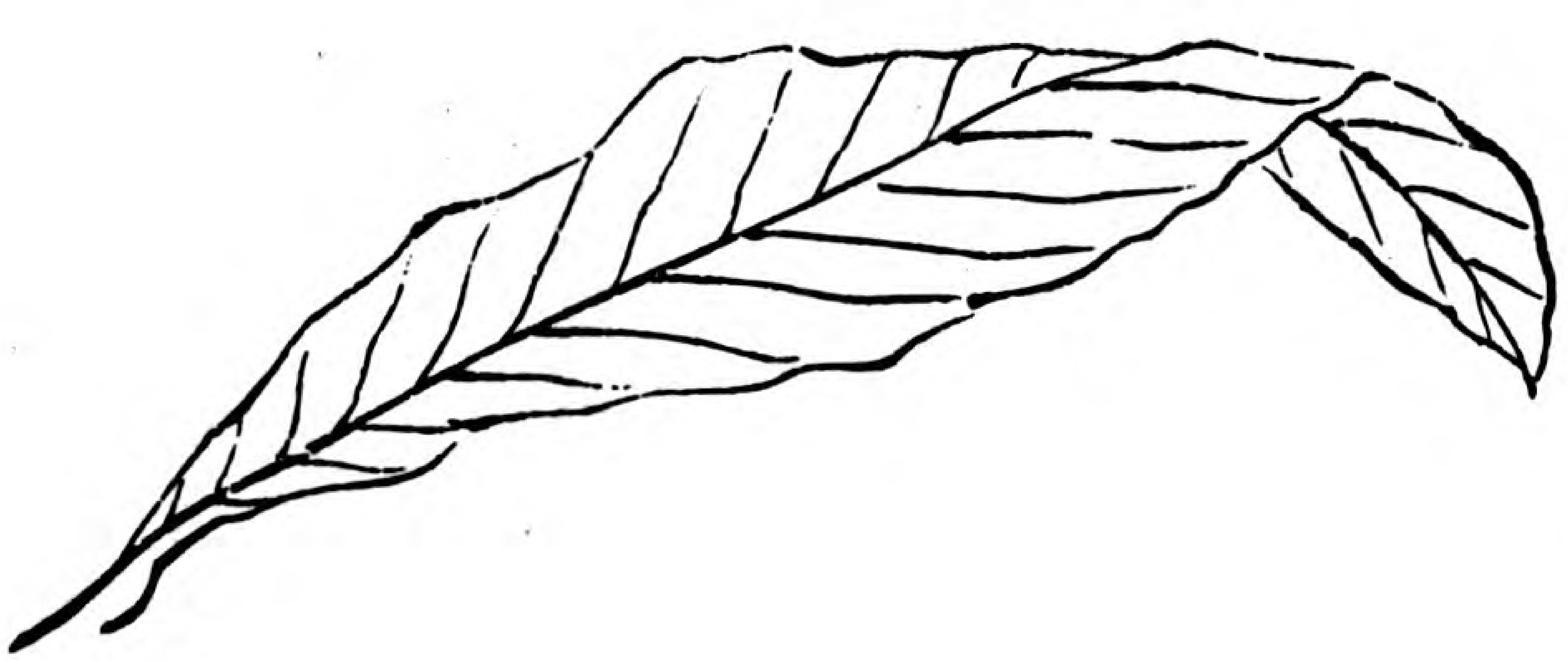
墨にて描くには、淡墨にて、實形を勾勒に描き、莖は淡墨にて描く。葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して描き、乾きて後ち、濃墨にて、果點葉脈を入るゝなり。

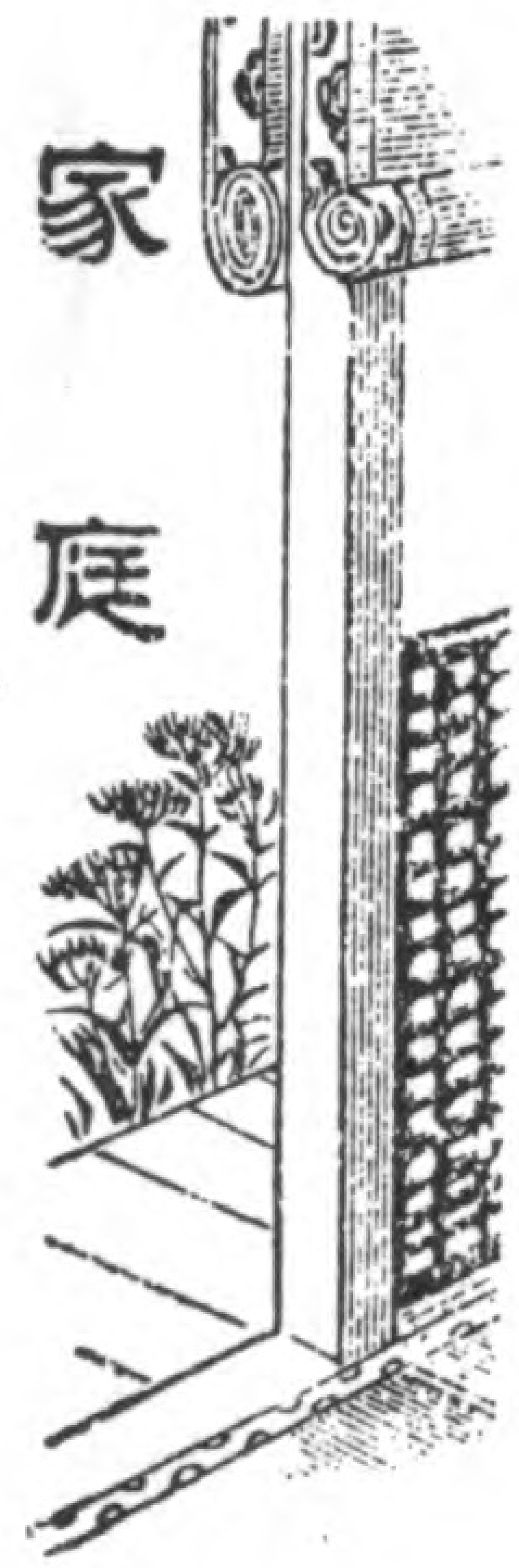
彩色にては、淡墨にて、實形を勾勒に描き、赭墨にて莖を附し、赭墨、或は赭墨を含めし筆先に、墨または青色岱赭等を附して葉を描き、濃墨にて、果點葉脈を入れ、後ち、實に、黄色、もしくは、赭黄色をぬるなり。

蚊遣火の烟にそれる
ほたるかな
許六



葉脈





愛兒と慈母

みむら

●緒言

昔、一人の賊、とある家に忍び入り、金銀財寶を奪ひ取り、今や逃れ出んとしける折柄、ふと、愛らしきみどり兒のにこ〳〵と笑めるを見て、其愛らしさに、暫しの間いかで見現はさるべきと、近寄りつゝ、初めは顔のみにてあやしつゝありしが、其笑顔の限りなく愛らしさに知らず識らず、今は己れの賊として忍び入りたるをも打忘れ、あわよき兒よ、あはれ愛らしき兒よと、聲も次第に高らかにはめそやしければ、遂に家人の目を覺して捕へられきとの話あり、

世にも恐ろしき盜賊をなすなるさもしき心の人すら、一二歳の兒の愛らしさに見とるゝこと此の如きを、まして、情け深き婦人として、慈愛厚き母としては、いかばかりか可愛きものならん、

されば、山之憶良とていと古き代の歌よみは、世界に名高き釋迦尼佛さへ其子羅睺羅を愛せられき、況んや凡人をやとて

　白銀も黄金も玉も何せんに
　　まされる寶子にしかめやも

と詠じ、平兼輔朝臣は、

　人の親の心はやみにあらねども
　　子を思ふ道に迷ひぬるかな

とよまれき、

げに、著者も此歌を讀むごとに、知らず〳〵恩愛の涕もこぼれぬ、されば、此愛らしき兒のいや

がうへに愛らしく育たばやと、多くの世の人の親の爲に、愛兒は如何に生れいで、いかに成長しいかに愛らしく生ひ立つか、從つて之を愛づるには如何にすべきか、又之を育つるにはいかにして可なるか、眞に兒の愛とは如何、眞にはゝのつとめとは如何等をいでやこれより書きつゞりなん。

●愛らしき笑顔

かくも愛らしき笑顔は、そも何時頃よりか發達すべき、プライエル氏の實驗によれば、生兒第十日と第十二日目とに、初めて微笑を呈せしを見しも、こは未だ眞の笑ひにはあらで、第二十六日目に初めて眞正の笑と一種の音聲とを發せり、其後二十九日目には一物を凝視して笑ひ、三十日目には母の金指輪を見つめて笑を催し、三十五日目には雨滴の傘に落つるを見てオ、と叫びて笑ひ、四十日にして、母の顔を見て笑ふ事益々明瞭確實となれり、而して入浴するか、又は色彩の鮮明なるものを見るか、又は音樂を聞く時は、必ず笑を生ずるに至れり、故に笑は凡て六週より九週に至りて發達するものなりと稱せられ、ハイフェルデル氏も第四週に、シヤンチー氏も第六週乃至第八週に、ダーウキン氏も、第七週乃至第八週に、特に眞の微笑は第四十五日目に初まれり。シギスムンド氏も第七週乃至第十週に笑ひ初め去るを見たりと稱するによるも其發達の時期は頗ぶる遲く、漸く第四週以降と知るべきあり、特に眞の愛情より起る笑は二ケ月の後にして、眞に音樂を好みて笑ひ初むるも、或人は二ケ月の後と云ひ、ダーウキン氏は四ケ月の後なりと云ひ、眞に同情的の笑に至りては、シギスムンド氏は、三ケ月の後に始めて之を見るを得べしと云ひ、要するに眞

の笑ひは、三ヶ月に至らざれば、之を見るべからずとは、デーデマン氏の説なるを見ても、其發達の容易ならず、從て慈母の注意の一層此に注がざるべからざる所以とす。彼の世にも不幸なる盲者の顔容の變化少なく生硬にして其笑のいかに淋しきか、世にも幸福なる公達姫君のいかに愛敬ありて其眼の涼しきか、蓋し一は其生れ出でゝより、見る物としもなく樂しき事となくて明し暮しゝと、一は朝に美しき物を見ざるなく、夕に心地すが〳〵しからざる事のなく生ひ立ちしとに由るのみ、あはれ氣高くして愛敬ある人たらんを望まば、げに其出生時より注意せで叶ふべきか。



夏の衛生

岳水書窩主人

衛生とは生命を護衛するの意にして、身體を強壯にし、病氣の襲ひ來るを防ぐを以て目的とす、さてこの目的を達せむには、まづ病氣の何によりて起るかを知るを最も必要なりとす、敵の樣子を知らざれば、これを攻むるも勝つこと能はざると同じ理合なり。

夏時には種々の病氣發生するも、殊に多きは急性の胃腸加答兒、吐瀉病(霍亂)、虎列刺、赤痢、間歇熱及び我邦に在りては脚氣なりとす。

急性の胃腸加答兒は種々の原因に依りて起るものなるも、その最も多くは、暴飲、暴食。不消化物酸腐物、寒熱その度に過ぎたる飲食物の攝取に依りて起るものにして、脂肪性不消化物、牡蠣、蝦

蟹、腐敗せる魚肉及び獸肉、粗製の麥酒及び日本酒、不良の「ラムチ」類、未熟の菓實、「天麩羅」、多量の餅團子類は皆な本病の原因となる、殊に日本に於ては近頃夏時氷水を飲むの習癖あり、こは最も本症を起し易きものなれば頗る不良の習慣と謂ふべし、その他感冒に罹れば本症を引き起すものなり。

○吐瀉病(霍亂)の原因は未だ十分明瞭ならざるも、プリエ、フィンクレルと云ふ人の發見せる黴菌によりて起るものあるが如し、この黴菌は後に述ぶる處の虎列剌の黴菌に甚だよく似たるものにして、學者の説に據れば飲食物或は外氣に混じて體內に侵入して以て本病を惹き起すと云ふ、この病氣は勿論大人にも發するものなれども殊に小兒に多く發し、一年乃至二年の小兒之れに罹り易く、就中人工榮養法即ち「ミルク」、摺粉等にて養育せらるゝ小兒並に離乳の時期に當るところの小兒は之れに罹り易し。

○虎列剌は西暦千八百八十三年すなはち今を距ること十有九年前に、有名の黴菌學者ロベルト、コッホと云ふ人の發見に係る「コムマバチルレン」と名づくる黴菌によりて起る病氣にして、この黴菌は或は彎曲形或は螺旋狀を呈し、之れを顯微鏡にて檢査するに、流動液中にては活潑に運動するも、乾燥するときは通例速に枯死するものにして、流動液中と雖もその中に酸類を含むときは全く蕃殖する能はず、概してこの黴菌は諸種の消毒藥に向つて抵抗力の甚だ弱きものなり、この黴菌は如何にして傳染するかと云ふに、飲食物に依りて傳染するものなり

○赤痢は寒き地方と熱き地方とにてその原因全く異なれども、我邦の赤痢は同じく黴菌その原因をな

すが如し、而してこの黴菌も亦飲食物によりて傳染するものなり

○○○○問歇熱(瘧)の原因は「マラリア、プラスモージエン」と名くる小寄生物にして、西暦千八百八十二年すなはち今を去ること二十年前にラウェラン及リヒャルドと云ふ二人の學者の發見せるものなり、この寄生物は病人の血液中に舍るものにして、近時の研究に據れば蚊殊にその雌蟲は病人の血液を吸ふて此寄生物を血液と共に自體内に取り、更らに健康人を刺してこの病毒をその人に移すものなり。

○○脚氣の原因に就ては諸説紛々として今尚ほ決着せず、故に茲に之れを省く。

既に病氣の原因を論じたり、尚ほ進みて述ぶべきは、如此疾病、就中虎列剌、赤痢は何故に好んでこの季に發生するかの問題これなり

吾人の身體は夏季外圍の氣温の昇るときは、温熱を覺え、皮膚及び皮膚の血管は弛緩擴張して體温の放散面をひろめ、汗は頻りに流れて蒸發する際に體温を奪ひ去るといへども、更らに氣温の昇るときは體内に於て温の發生を減少するの必要あるを以て、食思振はず、換言すれば體温を發生するの必要なきを以て食物の需要大に減少す、殊に脂肪類は非常に體温を發生するものなるを以て其需要著しく減少し、而して身體を動かすときは筋肉收縮緊張して體温を增すものなれば身體の運動亦減少す、吾人の身體は斯の如くして一方には體温を放散せしめ、一方にはその發生を減少せしめ、以て外圍の温度の昇降に拘はらず常に一定の體温を保たむと期すと雖ども(體温を一定度に保つことは頗る緊要にして吾人は體温常に一定の度にあるが爲めに生存し居るものなり)氣温更に上昇して、體温と同度に至り殊にその中に多量の水蒸氣を含

有するときは最早之れに抗抵する能はずして、體温四十三度乃至四十四度に昇り、呼吸及び脈搏頻數となり、終に痙攣を發して死亡するものなり、吾人の身體は、外圍の氣温昇るときは、如此變化を起すを以て、諸般の機能殊に胃腸の機能は夏季に於ては大に衰弱し、動もすれば胃の加答兒腸の加答兒を起すの傾きあり、而して健全の胃の中には鹽酸と名くる酸類ありて、食物を消化し、黴菌類を打滅し、少なくともその蕃殖を抑制するの作用を營むといへども、斯の如き狀態に在る處の胃にはこの酸類減少するを以て黴菌は容易にこの難關(胃)を通過して腸に達し、茲に於て自由の蕃殖を爲す、約言すれば夏季に於て吾人の胃腸は黴菌に抗抵するの力減弱し黴菌の蕃殖容易となる、之れこの季に虎列剌赤痢等の好んで發生する所以の一なり。

黴菌の蕃殖に必要の條件は黴菌の種類に依りて異同ありといへども、一定量の水分、窒素抱合體、(就中蛋白質は黴菌に最も適當の榮養品なり)及び温度はその主要なるものにして、黴菌は水分なき處にては蕃殖する能はず、既に虎列剌の黴菌に就て述べたるが如く、さしもに猛き虎列剌菌の如きも乾燥すれば忽ち死滅す、以て黴菌の蕃殖に水分の必要なることを知るに足るなり、而して茲に所謂蛋白質とは食物又は身體の必要成分にして卵の白質の如きものなり、この物は吾人の身體の榮養に大切なるが如く黴菌の榮養にも大切のものにして、黴菌は此物を榮養に取りて繁殖す。次に黴菌の繁殖に關係あるものゝ温度にして、虎列剌赤痢等の黴菌は身體の温度と略同一の温度即ち攝氏寒暖計の三十七度位の温度にて最も能く繁殖し、温度非常に高きか若しくは非常に低きときは、蕃殖

する能はざるか、或は死滅す、虎列剌の黴菌の如きは酸類に對するの抵抗力至つて弱く、試みに極めて少量の酸類を含む物質中に此黴菌を入るれば、全く繁殖し得ざるにも拘はらず、今之れに適度を與ふるときは、能く蕃殖し得るに至るを見る、以て黴菌の繁殖に溫度の必要なることを知るに足るなり、而して夏時の氣溫如何を顧みれば、恰も攝氏寒暖計の三十度乃至卅五六度（華氏寒暖計の八十六度乃至九十六度位）の溫度にして菌黴の繁殖には最も適當の溫度なり（水分蛋白質等は常に缺くることなし）故に黴菌は自由に繁殖す、之れこの季に虎列剌赤痢等の好むで發生する所以の二なり。

◎吾人が呼吸する空氣中には殆んど見るべからざる無數の塵埃浮遊するものにして、是等の塵埃に混じて種々の微小ある黴菌或はその芽胞（植物に種子の生ずる如く黴菌の體中に一定狀態の下に芽胞と稱する球形若しくは楕圓形の小體を生じ、このものは適當の狀態を得るときは種子より植物を生ずると同じく、發育して再びもとの黴菌となり得るものなり）存在するものなり、而してその內或る種類の黴菌は腐敗「バクテリア」と稱せらるゝものにして、この種類に屬する黴菌若しくはその芽胞の、肉類、穀類、野菜類等の如き有機物（すべて金石の如き無生物の體を搆成せるものを無機物と稱へ、動物植物の如き生體の體の大部分を搆成せるものを有機物と稱ふ、而して有機物は之れを大別して蛋白質、脂肪、含水炭素の三となり）に附着するときは、此等の黴菌は恰も良田に種子を下ろせしと同じく瞬時にして續々その蕃殖を營みために該有機物は分解せられて厭ふべき臭氣を發するに至る、この現象は所謂腐敗にして、腐敗せ

る飲食物は身體を害し傳染病の媒介を爲す而して
は温夏時の氣此等の腐敗「バクテリア」の蕃殖にも
亦頗る適當するものにして、飲食物の腐敗は夏時
最も早く起り且つ最も著し、之れこの季に虎列剌
赤痢等は好むで發生する所以の一なり

如此夏季の氣温は諸病の黴菌及び腐敗「バクテ
リア」の蕃殖に最も適當するを以て、此等の黴菌
は非常に蕃殖して或は飲料水に混じ、或は土壤に
混じ、或は空氣に混じ、或は食物に混じて、此等
吾人の生活上に必要缺くべからざる者に汚染し
以て病毒傳染の媒介者たらしむ、之れに加ふるに
夏季には蠅蚊等の如き不潔にして而かも病毒の集
積せるもの例へば糞便、腐敗物等に好んで蝟集す
るものありて、病氣の傳染を媒介す、これこの季
に虎列剌赤痢等の好んで發生する所以なり（未完）

産所式

東京女學館講師　有住常子

箸だての事

小兒にはじめて膳をすゑる祝にして俗にくひぞめ
といふなり、これは膳をすゑるのみにて箸をとり
て飯をふくめなどする事はなきなり

うちまきの事

これは散米のことなり、臨産の時、あるひは初湯
の時にうちまきをまくなり

犬張子の事

犬箱は魔生を退るための物なり、故に小兒誕生の
時は、犬箱をつくりて、其内へ鼻ひねの緒、むす
びの糸、又は寺社より參る守札などを入れおくな
り、是は張子にするなり、張子師に申付けてつく

らすべし、一つは男犬、一つは女犬なり、今俗に用ゐる犬張子と稱して、四つ足あるものは實用をなさぬなり。

女禮心得草

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

○きよ子様に申上候、一同の禮の本統のことは御はなしが出來ぬと仰せられ候が、それにては女禮をならひ候ものゝために相成らず候につき、誠に恐入候が、なにとぞ其はしばしにても御もらし願たく候、それに仰せられ候ごとく、あやしき教師のみ多きをりからに候へば、かへりて御もらし被下候かたこの道のためによろしくと存候。かしこ。

もと子

◎もと子様に申上候。まことに耻しきてすさび御熟讀被下さは其ふしぶし御こゝろづけにあづかり、ありがたく存候。さて一同の禮のまことの事は、いまだ申されぬことに候、其ゆゑを申候候へば、左の如くに候。

いまの禮節をおしへ候ものは、みな一同に進み出で候ものゝ、下座のものより引候よし申候。其例は、近頃の禮式のこらず御らんに相成候へばわかり申候。

まことに〳〵大まちがひに候。先にすゝみたるものは、一同のうちにて位のうへなる者に候ゆゑ先にすゝみ候わけに候。さすれば退き候ときも其ごとく退き候が、上の位を上の位として、下の者はいつもあとにつゞき候ことに候、これは、おのづからの定めにて、昔よりのしきたりにて、女禮をならはぬ方々にても、かくいたしをられ候。かへりて學び候ものゝ、上下のくらゐをわ

やまりをり候こと、かへす〴〵も無念のことにて候。

ふかき御こゝろによりもらし申候、右のごとく一に進みたる者より一に退き候が本統のことにてこれは私の申ごとにてはござなく、をしへられ候まゝを御こたへに及び候事にてござ候。いまの禮法のうちの女子作法ばかり無用なるものはなしと學者の申され候も、まことにいたしかたなく候。是は一流一派にかゝはりてをしへ候ものゝ實用と申ことを知り候はで敎へ候より申され候ことにて候。かへす〴〵くちをしきことにござ候。

つたなき申ごと御とがめもなく御とひ被下、はづかしく候。なほ申したらぬふし〴〵も候はゞ御たづねくだされたく及ぶかぎり、其みちの人にたづね見て御答へ申しあぐべく候。かしこ。

物をしへられ候仁申され候。世間一般に只今用ゐられ候作法敎授法は、みな無用なるものに候よし申され候。まことに候はゞ、かなしきことのきはみにこれあり候。

挿花の話（つゞき）

小畑いく子

裝飾と挿花との關係

前にも述べました通り、挿花は人に美的快感を與へる所の所謂、美術の一つでありて、室内裝飾品の一つになりて居ります、されば室内には挿花の外にいろ〳〵裝飾品もありませう、そこで他の裝飾品と花とが、個々別々にならぬやう、よく調和させるといふ事が肝要です。どうかと申しますと、まづ花は床に据るが例となりて居ります、それは床は室内裝飾の中心になりて居る所でありますか

らです、間には装飾の都合で他に置く事もありますが、それは至極調和上むづかしいから普通床に据えます。其床の間には先幅物が懸りて居りませう、前には置物もありませう、然るに幅物は何であらうとも置物はどんな物であらうとも、それには無頓着で花を見てもらいたいといふやうな風に大きく甚しきは其床の左勝手右勝手なるかをも構はずに挿てあるやうなのもあり、田舎などに参りますと幅物の前に大きく生けて、何か幅物もある事はあるやうだと云ふやうな、殆ど玄關前に馬車廻しの樹木を植ゑ込だ風情で得々として居るのも折〱は見受ますが、實に見悪ひものでります、なる程幅物も挿花も置物も各獨立の装飾品でありますが、それを程よく配置して調和の出來て始めて眞の装飾であらうと思ひます。

たとへば梅の詩の書幅の前に梅を挿るとか、陶淵明の圖に菊を挿し西王母に桃を挿るといふやうな風で、新年の装飾などにはよく松竹梅を用ゐますから、松の幅物に苔むした梅の二ッ三ッわらひそめたのを程よく生けて、書院或は違棚のあたりに小さき竹の盆栽でもあしらうとか富士の幅に松を挿し後むきの西行の置物といふ、かやうな工合に出來ますと、個々獨立の装飾品がよく一致していづれを一つ離すといふ事が出來ませぬ、然し總て此通りにといふわけには参りませぬ、そこは臨機應變ですが常に其邊を服膺して置き、せめては横物の幅なれば花は少し高く大きく挿し、長き幅物の時は砂鉢ものを少ししまりて生るといふ位にはしてもらひたいのであります、必しも幅物が主で花其他の物が客位に居るといふわけではありませぬから或は花を主とし置物其他が客になり、置物が主座を占めて花其他を程よくあしらふといふ

様な場合もありませうが、常に其心懸は忘れぬやうにして置きませぬと、我技倆を見てもらひたいといはぬばかりに挿てありますと見惡ひのみならず。其一つで一室内の調和は破れて仕舞まして人に快感を與ふる事が出來なく、つまり挿花の本旨にそむきます。

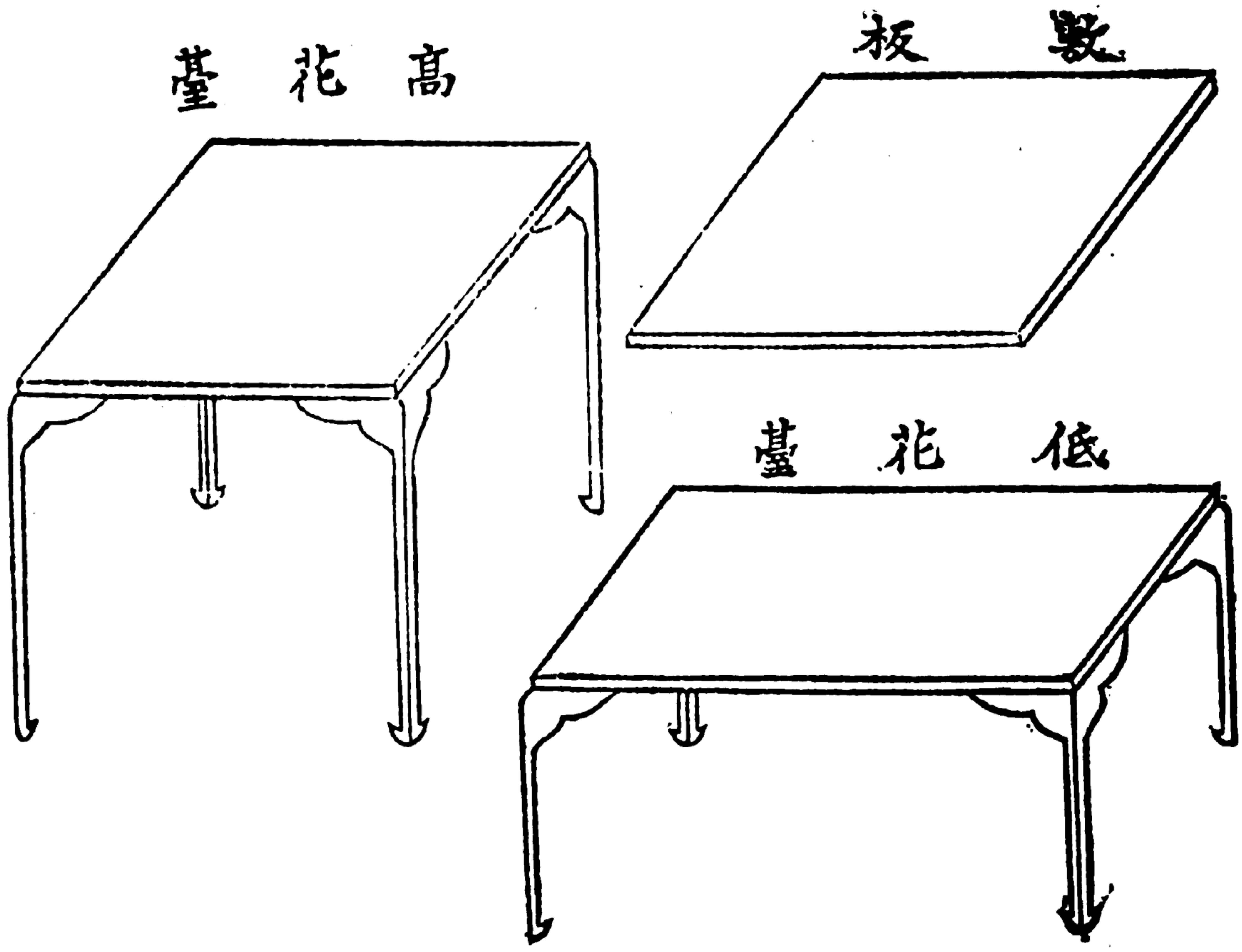
さて花器を置きますには床の中心よりどちらにか少しよせて幅物の主たる所を掩はぬやうに落款印章などは決してかくさぬやうにせねばなりませぬ。

また幅物の畫と花とが同じものにならぬやう、たとへば竹の幅に竹、梅の幅に梅を挿るといふやうな事をせぬやう、又むづかしいものは置物であります。此置所には余程注意をせぬと調和を失ひやすいものであります、總て裝飾に注意を致す以上は調和を欠く物は惜氣なくとり除けなければなりませぬ、そこで花器の据所は左右勝手は勿論ですが、これも主とする所は上客の席を正面と心得ればよろしいのであります、また一室に二瓶以上の花を置く事は宜しくない、それもやはり調和を欠くからです、兎に角此美術を以て室内を裝飾するといふ事を會得すれば間違ひないのであります。

いかほど奇幅珍器名花でも、無意識に幷べたてたのではそれは陳列になりまして裝飾とはなりませぬ、調和といふ事の大切はそこでありますからどうぞ陳列にならぬ樣に願ひたいものであります。

花臺と花器

花臺は其形の如何にかゝはらず總て單純なのがよろしい、それは何故と申すと、大體花が主でありて花臺花器は客であります、然るに其客たる花臺花器にあまり巧妙なる作器を用ゐますと主客を轉倒しますから、まづ黒塗に致して金椽を取たといふ



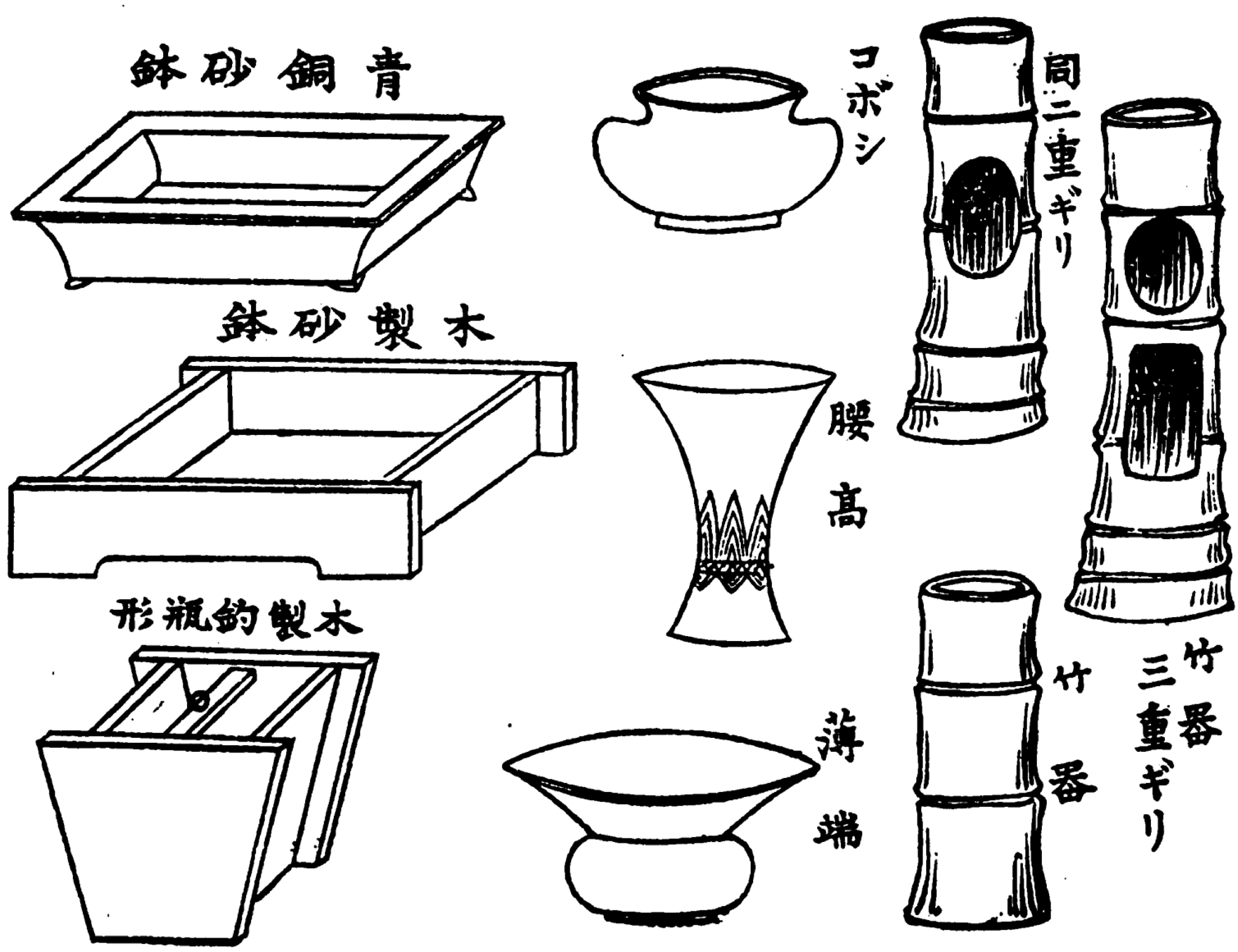
位のものがよろしい、其形が別にきまりといふ者はありませぬが、普通用ゐ來りて都合のよろしいものは、少し横長くて足の低きものと、四角で足高いものと四角或は角おとしの板との三種であります、横長くて足の短いのを低花臺といひ、四角にして足の長のを高花臺、薄き板の足のなきものを敷板と申します。寸法等定りはありませんが餘り小さは花の安定を害しますから上の通り略圖を出して置きます。

花器の材料もいろ〳〵ありまして竹、陶器、磁器青銅器などいづれもよろしいが、陶磁器はなるべく用ゐませぬ、それは何故かと申しますと、染付など餘り美麗に過ぎまして前にも申しました主客轉倒の虞がありますから、然し無地ものにして古雅なものは別段で、それは結構です、一つには破れやすいといふからでもあります、配木を入る時

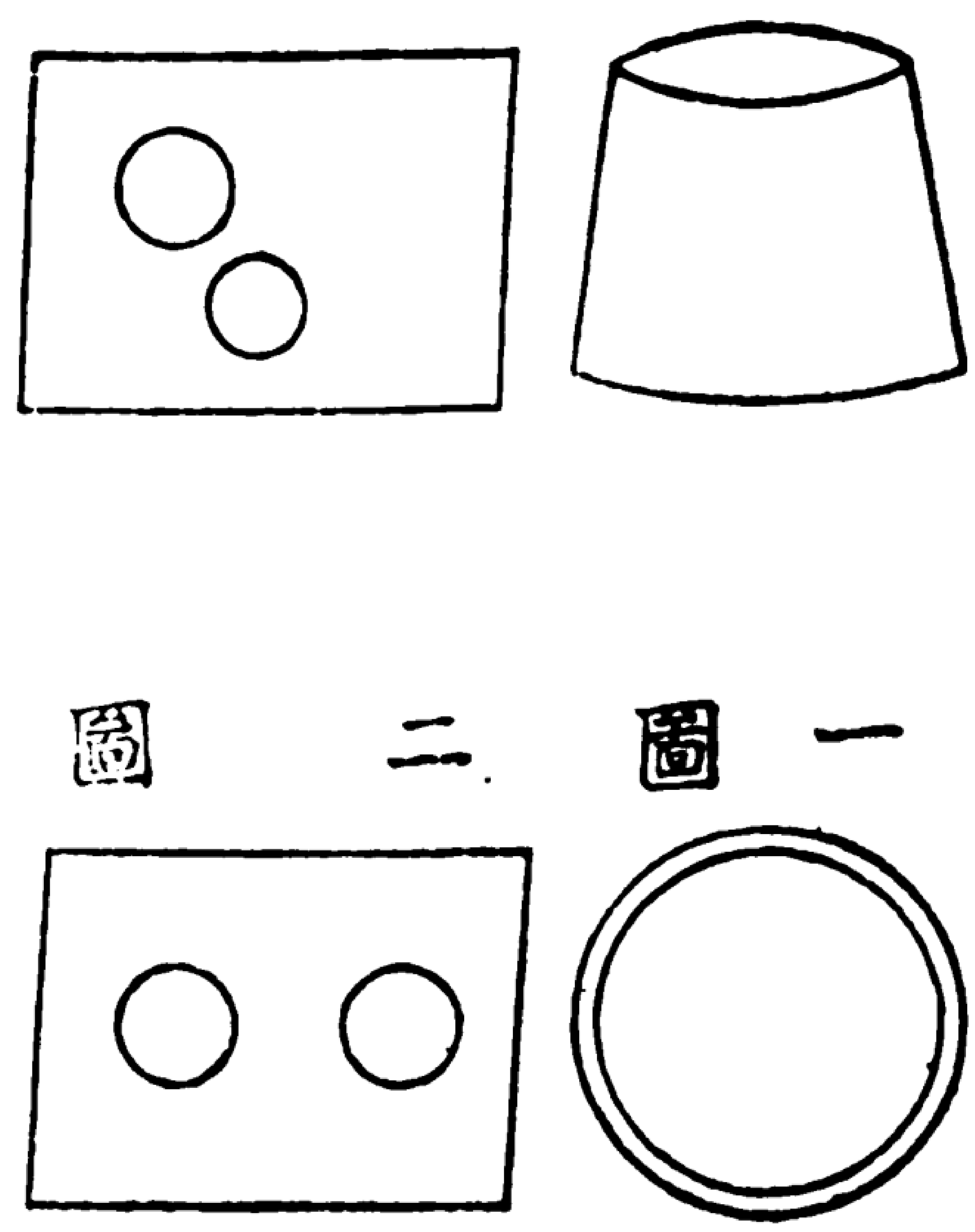
などは餘程注意を致しませぬとなりませぬ、これもまた形は種々でありまして、竹などは一重の外に二重ぎり、三重、五重とあります、青銅には薄端、腰高、コボシ、砂鉢など、木製にも砂鉢、釣瓶などあります即ち下の圖を御參照ねがひます

配木は自然の股木と割配木の二種ありますが、股木の方が丈夫で挿しよいのでありますからなるべくそれを用ゐたいのであります、然し東京あたりでは股木は容易に手に入る事がむつかしいから餘儀なく割配木を用ゐなければならぬ樣な事もあります、割配木なれば材料は檜木がよろしい、股の大小は挿す花の大小によりましてかはります、其内にも杜若、蓮、胡蝶花、などは股の大きいのを用ゐます、自然の股木　材料はなるべく堅き木を用ゐます、樫、椎など最もよろしい樣であります

配木を花器にはめますには、花器の縁より四分以



上を下に入れて置かねばありませぬ、何故かと申しますと、花器に水をさしまして後、配木が水の上にわるやうではなりませぬからであります



水巻　三圖

一圖　二圖

花器の内砂鉢、コボシなどの類には水巻と申すものは用ゐなければなりませぬ、それは圖の如き鉛製のものであります、この中に配木をはめて挿るのであります、これを器中に置きますには、中央よりも少し一方によりた方がよろしい、又二ッ置くやうな場合には第三圖の様に置きます（未完）

だいどころ

東京女子美術學校講師
割烹學校講師　石井湧太郎

夏

洗ひ赤貝
しぼり瓜
木くらげ　鯉毛切
汁
しそ　青割さんせう
たで
飯

一　水膾

水膾の拵へ方は先づ赤貝から初めます、赤貝貝のもとのてふつがいの處を金槌で破して置き、夫れから貝を開きますと、たやすく剝げます、それを水で一度洗ひまして、まわりの、ぬらなどを取

り除けて二ッに開き、腹わたを取りまして薄くへぎ鹽でよく揉みますとぬらが取れます其所で水を幾度もかけまして晒すのです此の如くして又少量の鹽を振りかけて置きます次は木爪を二ッ割にして内の核を取り苦き部分を切り去りまして小口から薄く切ります之れは前號に記してあります通りにして水に浸して置きます其の次は木くらげを石突の處を切り取り二三枚重ねて夫れを巻き、端から細く切ります尤も前時より水に漬けて置きてから用ゐますので、切れましたのは茹でます茹で上りましたら之れも水に浸して置きますしそは水にて葉をよく洗ひ細かに切りたでは穂を用ゐます其所で爪は水より搾り揚げ木くらげも同じく斯くして鱠皿へ盛り赤貝も鹽氣を洗ひ水をしぼり、しそ、たで等何れも色取りよく盛り合せがかんじんです、かけ酢は酢に食鹽みりん等を合せて煮返して使ひます。

汁に用ゐる鯉は、腹を割りわたを出して水にてよく洗ひ、之れは胃袋をつぶさぬ樣にわたを出さぬと其の身が苦くなります、夫れから頭を切り落し三枚に卸す、三枚と云ひますと中骨を一枚として兩側の身が二切都合三枚故三枚に卸すと云ひますで其の身を俎板の上に置き身の方より横に取り至極細かに疱丁目の皮のきわまで切り入れます斯く切り目を入れますのを毛切と云ふので毛の如く細かに切ると云ふのであります青割さんせうは山椒の實の青きものを割りて用ゐます味噌は三洲を薄く仕立てるので尤も並味噌を少し混せた方がよろしい之れは汁のおどまぬ爲めです其の汁を別の鍋に少し取りまして鯉を煮ます夫れを椀に盛り山椒を入れて出します。

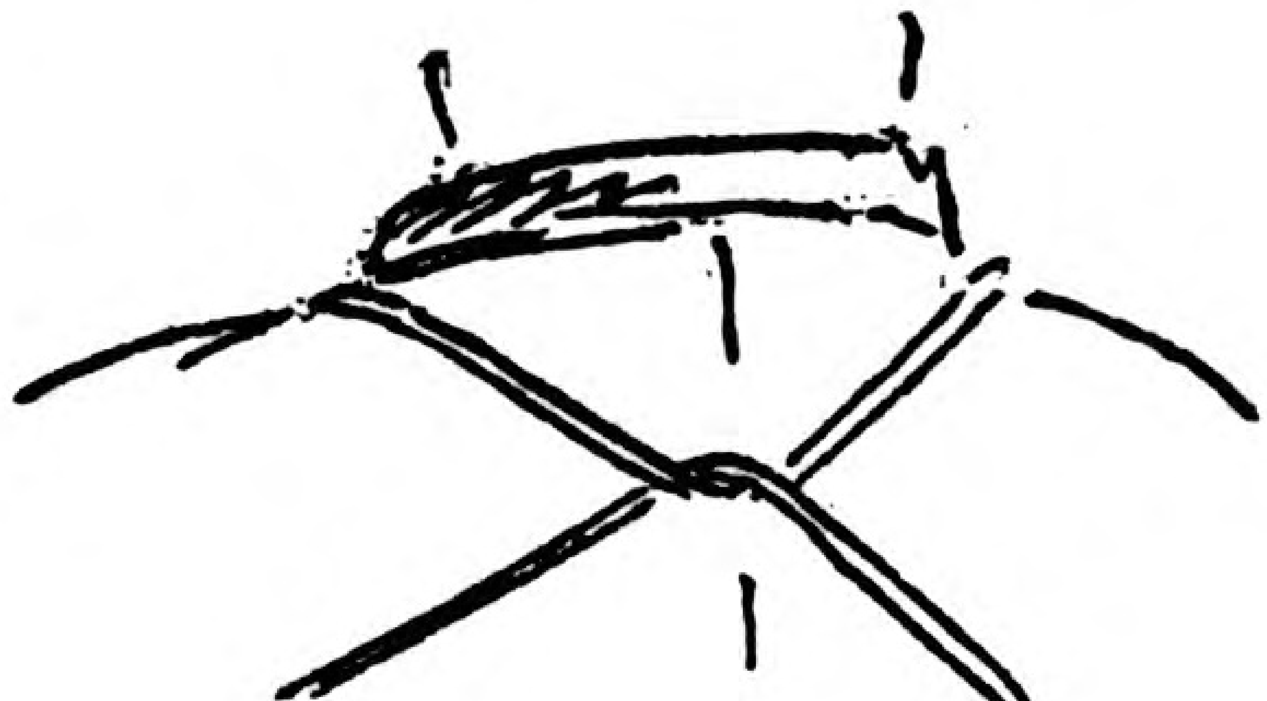


東京府伊豆新島の女（承前）

理學士　福地信世

さて是から新島婦人の衣服について述て見やう。一體衣服には特筆するほどの事もないが、袖が甚だ短くして、男子の衣服の如き事と、帯が甚だ細き事とである。又新島の婦人は、寒い時は半纏の如きものを衣服の上に着るが、其の上に前掛をしめるのは、一見奇妙に感ずる。

婦人が業を操る時には襷を用ゐ、襷は美はしき紐、又は玉を連ねた紐で作ります。襷のかけ方は、内地の婦人とは少しく異つて、紐が脊の眞中にて圖の如くあやをなすのである。それ故に、實際襷が左右に辷つて、袖を引き張る力は少い。襷のあやが惡いのみでなく、其襷のかけ方も頗る寛くして、實際※



※の用には少しも立て居らぬのは滑稽の極である。元來新島の婦人の衣服は、袖が甚だ短き故襷の必要がないのであるから、襷が脊の眞中で遊んで居つても害はないが、便利より考へ出した襷と云ふものが、今日では操業時の一つの飾装の如くにならんとして居るのは、誠に注意すべき事であらうと思はれた。

次に穿物につきて云はんに、普通は木履を用ゐる

が、業を操る時、又は少しく遠距離を歩むには、必ず山草履を用ゐる、此の山草履は、普通の藁草履の如きもので、短く踵のないものである。

これで先づ通常の衣服等については述べたが、葬禮などの時には、又特別の風をする。其事は追々に述べる事にしませう。

凡て新島の婦人は、如何な時でも紅粉を裝ふ事がない。又歯を染め、又眉を剃る等の風習がない。誠に天眞爛熳たるものである。

◎◎◎少女の業　少女で年が十二三になると、普通子守をするのである。偶然己が家に嬰兒があれば、其の兒の子守をするが、大抵は親類又は他の家の兒の子守をするのである。此の子守の事をモリツト（守人）と云ふ、此の守人なるものは、内地にて普通に雇ひ入れる子守とは大に違ふ。殆んど少女の義務として子守をするのであるから、中々權利のあるもので、時によると、守人も嬰兒も共に大人になつた後まで、依然として守人が、他方の者の牛耳を採て威張て居る事がある。

何が故に此の子守の必要があるかと云ふに、家の嫁は、頗る家事と耕作とに忙はしく、殆ど耕作の主任者である。それ故に、到底自己の手で、自己の嬰兒を養育する事が出來ぬ所から、自然と他家の少女に子守を托す事になる。又他に用事なき少女も、義務的に子守を勤むる事になるのである。

守人は、朝母が畠に行く時に嬰兒を預けらるゝも、半日は兒を守し、晝に至れば、畠に兒を脊負行きて、母の乳を飲ませしめ、又歸りて、兒を泣かさぬ樣に守し、夕刻母が畠より歸り來り、休息し身體閑暇にあるに及んで、嬰兒を母に渡し、守人は自己の家に歸るが普通である。母は毎日〳〵愛兒を守人に托し、一人畠に耕作に行くは、誠に必

配な事だらうと推察せらるゝ。

若き女の業　凡て女は、日用の水を汲むのと、耕作をなすのと、家政に關する諸事務を取るのとが毎日の常務であるが、特に著しき女の常業は、水汲みと墓掃除とである。

先づ水汲みの話から述べん。元來伊豆七島は水に乏しきが、此の新島は比較的に飲料水に乏しくない方である。然し東京の如く、水道等の便利のある都人には想像も及ばぬ所である。即ち新島本村は、戸數八百程あるに、井戸が僅に十數個である。それであるから、一つの井戸を五十戸の人が用ゐるのである。

偖井戸の構造は如何と云ふに、普通は平地より十尺も深く掘りて、大なる凹地を作り、其中央に井戸を掘つてある。大なる凹地の周圍は樹木を植ゑ、此の井戸のある所を清潔に、且つ涼しきを保て置いてある。家々のものが水を汲みに行くには、先づ平地より石段を下りて、此の凹地に至り井戸の水を汲むのである。井戸は前に申せし如く五十戸の共同であるから、次々と汲んで行くので、此の凹地に待て居る女子は中々多い。實に此の凹地は至極適當な井戸端會議の大議事堂である。

水は家々に是非とも必要であるから、家々では、毎朝と毎夕とは、時を定めて皆汲みに行くのである。家の主婦は家事に忙がしいから、此の水汲役は、大抵若い女の仕事となつて居る。

女が水を運搬するに用ゐる品は、唯一箇の水桶である。大なるは二三斗も水が入るのである。女は此の水桶を運搬するに甚だ容易に頭上に載せて歩行して居るが、誠に熟練なるものである。

新島にては、女が物を運搬するには、何物でも凡て頭上に載せるが、殊に水桶を載せて少しも水を

溢さずに平氣で歩み行くのは、實に感服の外はない。

次に墓掃除の話をなさん。新島の人民皆日蓮宗であつて、墳墓を大切にする事は非常である。內地の人は時々墓詣りをするか、又は年に二度墓詣りをするのが通常であるが、新島では、毎朝必ず墓の掃除をなすのである。此の墓掃除は、家の娘又は新嫁の役である。墓掃除に行くべき若き女子は、朝早く頭上に卵搭桶と云ふ手桶を戴き水を入れて行くので。墓に至り、先づ墓の掃除をなし、墓前の花に注意し、水を入れ換へて、歸り來るのである。墓の周圍には、白き砂が敷いてあつて、誠に清洒にしてあるが、若し此の白砂の上に芥でもあり、又墓前の花が少しでも枯れて居ると、其家の大恥辱であるとしてある。それ故に、此の墓の掃除は、大切な職であつて、女子は此の掃除は決して怠らない。若き女の業は、以上の外、尙は中年の婦人の業の手傳をするのである。

中年の女の業　新島にては、一家の生計の大部分は、中年の女によりて立てらるゝと云ふ可き程であるから、中年の女の業は、頗る夥多である、(一)飮食物の調理(二)衣服の裁縫(三)農業　一切(四)水產業の一部等が、其主なるものである。

飮食物の調理につきては、別に述ぶる事もないが、序なれば、主なる食物を述べんに、新島の人々の主なる食物は薩摩芋であると云ふてもよいのである。此の芋は實に新島の主なる農產物で、芋に次ぐものは麥であるが、此れは多量はない。芋は何れの家でも床の下に一年中貯へ置き、芋のみによりて一家が一年中生活し得る用意がしてある。新島の人は此の芋の他に、麥と米(これは內地よりの輸入品)を食す。副食物は其時々の海產物を以てして居

る。常食が芋であるから、中年の女は、朝から晩まで芋の調理に忙しい。芋は大抵笊に入れて湯出るのである。

（未完）

女子服飾の沿革（九）

椎園信成

●頭髪　上古は重に垂髪が行はれて居りました。朝廷からも、屢々令を下して結髪を奬勵せられたが、何分我邦婦人の嗜好に適せなかつたものと見えて、年を經るまゝに、全く垂髪が行はれる様になりました。こは上古の部に少し述べて置きましたから、讀まれた御方は御存じでせう。然るに當期になつて天武天皇の十一年四月、詔を下して、天下の男女、自今以後悉く結髪せよ云々、こは當時垂髪のみ流行したものですから、かゝる令を下されたのであります。次で同年六月又男女始結髪仍著漆紗冠」と云ふ詔が出ましたが、これに就ては婦人中のハイカラ連で、大に反對した者もあり、又こゝかしこで不平の聲が起つて、此命令も容易に施行する事が出來なかつたのでせう。間もなく、翌々年(十三年)四月、更に年齡四十歳以上は、結髪垂髪何れにても意に隨へ、但し巫、祝の徒は、必ず垂髪にせよ。年三十九歳以下は、前制の如く結髪にせよ、との令を下された。こは前制から見れば、余程寛大な命令であります。朝廷にては、どうかして一般に結髪をなさせやうと、斯く迄御心を注がれましたが、何分從來の習慣や嗜好によつて、容易に、かやうの令に服從しない。そこで朝廷の方でも最早や手段が盡きたと見えまして、同天皇の朱鳥元年七月に、前十一年の制及び十三年の制を廢し、更に女子は垂

髪にすることゝなされました。詔に更婦女垂ニ髪于背ニ、尙如レ故、とあるにて知ることが出來る。これより後といふものは、全く垂髪のみとなりました。此後文武天皇の太寶元年に、女官の禮服、朝服、制服をお定めになつた時、結髪の沙汰もありましたが、これは只一部分丈けで、一般の布令ではなかつたのです。次で同天皇の慶雲二年に、天下の婦女の神部齋宮、宮人及び老嫗にあらざる限りは、皆結髪にせよとの令を下されたけれども、これ又一般に行はれなかつた。其後と云ふものは、朝廷よりも強て結髪せよとの 詔 の出なかつたものですから、遂に平安朝を通じて、武家時代に至るまで、全く女子は垂髪する樣になつてしまひました。

以上は其沿革の大路ですが、次には其髪の樣に就て申しませう。當時小兒は、大抵三歳或は四五歳になりますれば、其髪の先を切り揃へる。これをフカソギともアマソギとも稱へそれがやゝ生長して八歳頃に至り、髪の先、肩の邊迄になりますと、又肩を限りに切り揃へる、これをばフリワケガミともハナリカミとも云ひ、其額は眼の上で切りそろへる故、メザシと稱へる。以上の風は只に當時代のみならず、平安朝以後に至るまで、男女とも通じて行はれました。それは伊勢物語源氏物語などに童子の容姿を書いた處には、いくらも見えて居ります。今試に其例を一つ二つ記しませう。

○源氏物語薄雲の卷に

赤石の姫君のこと此春よりおふす御ぐしあまそぎの程にてゆら〳〵とめでたく云々(細流抄に云あまそぎはふかそぎなり云々)

○萬葉集九卷、菟原處女墓歌に

あしのやの、うなひ少女が八年兒の、かたなり時ゆ、をばなりに髪たくまでに幷び居る家にも見えず云々

○伊勢物語に

くらべこし振分髮も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

○狹衣に

めざしなる御ぐしをせちにかきやりつゝ遊びむつれ給ふ

かゝる風は今日にても往々行はれて居ります。扨てこれより髮も段々長くなりますれば、ウナヰバナリと申します。これは最早や小兒の籍はぬけて、一人前の者となつたしるしでありまして、之れより結髮にし、或は垂髮にもするのであります。併し此時代は前申しました通り、結髮は或一部のみに限られて、一般の女子は垂髮であります。其樣は今日のものと、殆ど相似て居ますから説明は畧します、扨て如何なる理由が在つて、かくも當時の婦女は、垂髮を好んだかと云ひますのに、別段の理由もありません。只我邦の婦女は、古へより顏を人に見らるゝを耻として居ますから、上古はオスヒを使ひて顏をかくし、當時は垂髮して面をかくすことが、一つの習慣となつたので、髮あげては顏かくすたよりがなくなるからと云ので、又一つは十五六才迄も垂髮で居ることであるから、結髮しては、年の程も人に察せらる故何日迄も若やかに見せやうとて、垂髮にして居たことゝ、この二つの理由から、斯くも結髮をきらつたものでせう。次に結髮ですが、こは或る一部の人、或は官女など制令の下つた當時、詮方なしに結たものですから、極少數で在つて、一定の結方などは少しも知る事が出來ません。併し當



時の繪畫、土偶などに依て、大凡想像して見ますのに、其種類は一定して居りませんが、概して總髪を頂にたくり上げ一つ或は二つ三つの髻をつくり、染木綿とて、色々に染めたる木綿を以て結て居たらしく思はれる。萬葉集の歌に「うま人の額髪ゆへる染木綿の染めし心は我忘れめや」とあるので、わかります。其染木綿は前號の第二圖に示した通りであります。尚ほ次なる想像圖に就て、御覽になれば少しはわかりませう。

圖解●●

一、は群馬縣佐位郡下植木村字飯玉山より堀り出しました埴輪によつて、想像した、垂髪の圖であります。

二、は正倉院御藏、美人屏風中の繪に依て書いた結髪前後の圖であります。

三、奈良の法隆寺金堂に安置してある女子の像に

依て書いた結髪前後の圖であります。

四、常陸國平磯村より堀出して埴輪に依て書いた結髪の前後の圖であります（未完）

百夜譚

林恒山

第貳回　暦の事（續き）

前回では暦に就いて、我邦の歴史の大略を述べたが、今日用ゐる太陽暦といふのは、誰が撰んだのであらう、西洋人が撰んだのである。西洋人とて初めから今日の樣な暦が出來たのではない段々と改正して始めて出來たので、矢張昔は不完全極まるものであつた、今其漸次改正された大略を云へば。

昔羅馬の盛なる頃は何うあつたかといふと、一ケ年を十ケ月とし、一ケ月は三十日と三十一日とであつて、一ケ年は三百四日であつた。其不完全といふものは太陰暦よりも一層甚しかつた。其後一ケ年に二ケ月と五十一日を増加して、一ケ年を十二ケ月、三百五十五日とした。此二ケ月と五十一日とを加へるには、一月と二月とを新に加へて、是迄三十日であつた日から六日を取つて五十一日に加へて五十七日とし、之を一月と二月とに割付けて、一月を二十九日、二月を二十八日とした。今日も二月に限つて二十八日といふのは、此時極めた日數が今に存せられて居るのである。其後まだ足らぬといふのでメルケドノウズと稱へて、二年毎に二十二日を加へ、之を二月の廿二日と廿三日との間に置いた、斯る滑稽じみた暦であつたからして、ジユリウス、シーザーが當時の天文學者たるソジゼーヌといふ人と相談をして、一

つの暦を撰んだ、是が卽ち後世シーザー暦と稱へるので、此改暦によつて一ヶ年は三百六十五日となり、四年毎に一日の閏を二月の末に置くことゝなつたので、今日の太陽暦は大抵此時に出來たのである。是は西洋紀元前四十六年の事であるが、此四年毎に一日の閏といふのを、何してからか四年目といふ事に誤つて、三年毎に一日の閏を置いた、して三十六年目に至つて始めて其誤りであるといふ事を發見したといふことである。斯るお可笑間違は發見されると同時に改正されたが、此暦は固より充分とは云はれぬが。斯る昔に於て此位迄の暦が出來たといふのは、西洋では早くより天文學が開けて居つたといふ事と、ソジゼーヌといふ人も頗る學者であつたといふこととが分かる。其後益々天文學が進歩すると同時に、其進歩はシーザー暦の不完全であることを發見されて、其處で羅馬法王のグレゴリー第十三世といふ人が、當時の天文學者であるリヽオといふ人と相談をして暦の改正を企てた。其時の算出で見ると一年の日數は三百六十五日と二四二二といふ數で、此二四二二といふ分數は一日の四分の一より少し少ない、其故四年毎に一日の閏を置くと、實際百年目には最早一日の閏を置き過ぐることゝなる。然らば百年目毎に閏を置くことを省くとすると、今度は又四百年目には一日省き過ぐることゝなる。其處で斯いふ事を極めた。

第一、西洋紀元の年數を四で割切れる年を閏年とする。假令ば本年は西洋紀元一千九百二年で、四で割切れぬから、閏年ではない、明後年則ち一千九百四年は、四で割切れる年であるから閏年とする。

第二は二つ以上〇の付く年は其〇を二つ省ぶいて

四で割切れる年を閏年とする。假令ば一昨年は一千九百年で、〇を二つ省けば十九で、四で割切れぬから、矢張閏年でなくて、二千年となると〇を二つ省いても二十で、四で割切れるから閏年である。

斯く改正されてからは、最早差があつても、其れは至つて少しのことで何千年といふ遠い後でなければ、再び改正の必要なく何千年の後ともなつたならば、其時には一層精察なる計算をする天文學者も出るであらうが、當時では是より致し方がないと極まつた。此暦が出來たのは西洋紀元一千五百八十三年の事で、我邦の正親町院天皇の天正十二年則豐臣秀吉と德川家康とが小牧山對陣の年である。此暦をグレゴリー暦と稱へ、今日世界に行はれて居る暦の中で最も精密なるもので、又最も廣く文明諸國に採用されて居るものである。

婦人と旅行

YT散人　土肥半次郎

此の篇重に滊車旅行に就きて言を立つと雖も尙は滊船の旅馬車の旅等總ての旅行にも應用するを得べし讀者注意して拘泥せざらんことを求む　記者識

●其一●　荷爲換とすべき物品ある場合には極めて叮嚀に梱包したる上最も見易き場所に小札を貼付して送先及び自分の姓名を詳記し凡そ出發一時も前に其の向の人に托して發車點まで送り置き第何時の列車で以て何地に送るべき者なりとの旨を告知し其の手續を履行せしめ而して能く其の荷物を托したりし人の番號を記臆し悉皆手數を終りたる後豫約の賃銀を支拂ふべし

●其二●　手荷物は少くも出發前日に於て手落なく

之を梱紮し而も如何にせば最も積量を輕減して携帶に便利あるべきかを工夫し必要にして適當なる衣服讀物等の外直接必要なき奢侈品の如きは斷じて收容せざるべし

●其三●● 發起點より目的地に至るまでに經過すべき路筋に就き明細に各驛名や發車時間や休車時間等を説示せる袖珍の表を携帶して參考の便に供し且つ其の懷中時計は必ず停車場のソレと一致せしめ置くべし

●其四●● 時を失はずして手早く行裝を整頓し成るべく發車時間前に搭車の準備を完ふし從容沈着して號鈴の鳴り渡るを待つべし

時刻に後れて停車場に驅け付け狼狽周章して擧措其の度を失するは翅に旅行に慣れず世故に疎忽なるを表白し得て甚だ外見宜しからざるのみならず偶々切符を紛失し或は荷物の一部を遺留し剰へ惡奸の徒にすら覗ひ込まれて前途容易ならざる迷惑を釀すの憂あればなり

●其五●● 汽車に上れば必ず同乘の乘客に默禮を行ふべし但し少時にして同席者の退散すべき汽車に在つては之を略するも差支なく且つ決して交語すべからず

●其六●● 汽車室に在つては入口の内隅を以て最良の位置となし又た夏日の旅行に於て前進方向の東方或は西方なるときは總て車中の北側中央部を以て空氣程好く流通し車體動搖少き良位置とするを以て成るべく長年者貴顯者を推して此の席に就かしめ自身は謙讓して他の位置を占むることを要す

●其七●● 他の同伴を有する者乘車するを見るときは成るべく亦た謙讓して其の連座を中斷せざることに留意すべし

●其八●● 手荷物は自席なる頭上の架上若しくは腰

掛の椽下に成るべくカサ張らず且つ散亂して降車の際取違又は紛失等の憂なき樣始末よく積み收め少々なりとも他席の邪魔とならざる樣注意すべし
僅かなる面積を共有の天地とする滊車旅行に於ては壹枚の切符に對する權利は勿論一身一席の占有に止まり決して他人の座席までも侵犯するの自由を許さぬ
然るに近來人情浮薄只管我利々々主義に傾くの反映にや廣くもあらぬ車室に我れ獨り顏を振り立て横着にも手荷物を左右一面に亂置して二三人前の場所を塞ぎ殊に其の甚しきに至つては平然乘客の前に横臥し或は惰眠を貪り或は新聞小説なんどノッケ樣とありて快讀するさへ往々實見さるゝ
是等は固より無教育のデモ紳商或は當世流行のハイカラ者流など多く男性に見る所なるも左りとて例のアヅマコートに絹頸卷の婦人達や夜會結に海老茶袴の式部連にも畧ば似寄りたる擧動少からず實に憎んでも尙ほ餘りある不禮の業である

●其九● 車室に在りては假令自分車窓に接近して位置を占めたりとも勝手に之を開閉するを愼むべし若し已むなくして窓を開放するときには自分成る丈け風の吹き込む所に當り他の人々に風當り强からぬ樣心掛け尙ほ他の爲めに不快なる氣色あるを覺りたるときは早速之を閉鎖すべく殊に老人或は病者等ある場合には成るべく注意して空氣流通の過度ならざる如く鹽梅すべし

●其十● 空氣の流通に關し車窓の開閉を欲する場合には假令自分より手近き位置に在る人ありとも依賴して其の手を煩すことなく必ず自ら立つて爲すべし

●其十一● 車室の在りては其の使用品たると飲食物たるとに論なく必ず他人の眼神鼻神に不快の感觸を與ふる者を携帶或は咀嚼すべからず此の點に就ては自身の嗜好する煙草すらも擅に他人の面前に吹き流すことなきに注意するを要す

●其十二● 車室に在りて他人に茶菓などの惠與を受けたるときは機を量り相當の物を購ふて返酬すべし

●其十三● 車室に在つては最も躰勢を端正にし決して亂雜に流るべからず其の椅上に横臥し或は長く其の脚部を伸すが如きは勿論大々的禁制なり殊に衆人の面前に於て某の男客と親押し或は夫婦情好度に過ぎ他人をして其の醜態に顰蹙せしむる如きは最も愼まざるべからず

●其十四● 肺臟の病あるときは車室に於て談話すべからず是れ駛行する車體動搖の響に妨げられ為めに非常の高聲を發し病の為め甚だ宜しからざるのみならず動もすれば識らず知らず他人の顏面に接近して其の病根を移すの恐あればなり

●其十五● 車室に於て同乘者より交際を求めらるも漫に之を諾するを為さず唯だ其の禮遇を厚ふするを可しとす是れ全く交際を結ぶを禁ずると云ふの意味にはあらず袖振り逢ふも他生の縁など丶無暗矢鱈に正邪の性格も分明せぬ者を妄信輕許し後日為めに臍を噬むの恨を取るなきことを警むるのである

勿論一旦既に交際の端を開き了つたならば後日心に滿たざる事ありとて自分方より之に絶交を申し込み或は途上に相會しても所謂睚眦の態度を以て一語をも交へず軋れ違ひ去るが如きは

一種の大なる我儘である大なる缺禮である左れば苟も人と交を結び且つ其の交を全ふせんとせば必ず初見の當時に於て充分對手の言語擧動に就て其の人格を考察し實際異日の良朋たるべしと信ずるか若しくは良友と云ふまでには至らざるも兎に角害はなかるべしと見當立つたる上ならでは容易に心を許すべきではない

●其十六　肺臓の病ある者は及ぶ限り車室に於て談話すべからず

馳行する車體の響に妨げられ非常の高聲を要すると共に自然他人の顔面に接近し偶々自ら苦痛を激すると共に他に病根を移植するの嫌がある

●其十七　視力弱薄なるか若しくは現に眼病ある者は車中印刷物など讀むべからず

懇篤なる貴婦人令孃は
　其の旅行するに當り
　常に他人の便宜を計り
　且つ他人を扶助するを忘れず

しひがたり（その四）

本居苔水

◎雨ふる日、えび色の袴高くかゝげて、帶にはさみ、腰のわたり、異樣にふくだみたるは、見る目も苦しかりけり。ことに、鶴脛にて、河をも越ゆべき樣したらんは、おのづから、眉も打そめらるべくなん。

◎えび色の袴と云ふ物の、いと愛たきは、云ふも更なれど、此の頃のやうに、あやしき工女の類まで、まねび物する事は、嬉しきものから、はた、こと人の爲には、佗しかりけり。

◎過ぎし日、世に時めくわたりの姫君にて、キオリンの上手と聞えたる人の、徒然なる頃なりけん、

上野近き所、そゞろ歩きしたまへるに、行き會ひまつりぬ。かりそめの折なればにや、ともの女、たゞ一人從へて、よろづ目立たしからず粧ひ給へる物から、さすがに、何と無き氣高さは、包ましげなる深張の絹傘にも、餘りたりけり。常より人傳にも、御たしなみなど、とかう聞きまつりしゆかしさに、近よりて、よそながら見上ぐれば、島田にかけたる白き糸にも、すが糸の、すがすがしき御心ばえは、推しはかられぬ。やがて、黄金白銀ちりばめたる、平打ちの御簪を見れば、あな、あはれ、俳優の更へ紋をぞ、彫りづけさせ居給へりける。

◎酸漿を口に含みてならす事は、とゞめたらんぞよき。打ちゆがめたる口つきもあいなきに、押しつぶしたらんやうの音いろさへ、露ゆかし氣なき物なりけり。ことに、いと大いなるを含みたる折は、口のあたりは云ふも更なり、目も鼻も、皆一つに打ち傾きて、雨よぶ蛙の聲に似たらん音も、いたう淺ましや。

◎あはせ、はり綿、の衣などに、黒き繻子の襟かけて、えび色の袴はきたるは、ふさはしからぬ風なりけり。形大いなるくゝり染の單衣などにも、此の袴は似氣なくや。

◎容姿醜しとて、人にいで交らふ事をきらふ女は、心の內も思ひやられて、一わたりは、いとあはれなれど、こはなかなかに、ひが事なりけり。心美はしく、行ひ正しかりなんには、姿のめでたきにもまして、人にもいみじう思はるべきぞ。

◎髪のかたち、衣の品は更なり、櫛かうがい、はき物などに至るまで、あやしき唄ひ女どもの風をまねぶ事、よき人の間にも、まゝ行はれるぞ、げに、あかず口惜しき限なりけり。あはれ、此の女

ゆめ、かゝるいやしき風を、な鑑よまん姫達よ、見習ひ給ひそ。

◎雪踏といふはき物は、しきれと云ふ草履より移りし風にて、裏に皮をつくる事は、茶人利休よりはじまるとも云ひ、また夫より前に、既に、世に行はれたりとも云ひ傳ふ、この物、今また、世にいたうもてはやされて、年若き人は、男も女も、はけるが多く見受けらるれど、後の方につけたる鐵の、歩く度毎に喧しう鳴りひゞくは、好ましからずなん。まして、唄ひ女、俳優などの間に、多く行はるればにや、かつは、卑しげにも思ひなされて、袴はきたる人々には、男にも、女にも、ふさはしからず覺ゆるなり。彼の徳川の末の世に、ばら緒といふ物すげたる雪踏の、やゝ位高き人の間にも行はれたりけんは、げに、見ぬ世の夢なりけり。

◎馨を衣にたきこめけん古へはしらず、匂ひ袋と云ふ物さへ、香水にけおさるゝ今の世は、男も女も、追風一際ゆかしうなりにたり、燈火の影ほの暗き廊のほとり、衣の音幽かに聞えて、えならぬ香の、さとかをり來んには、如何なる人の歩み來るならんと、まづ、心ときめきせらるべし。それも、馨高きにすぎて、鼻を衝き、頭の血も、湧き返るべき心地せらるゝは、少し、ことさむる方もありなん。

◎白髪を染むる事は、その人の、年の程にこそよるべかりけれ。老いさらぼひ、腰ゆがみて、額の皺にも、よる年波の數はよまれぬべき嫗の、多くもあらぬ髮、黑う染め居たらんには、似氣なきのみか、かゝる身にも、なほ、なま心は失せはてぬやらんなど、口性なき京の童はそしりなんかし。齋藤の何がしとか聞えし、古武者の古へは、

いさや。
◎陽炎もゆる野邊近き家居を、そゞろ歩きの折からにて、何心無く見入れたれば、椽のあたり、うら〳〵とさし入りたる春の日影も、いとのどかなるに、南表のあかり障子少しあけたるまゝ、机によりて、心地よげに睡れる少女の見えたりしこそ、いとをかしかりしが。肩のあたり、房やかにこぼれかゝりし黒髮の、輕げにふける春風に、少しうちゆらぐ樣など、繪だくみが妙なる筆にも、及ばじとなん覺えし。

（完）





虞氏の涙

（一）

塚原蓼洲

「あゝ醉うた〳〵。」恁う醉うて罷り出でたる者は京都山科の片ほとりに住居いたす池田久右衞門……
……と世を忍ぶ假の名を云ふてからが駄目じやのう。皆樣には疾に御存知の赤穗浪人、大石内藏助こりや輕、居るか、居るかやい太郎冠者。内藏助いかう醉うたぞ。念なう醉うたので白狀いたす。眞實く赤穗浪人の大石内藏助…………」
酒臭き噯氣を吻きながら、何やら得知れぬ囈語を云ひ〳〵、大石内藏助と自ら名のる人を見ると

成る程去年の春、主の内匠殿が凶變の際、其の城地の赤穗に籠つて、討手を引うけ切死を爲う、追腹を切らう、仇家吉良殿の首を狙はう、盟約を結ばう、血判を爲やうと血眼で奮激いだ内藏助、確かに國家老上席の其人である。

其人ではあるが、去年と今年と年も變れば、面容も變はる、隨つて其の料見も變はるかして、其の當時の血眼は、今ではでれりとした他愛もない泥醉眼、大野等はじめの不義を罵つて、血を咬むだ口からはわんざくれの小唄節、其の上にも有らう事かや、四十面さげた分別の塊ともある軀躰で、祇園島原の惡所狂ひ、其の衣服はと見れば、あだ洒落けた緋無垢の重着、然うかと思ふと鼠木綿の腰法衣、白髮交りの禿い頭髮を押立ての卷茶筌にして、竹片か木刄か中刄かあやしき腰刀の近所には、印籠やら燧袋、虎の皮の巾着に大瓢簞だけは必らず提げてゐる。これで鳴く聲鶏に似たらばと京童は爪彈きの囃し物にして嘲笑ふが、時としては大道に醉ひ潰れて、四脚で這ひ廻つて、犬と錯認へられる事もある。

それで本人は平氣。人有りて、常年の赤穗の事變を語つて、彼が目下の心事はと問へば、彼は些少と苦笑して、頭を爬いて、其の手を左右に掉るばかり。

（二）

今、輕と呼ばれたのは、伏見の撞木町、一文字屋次郎左衞門の一人女で、芳紀方に十七といふ嬋兒である。いかならむ物の因果か、老父ほどに齢の差つた、然も人には人で無いものゝやうに指を斥される此の内藏助が最愛の妾といふのを、那女はまた愛いとも爲ずに、譏謗の種樣なのが耳竅に入るをも花の蕾に只笑つて聞き流すのは、抑々非

凡いのか、艶顔に似合はぬ虚呆なのか、但しは又た肚底に巧圖の見懸けた姦計でも有つての事かと兎にかく穿議物といふのであるのだが、打見たところは如何にも仇氣ない、愛嬌の滴るやうな、然りとて痴呆でない、眼鼻立の蕾く締つた品の好い振袖の娘。

「おゝ、これはまあ太甚いことやな。はゝゝゝ又たお頭に紙片が着いてをりますの。」

と嘲けつゝ笑ふ。内藏助は注意られて、漸々取つて、忌々しげに其を棄てゝ、

「甚麽じやーいや又た那奴……あの仲居めらが惡戯しをつたか！いや輕、今日はあの一力でのう衆妓を聘げて、太甚う飲んで、鬼事して面白ろう遊興びをつたに、身の上の大事といふが起つたでの、内藏助ともあらう侍が取る物も取り敢へず敵に背後を見せぬ先から逃げ戻つたわ。あはゝゝゝ。」

座敷の樣にどさりと腰掛けて、打笑ふので、輕も興醒め顏。

「そりや、ま何事でな？」

「乃公が討手じや。」

「え？討手?!」

と摺寄ると。又た哄笑つて、

「いや討手より猶は可怖しい母者の夜撃じや。いや又た俺が母者といふたらのう、硬いは〳〵、お頭は石火矢で、薙刀は名人か。俺が養母と來てをる上に内實は故殿の叔母樣じやで、主筋にもお當りやれるか。これに出遇うては色酒の英雄、内藏助も亂離骨灰じや、で殘念ながら背後を見せた。今に跡追うて此方へ御座らうも知れぬがの、もしも見えたりや俺は來ぬと云ふてくりや。其の間に一睡眠。然し雷に臍取らるゝ惡夢でも見ねば好

がのう。あ、桑原々々じや。あはゝゝゝ。」
双刀も所有物も其處へ放下して、
「あ、ついゝていゝれ、〳〵！」

（三）

「いや狙着た〳〵、私が悴のこゝへ入りましたを狙けて來て面會うと云ひますじや。何んの母が悴に逢うに、隱しやんな〳〵。」
と云は彼の老母で、老母とは云へど尙だ五十六七の、內藏助には姉ほどの年齡。然りながら累積る苦勞を其の額上皺紋と頭髮の白髮とにあらはして腰に梓の弓は張らぬが、頰には那須野の篠をはぐゝやせめといふのを見せてゐる。黑綸子の被布、白紗綾の下衣、威儀を崩さぬ後室姿、優やかにはしてゐるものゝ、無念の眼はやゝ血迸つて、遺恨の懷裏に手を入れたらば覺悟の短刀も出かねまじき氣色と云ふので、聲も皺嗄れて、呼吸も尋常で無い。
扨こそと頷いた輕、
「隱くすと申して甚麼を秘し申しませう。御察しの通り、妾め內藏助さま御召使の輕、旦那様お母親様に入らせられますなりや妾にも御主様、御主様の御耳をかすめる杯、此の輕は肚底にも存じませぬ。」
口狀は立派であるが、此のお婆様、此方の口先で圓められすば自も大事、他も大事、はて什麼したもの？といふ心配の面色はさすがに見えてゐる。
「おゝ好う云ひました、其もじは私が召使とな。召使なりや屹と言ひ附くる事がある。誓文しや。」
「はい、何の御誓文？」
「主の私に對うて虛僞を云はぬといふ誓文、見せて下されや。」
「はゝゝゝお容易い被仰りつけ、誓文はいたし

ませうが、唯今申した此の輕が御耳を掠めぬと申した事、尙だ御疑念が…………。」

「ありますく、有る證據はあの腰刀、あれば誰がのじや。」

南無三寳、失敗うたのは彼の其の持主に放下し出された双刀といふが、仕舞ふ際もない間に押寄せられたので尙だ其儘に轉がされてゐる、其れを疾くも地獄目の母者人に見附け出されたので彼もはッと爲た。

絕體絕命、彼は沸湯を呑む思ひで、

「誰がのでも御座りませぬ、旦那樣御指料………

……………。」

「其の悴の指料がこゝに有るのに、主は居ませぬか！」

輕に胸を据えたのである、

「はい、此ごろは其の御刀をも帶しませいで……

…………。」

「え、那奴か？刀も此頃は指しませぬ！え、眞實に指しませぬか?!」

といふ母ごの眼からは、烟も立つべき無念の熱涙が、はら〳〵と零ちて、瘦せた拳を顫はして、「ちゑゑ！」と牙を咬み鳴らした。

無念でもあらう、殘念でもあらう、去年の春遺恨の腹居つて失せられた內匠殿は、主である上にも猶は現在の我が血をわけた甥ごである。其の甥ごの敵、しかも世にのめ〳〵として居る仇敵の吉良を討たせるは差詰め我が悴で、其の悴の內藏助も赤穗では養父の賴母、すなはち我が亡夫の位牌に對つて誓言した、而已ならで此の義母の面前でも誓言した、「必らず此の御無念は晴らさせまする、晴らすがならねば腹切つて泉下の御供をいたしまする、兩樣のうち孰方か一つ！と賴もしくも誓ひ

そつた其の辭はまざ〳〵と尙だ我が耳に存つてゐるに、此頃の不仕埒たら什麼？惡所に狂ふ、酒に溺れる、自宅をば空屋かのやうにして、嫁をば後家か杯ぞに思ふて、寄り附かぬ。夫れさへあるにいかな事とて戸外を歩くに双刀も指さぬ。魂を忘れて出る。ま、何たる腐敗つた心！腹が立つといふよりは愛想もこそも｜寧ろ呆れる。呆れるが猶且無念は無念で、犬と云はうか、畜生と罵はねばならぬのが、義理ある仲とは云へ我が悴として見ねばならぬもの、と思へば到底も死にたい程腹が立つ！

然も其の双刀、――恨めしさうに座敷の片隅に投げ出されてゐる其の双刀を何かと視れば、其れは亡夫が婿引出にとて彼奴に與れられた、裝束も依然の其の双刀！紀念物である。其の紀念物が惜し氣も無ささうに轉がされてゐる、其の場所は何處かと云へば、其れが性根を腐らせる毒藥とも思ふ可憎い妾の家！

母では泣いた。泣いて多時くして其の刀を手に把つた。

（未完）

名殘の一夜

榜　夫

（三）

徹夜しても名殘りは決して盡きないのであるけれど、明日は一日掛りの道中ではあり、幾ら汽車だからつて相應の旅勞れはあるものなんだから、好加減に眠入て好加減に頭を休めて、まア〳〵明日の一番に乘後れぬ用心が肝要だらうと父親の注意に一同も賛成して、折柄一際澄渡つた月の光を後に見捨てゝ、己がじゝ、夜の物を引被いで寢に就いたのは十一時過、かれこれ十二時にもならう

かと思はれた時分だつた。

◦ ◦ ◦ ◦ ◦

魂が何處ともなく浮び出たかと思ふと、綱子は何時間にか本鄕の片町邊を歩いて居た。

『ねえ玉子さん。』

直ぐ傍には海老茶袴を穿いた、甲斐々々しい風俗をして居る玉子が居たので、綱子は嬉しさうに其方を見た。

『私首尾よく及第してよ、思つた程に六ケしかあなかつたから、私本當に安心したわ。』

玉子は恁う聞くと歩みをゆるめて、

『其れや好かつたことねえ、私何より恁よりお芽出たく思ひますわ、本當よ綱子さん。』

『でも初めはねえ、私何うしやうかと思つて居たのよ、何しろ受験者が三百人近くもあるんでせう、其中から優等者五十人を撰拔するんだつて聞きましたから、毎日胸ばかりどきつかせて、本當にもう氣が氣ぢやあなかつたのよ。』

『お國の方ぢやあ嘸お喜びなすつたらうねえ。』

『はあ、母さんから御褒美に、糸織の下着を織らせて寄越すつてね、二三日前、左樣いつて寄越しましたの。』

玉子は可愛らしい口元を小さく窄めて、

『何樣が織つてお寄越しなさるの、阿母さんですか其れとも職人!。』

『姉さんが織つて寄越すの。』

『其樣こと姉さんがなさいますの。』

『はあ。』

『何時お覺え遊ばしたの其樣お仕事?。』

『學校を卒業してから國へ歸つて覺えましたの。』

『左樣御器用だわねえ。』

『でも本職の樣なわけには行かなくつてよ。時々

ぶつ〳〵したものが織づかへて無器用なこともあるんですもの。』

『併しもう此頃ぢやあ其樣ことはないでせう。』

『何うだか、事によると無くなつたかも知れませんが、姉さんは一體かまはない方の性質なんだから、織づかへなんぞ拵へたつて、些も心配する事はないんですから、猶且今度もぶつ〳〵だらけかも知れませんわ。』

『姉さんはお幾つでしたの。』

『今年取つて卅一よ、もう大變なお婆さんだわ。』

『何時お嫁入なさるんでせうね。』

『來年だつて云つてますね、新屋の道彦さんが丁度大學を卒業なさると直ぐお嫁入するんだつて云つて居ますわ。』

いひかけて氣が付いた樣、急に言葉を低く落して、

『すつかり私忘れて居たのよ、貴孃何時東京へお出になつたの、私より先、其れとも後？。』

『一日ッきや遲れやあしなかつたわ、急に行く事に極つたから、其れで直ぐ出掛けて來たのよ。』

『學校は何處？。』

『傳通院許の淑德女學校。』

『お宅は？。』

『小石川〇〇〇町、些お遊びにおいでなさいな、何にも氣づかひな人は居りませんから。』

『有難う、貴孃も私ん許へいらつしやいな、叔父も叔母も本當に優しい人なんで御ざいますから。』

『有難う、何れ其うち伺ひますわ。』

『私も近いうちに伺ひますわ。』

『是非ね。』

『屹度。』

『貴孃も。』

『貴孃も。』
同じ事を鸚鵡返しに語ひながら、さも樂しさうに歩いて居る、何の位ゐ經つたらうか、綱子はもう一人で居る、玉子の姿は右にも左にも前にも後にも見當らなくなつて、自分は今恐じげな山の半腹を攀登つて、呼吸をせい／＼急ませながら、ひた登りに登るのである。
何といふ山だらうか、其樣ことは無頓着、只もう登りさへすれば可のだといふ意氣込で登つて行く、足もとは段々に遠くなり、頭の上は一刻々々の白雲を掻亂すのである、風は寒くなる、其處らがなんか知ら暗い樣になる、身振ひが出て來る、恐怖心が湧いて來る、頭の髓が呻々と痛み初めるで恍惚と立すくんで、茫然前の方を眺めて居た。
『此處は富士の山の頂上か知ら。』
悠う呟いて溜息を吐く。

『何と思つて這樣處へ來たのだらう、私は餘程馬鹿なんだね、たつた獨、强力もつれずに這樣高い山の頂上になんか登るなんて、……。』
何處からか悽まじい物音が聞えて來た。
『何だらう？。』
ずゝずゝずらん。ずーん／＼ずーん／＼。
胸が痛くなつて眼が眩んだ。
『あつ。』と叫んだ自分の聲に、思はず我に復ると身は厚綿の夜具の中、びつしより汗を掻いて疲れきつて居た。
『あゝ夢。』
四邊をきよろ／＼と見廻して居る。
有明に置いた箱行燈の焰が、眠さうな光を瞬かせて、八疊の間の隅々を薄白くほの見せて居る。
直ぐ頭の上の柱時計は今しも三時を報ずべくちくたくの響を綱子の鼓膜に刻み付けるのである、淋

しさといつたらない、身體が慄ふ、自分で握つた穴の中へ自づと壓沈められて行く樣な心持である、

『あゝ厭だ。』と綱子はしみ〴〵叫び出した。

『及第したつてつまらないわ、阿父さんは居ず、阿母さんは居ず、姉さんも兄さんも居ないのだもの、些も樂しいことつたらありわしないわ、今の夢の樣に、玉子さんでも一緒にお行きなさると可いんだけれど、其れわ出來ない相談で無駄なこッたし兄さんは、二日か三日で歸へちまふし、後には私獨法師……馴染の薄い叔父さん叔母さん、夢では優しい人達だつて云つた樣に覺えては居るけれど、實地に當つてから頭に描いた夢ではあるし、實際は意外にも逆さになつてるかも解らないのだ、あゝ忌だ〳〵、もう〳〵忌で〳〵堪らない、何故出京を承知したらう……、』

『何故出京を承知したらう。』口の中で呟いて扨おもむろに臥轉をした。

（未完）

村岡勤王談（承前）

森林黑猿

西鄕吉之助は村岡に向ひ、

「さて、何よりお話し申さうやら、戊午の年以來世上の騷動、御身にも圖らざる禍にて、一旦江戶表へ下向なされしよし、寔に驚き入りたる次第、去り乍ら間もなく御赦免に相成りしは、先づ以て重疊に存じまする」

村岡「命長ければ恥多しとやら、老いさらばひし媼の生耻、申すもなか〳〵口惜しく存じまする、そは兎も角、先づお尋ね申したきは、上人は御身諸共に、薩摩の瀨戶に入水なされしと、承

承りしに、図らずも今日の見參、如何も不思議でなりませぬ。もしや、彼の噂は僞りにて、上人にも今尚ほ御存生にて在するや」

と問はれて流石に西鄕も、默然として答へかねましたが、稍あつて、

西鄕「お尋ねに預りて、面目次第もムらぬ仕合なりながら申さねば事の始末相分らず、一通り御聞下さる樣、上人鹿兒島に安着の後は、某、如何にもして、不自由なきやう庇陰申さんと心を盡せしも、何時しか此事幕府役人の耳に入り、執念くも捕人を薩摩に遣はし、表向き我藩に、上人引渡の義を掛合に及び、進退維に谷り、我藩にても、固より如何にかして、隱匿はんとの評議なしゝが、斯く表沙汰と相成りては詮方なく、引渡すべきに定まりしが、斯くては、某、一旦かくまはんと誓ひし言葉に背き、武士の本意にあらざれば、一度、日向路へ落ちんと上人に語らひしに、

と言ひつゝ、聲は漸く震ひ出しました、西鄕如何に稀世の英雄なりと雖も、昔を忍ぶ涙なきにあらず、悵然として又も語を繼ぎ、

「上人の言はるゝに、御身の志は辱なけれど、斯まで手の廻りし上は、何處に逃るゝとも、免れ難からん、我は已に覺悟せりとの事………實に某とても、逃れ得べき身にあらず、死なば諸共にと語らひて、其夜船出なし、谷山沖にて、二人抱合ひつゝ入水せしに、船人に救ひあげられ、平野次郎と、下人重助とに、介抱せられ、淺ましく、我は命助かりて、上人は其儘返らぬ旅路に赴かれしを、悔めども及ばず、某は遂に藩より、大島へ遠島申付けられてムる」

と語れば、村岡も聞く事毎に打驚きて、答ふる言葉もなく、さしうつぶきて居りまする、西郷は倘は語を繼ぎ

「漸う此頃は赦免の身と相成り、名を大島三右衛門と改め、忍びて上京致せしが、面なくは厶れども、先づ此事御身に告げ參らせ、殿下に言上お賴み申さんものと、お尋ね申して厶る、二人死を誓ふて、我のみ存生するは、義なきに似たれど、今御國の有樣、麻の如く亂れたるに、寸分の功を効さずして死なんは、殘



念に存じ、惜からぬ命を存命申すも、國の爲、此義宜しく言上下さる樣にと

涙ながらに演べまするゝ、村岡はうち點頭き「承知致して厶ります、何は兎もあれ久々の御面會に、山里のかなしさ、何の風情も厶りませねど、今日主家より、頂戴いたしましたれば、此にて一献お過し下さるやう」と八寸の重詰料理を出して、盃をすゝめまする、盃は手に取れども、西郷も浮ず、村岡も今更古事のしの

ばれて、さしうつぶきがちなるに、稚のうち、自ら濕めやかでおります、西郷は今はとて、暇乞ひして歸らんとする時、村岡は、

「去らば、遠路の所ゆゑ强ひてお留めは致しませぬ、此のお料理は、殿下のお下りに厶りますれば、お土產に、お持ち下さる樣」

と、菓子折を取出さしめ、それを詰めさせながら、村岡は西郷の面を打眺め

「此の菓子折も、お菓子を喰べ盡した跡は、不用の品に似たれども、斯樣に殘し置けば、又唯今の用にも相立ちます、何品に因らず、一時の用が濟めばとて、棄て丶はならぬものかと存じます」

と、云はれて、流石の西郷も、熱き汗をしぼり、

「お志有難く存じまする」

と、暇乞して歸りましたが、此の菓子折の譬は、人も一時の用に立て丶、後は不用なればとて、棄つるものにあらず、との意でおります、西郷も自ら悟りて愧入り、其後も屢々訪問したさうです、村岡八十歲の春を迎へて壽宴を開きし時、畏多くも時の帝より、天盃を賜はりました。嘗て天顏に咫尺し奉りたる時、

「其方男增りの女なれば、名は短冊の表に書くべし」

と云ふ、かしこき詔を奉じて、其後はすべて、表に村岡矩子と書いたです、寔に尊き事で厶います。

村岡多藝にして、茶花は云ふも更なり、碁畫をも好み、書は老いてます〳〵見事、歌は其長ずる所でないと見えまして、述懷の歌に

　雨あられはげしくふれど軒ふかき
　　わが家はそれと音も聞えず

と詠んでおります、其頃より自ら小さき石塔を買ふて、庵の下に立てましたが表に村岡の名あるを見て、人々が、

「村岡どのは未だ存生中なるに、何者の惡戯なるか取拂はん」

と云ふを村岡制し、

「それは妾の所爲でありますす、人々が日頃村岡死なば、大きなる石碑を建てんと相談さるゝよし、それを聞いて、いと歎かはしき事に思ひ、斯は自らはからひました」

と答へたさうです、村岡はかよはき一婦女子なるに其氣象老いて益々壯んに諸國の有志を助けて、公卿縉紳に遊説せしめ、以て鴻業を翼賛し、生きて王室の中興を觀、宿志一朝にして遂ぐ、寔にめでたいことでムいます。

明治五年左の通り申渡されました。

前年近衛家勤仕中、深く國事を憂ひ、戊午己未の際、諸有志の徒に心を合せ、周旋いたし候處、遂に嫌疑を受け、一旦幽囚に就き候得共、始終志操を變せざる段、婦女には奇特の事に候。依レ之爲ニ其賞一、終身現米二十石下賜候事。

壬申正月十日　　太政官

其翌即ち明治六年八月廿三日を以て、直指庵に沒しました。後十八年朝廷特に其勤王の功を嘉みせられ、從四位を贈られました。地下の女丈夫その名は千古朽ちません。

（完結）



文林

禁苑新樹　　東久世通禧

うしをさす濱のみそのゝいけ水に
若葉のかげのうつりけるかな

夏瀧　　長岡護美

木かくれて目にかゝらねど瀧つせの
ひゞき涼しきやまかけのみち

夏海　　竹屋光昭

なつきても暑さをしらぬ北の海
磯うつなみのおとそさえたる

雨後新樹　　長谷信成

若はさすさくらの梢あめはれて
きのふのはあの雲ものこらす

磯松　　宮地嚴夫

面しろくたち榮えたるいそやまの
まつは船より見るへかりけり

谷杉　　北郷久政

そま人の斧をのかれてそこふかき
谷のおひすきいく世へぬらむ

蜘蛛　　芝葛鎭

はゝきもて拂ふあとよりいく度か
軒はにすかくさゝかにのいと

夏隣　　鎌田正夫

涼みにやみな出ぬらしあのかきの
となりは人のこゑもきこえぬ

夏池　　大口鯛二

水きよき御いけのそこに影みえて
すはまのあやめ花さきにけり

山寺子規　加藤義清

きかぬ夜は淋しかりけりほとゝきす
　啼くをつねなるおつのやま寺

友　下田春興

よしとほめあしといさめてなにはつを
　ならふころよりなれしきみかな

深山瀧　鍋島榮子

年々にみちもひらけてやまかけに
　くるひと多きみねのおほたき

筍　柳原愛子

千代のかすよむ心ちせり朝な〳〵
　おひ添はりぬるにはのたけの子

わかはの露　南郷柳子

しろたへのころも手すゝし朝風に
　樫のわりはのつゆもこほれて

竹徑通幽處　北島以登子

おもしろき家もありけりくれ竹の
　茂るしたみちめくりゆく手に

水族館　大谷章子

水そこにひそめる魚もこのころは
　ひとのみるめにかゝるなり見

夏田　中村禮子

山かけの田川のくろもはたるおふ
　ひとかけみゆる夏はきにけり

朝梅雨　佐藤艶子

吹すさふのきのまつ風こゑそひて
　さみたれさむき朝はらけかな

熱海　小川直子

いそやかた軒はの松の木のまより
　見ゆるや伊豆の熱海なるらむ

自轉車　河村重子

いとなみのしけき此世を水とりの

足にひまなくゆくくるまかな

辨内侍　服部磯子

ますらをのこゝろをくみて末終に
　尼となりてやみさをたてけむ

文ほご

醫科大學　永潜生

日比したしき人々の許に、文やる折ふし、かきてまゐらせたるを、いでや、ほごとなし侍らむと、おもふにつけても、さすが捨てがたきこゝちせらるゝまゝ、三つ、ふたつを、こゝにとりいでつ。もとより、花橘の、ゆかしき香あらんやうなけれど、山ほとゝぎすの血に啼までころは、ありなんと、見給ふ人は、みたまへかし。

○夏の休みに、古里にかへりたる頃、籬に咲ける朝貌の、すぐれて大きく美はしきを紙に押しつけて、都なる友許に送りたる。

つゆながらきみにさゝげむよしもがな
　あれにしやどの朝がほの花

○ことしは、帰へらじと云ふ夏のころ、古さとなる姉君の許にまいらせたる。

あぢさいの花さくみれはふるさとの
　かきねのいろのしのはるゝかな

姉君よりのかへし。

かへりこぬきみをしのふかあぢさいの
　花もことしは色なかりけり

○これも夏の休みなりける。父君、母君、さてははらからと、なつかしき夕涼みのまとゐして、くさ〳〵の物語に、かたぶく月をながめつゝ。

乳でひしおのかむかしをかたります
親のみぐしにもあるなゆめ

○著書を艸して、雌雄陶汰の篇に到りけるに、折ふし、庭前にすだく蟲のねの、何んとなく、心ありげなりければ。

すゝむしの夜たゞなくなるねをきけば
つゆの床にも戀はありけり

豆の花

『女界』記者　清水橘村

妹茶つみの

妹茶つみの赤襷　紺の飛白の色白に
姉さま被り蝶々髷　ませた手振も戀知らず
節は十四の細い喉　誰に聞かそと歌ふやら
崇ふとしや

崇としや地の精靈の　琴高うあるあり小川
崇ふとしや天の精靈の　笛高うなるなり木の葉
海登る朝日の信仰　禮拜の夕月白し

稚な兒が

稚な兒がうまき眠の　夢呼ばう聲は滿ちたり
野の森の若葉緑や　露しらき小草に溢れ

おゝ可愛兒よ

おゝ可愛兒よいとし子よ　父母の若木にかへる
汝はしも神の授け兒　二葉なす春より匂ひ
白菫蝶も生れぬ

柴垣に冬をかきりて　草の家陽炎もゆる
繼衣つゝれといかて　わか心よしや包まむ
鳩よその翼をかしね　喜びのみ空に舞はむ
歌は野の小鳥にかりて　言ひがたき想を述べむ



七月五日兼題

夕立

天　大阪市東區平野町三丁目　桝田益子

なる神の聲さへそひてゆふたちの
　あまくもさわくとゝろきのふち

評、趣向たくみにして、語勢つよし。

地　三河國宝飯郡下地町　永井さい子

身にしみてすゝしくもあるかゆふ立の
　けしきのもりの木々のしたかせ

評、調みやひにして力あり。

人　岐阜縣美濃大垣町南寺內　吉村せい

磯のをか田にひくみつのあらさひも
　なかしてけりなゆふたちのあめ

評、趣向俗に近けれどいひまはしなかし

甲之部

大阪　中館やう子

うちまける大路のちりもときの間に
　うちしつめたるゆふたちのあめ

東京　片山あや子

ふしの根は夕日まはゆく見えなから
　さゝはにかゝるなつのあめかな

肥後　野口靜子

もゆる火のけふりも雲にたちそひて
　ゆふたちすなりあとのかしやま

肥後　田代靜子

とり入るゝひまだにもなきゆふ立に
　ときあらひきぬまたもぬらしつ

見るからに雨きはひきて日をさへし
をすふきかへすかせのすゝしさ
東京 近澤和子

乞のみししるしも見えてたちまちに
田のもにそゝくゆふたちのあめ
廣島 春野靜子

比えの嶺は雲たちこめて見るうちに
矢はせのわたしゆふたちのふる
長門 岩田章子

夏かはをくたるふなひとそゝやとて
いまふかぬ間にはるゝゆふたち
三河 服部正子

くもるかと見れは晴ゆくやまの端の
いり日をおちふゆふたちのあめ
長崎 內藤美與子

くもさわく雷かみやまの名もしるく
おとすさましきゆふたちのあめ
札幌 山田婦美子

くもきはふ三輪のひはらの夕たちに
しはしやとかるすきのしたいは
東京 山本梓子

乙之部

みるかうちに空かきくらしなる神の
とゝろきわたるゆふたちのあめ
大隅 山田いれ子

くさのはのつゆをたつれてとふ蝶の
羽そてほしあへぬ夕たちのあめ
下野 井上しぬ子

たもとまて通りてぬれぬころもての
もりをすきゆくゆふたちのあめ
陸奥 吹田たけ子

なるかみのおとはの山にひとむらの
たなひくゝもやゆふたちのあめ
京都 坪內りき子

ときのまに水かさ増りてさとかはも
なみたちさわくゆふたちのあめ
但馬 田尻保代子

ひるの間のあつさをなかす夕たちに
すゝしさそふるまつのしたかせ
埼玉 前野蕗枝子

苫むしろふきあへぬるにゆふたちの
そらはれわたるふれのすゝしさ
肥後 關かれ子

あしひきのやまたちまよふむら雲は
ゆふたつあめのなこりなるらん
東京 保坂とく子

なるかみの遠くきこゆるかのさとは
伊豫 勝山かつ子

いまかふるらむゆふたちのあめ

ゆふたちのすきにしあとの涼しさは　伊豫　松山綠子
なつをわするゝこゝちこそすれ

たもはたもかわくこのころゆふ立の　三河　服部萬子
あめこそなつのいのちなるらめ

うら人のとまやのゝきにおとたてゝ　東京　牛山素子
いそへをめくるゆふたちのあめ

風はやみやかてふりくるゆふたちの　東京　小野靜子
はれまなしはしまつのしたかけ

ゆふ立のほとなくはれてあさちはら　東京　椎野淸子
かせにこほるゝつゆのしらたま

おとのみを軒にのこしてかせはやみ　東京　椎野瀟子
かたへはれゆくゆふたちのあめ

堀へかれしひるのあつさを忘れけり　東京　松林幾子
しけるあをはにそゝくゆふたち

草の上につゆをのこしてゆふたちの　札幌　山田靜子
すゝしく晴るゝむさしのゝはら

ひらくしのこゑもすゝしくきこゆなり　日向　紀藤信子
ゆふたち晴れしもりのしたかけ

ひかけさすかたへはゝれて遠やまの　東京　安井きやう子
ふもとにかゝるゆふたちのくも

しをれつる庭のなつくさ見るか中に　東京　名木山勝子
みとりそへけりゆふたちのあめ

見るかうちにむらくものきほひ來て　東京　戸塚てつ子
ふるもすゝしやなつのゆふたち

この里はたゝときの間にはれゆきて　東京　川村松子
檜はらにかゝるゆふたちのくも

しづか田のみあらそひもなかるらん　東京　金野やす子
たねすもめくるゆふたちのくも

ゆふたちの雨にあつさはなかされて　東京　三好珍子
すゝしきつゆにやどるつきかけ

かせわたる庭のわか葉のつゆちりて　和歌山　池田松枝子
なつをわするゝゆふたちのあめ

いなつまのひかりすこくもなる神の　三河　石川類子
あなといふまにはるゝゆふたち

ゆふたちのはれてすみたる池の面に　東京　大川ふく子
たゝよふつきのかけそすゝしき

なち方にやまめぐりすとみるかうちに　肥後　德永萬壽子
やかてのきはにきほふゆふたち

世のちりを洗ひなかしてゆふたちの　東京・佐藤滿智子
なこりすゝしきのきのたまみつ

苗よりもしをれて見ねしさとひとの　東京　岡田嬌美子
こゝろにそゝくゆふたちのあめ

水かれしなつのやまたのゆふたちは　東京　戸賀崎久子
おほみたからのたからなりけり

名殘をはわたちに見せてなくるまの　東京　戸賀崎治子
ほろもかけあへすはるゝ夕たち

ふしの根に雲たちそめてふりかゝる　埼玉　橫田音羽子
ゆふたちひろしむさしのゝはら

かまくらの海はらわたるゆふたちに　埼玉　橫田秋子
はせのあたりはなつなかりけり

あつき日にふるゆふたちははたゝ神　周防　村上操子
かしこきものゝうれしかりけり

ゆふたちはあとなく晴てくさの葉の　大阪　大阪谷信子

玉まゝになこりのつきを止めおきて　つゆふきはらふかせのすゞしさ　大阪　伊勢村花子

ゆふ立のあめのなこりにうちなひく　はるゝもすゝしゆふたちのあめ　肥後　鶴田春香子

ぬは玉のよるかとはかりくろくもの　にはのたまささつゆすかるなり　肥後　佐々有鄰子

山の端はさやかに見ねていかつちの　たちさわきふるゆふたちのあめ　東京　太田やへ子

きほひ來る雲のあしとくゆふたちの　とゝろくさとにゆふたちのふろ　伊豫　竹村竹里子

雲はやみあめきほふなりゆふからす　すきゆくあとはなつとしもなし　東京　片山ふみ子

くもまよりよもになりゆく夕たちに　れくらなからにまたさわくみゆ　東京　平尾あさ子

なら山のこのてかしはのふたおもて　かたへすゝしきかせもこそふけ　東京・北島功子

ゆふ立のくもはいつしかはれゆきて　日はてりなからすくろゆふたち　東京　田中秀子

丙之部

たひ人の立ちよるかけもさらになく　くさはにのころつゆそすゝしき　肥後　德永雪枝子

うたゝねのねさめにきけはゆふたちの　ねろゝもつらしゆふたちのあめ　肥後　坂本美代子

たへかたき夏のあつさもときかまに　のきはすゝしくおつるたまみつ　肥後　坂本美智子

ふりかはりゆくゆふたちのあめ

うちつゝきてる日にしほむ朝かほも　ふるゆふたちにいろやかへらむ　東京　松村あさ子

夕たちはのきにかゝれりむしほしの　ふみのなかはもとりいれぬまに　大阪　山田よね子

すはやとてちまたを走るをくろまに　きほひてかゝるゆふたちのあめ　大阪　稲垣まさ子

雲たちてものとりいろのひまもなく　はやふりいつるゆふたちのあめ　山口　田村米子

たゝならぬくものかゝると思ふまに　はやも降り來るゆふたちのあめ　山口　田村多豆子

神はなりくもはおほひぬしかれとも　よそにすきゆくゆふたちのあめ　山口　田村道子

ゆふたちのそらには秋やかよふらん　かきくらしふるあめそすゞしき　埼玉　關口志津子

うなゐらかかへりをきそふ片田みち　かみはためきてゆふたちのふる　東京　大木光子

ふく風もにはかにすゝしゆふたちの　なこりとゝむるたまさゝのつゆ　埼玉　森谷もと子

音たかくふりいてにけりにわかあめ　みち行くひとのたちさわくまで　富山　長谷川初枝子

たへかぬる今日の暑さをゆふたちの　なかしてすゝしにしのかけはし　東京　長尾菊枝子

しはしこそすゝしかりけれふり出て　あしとく過くるゆふたちのあめ　伊豫　綠友子

風はやみきほひてかゝるゆふたちに　あつさもよそにふきやられけり　松山　梯たけ子

かきくらしあなすさましと思ふ間に　松山　川岡梅子

　やかてはれゆくゆふたちのあめ
にはかにも風ふきたちてわかやとの　松山　水木友子
　たけむらさわきゆふたちのふろ
くもきそひはや夕たちはすきゆけと　埼玉　前野ふさ子
　すゝしくのころ木ゝのしたつゆ
はり衣をいそきいれよとはしために　東京　佐藤成子
　いふまにはるゝゆふたちのあめ
夕たちのふりしくおとのきこゆきて　東京　鶴岡爲子
　あふくたかねにかゝるむらくも
かの里はゆふたちすらんあしからの　神奈川高　田榮子
　せきをすきゆくゝものひとむら
暑き日のかけろふをのみまつなへに　神奈川高　田六子
　ゆふたつくものそらそすゝしき
夏の日のおもひもかけぬゆふたちに　長崎　八尾いへ子
　ぬれてすゝしきこころもてのもり
もになんとおもふ斗りのあつさをは　東京　荒井満武子
　なかしてすゝしけふのゆふたち
もろ〳〵の草きもけふはいさみたつ　東京　荒井千代子
　ゆふたちふりしあとのすゝしさ
夕たちはひとむらすきてうきくもの　東京　荒川幾久子
　いつしかはれていつるつきかけ
くもわきふる夕たちもはれゆきて　東京　丸本濟子
　にはのあをはにやとるつきかけ
しをれむとおもひわひにし草木にも　伊豫　松山春野子
　うれしくそゝくゆふたちのあめ
あへきゆくあつさわすれてゆふ立の　伊豫　原田亀代子
　ふりにしあとはすゝしかりけり

時のまにやまのあなたはくろ雲の　伊豫　宇田千代子
　たちまちそゝくゆふたちの雨
ときならぬあられの雨にまちろかと　伊豫　宇田すき子
　おとのはけしくゆふたちのふろ
ゆふたちにあつさあらひて雨たりの　三河　河合縫子
　しふきふきこむかせのすゝしさ
やまかけはかたへすゝしくなる神の　三河　本多きさ子
　おともきこゆてゆふたちのふろ
打しをれちからなけなる庭のおもの　東京　野口しま子
　くさはにかゝるゆふたちのあめ
あつさをは洗ひなかしてゆふたちの　東京　島飼みと子
　すきにしあとはあきかとそおもふ
ゆふ立ははやくもすきて庭のおもに　東京　小川たき子
　なこりすゝしきたまみつのおと
見るかうちに風きほひ來てなる神の　長崎　日高かす子
　おとのみのこすゆふたちのあめ
むら雨のすくゐこすゑになくせみの　東京　椎野ぬき子
　こゑもすゝしきすきのしたみち
ふく風にいけのはちす葉たまちりて　東京　椎野秀子
　ゆふへすゝしくはるゝむらさめ
夏のひはあせあゆはかりてりぬるを　和歌山長尾小ゑい子
　わかそてあらふゆふたちのあめ
利根川のわたしまつまのゆふたちに　日向　紀藤いく子
　たひゆくひとそふれよはふなる
ゆく船にいり日のこしてすきにけり　日向　紀藤榮子
　ゆふたちはれし琵琶のみつうみ
涼しくもそゝくゆふたちはれゆきて　日向　紀藤ふじ子

たどる野つらにかぜさわくなり
ゆふ立にあせのほそみちみつこゑて　茨城　篠塚喜代子
かと田のいな葉うちそよくなり
しけりあふにはのくさ葉に露おきて　相洲　岩橋花子
いりひすゝしきゆふたちのあめ
こゝちよや地をさくあつさ忘れけり　横須賀　上田ゆき子
眞さこをわくるゆふたちのあめ
のに山になこりのつゆのすゝしさを　香川　福家くら子
のこしてすくるゆふたちのあめ
ふく風もかたへすゝしと思ふまに　栃木　青木たま子
やかてふりくるゆふたちのあめ
家にあらは涼しきあめと思はまし　東京　高橋津音子
みちにてあふはわひしかりけり
時のまにそらもとゝろにかきくれて　鹿兒島　元村光子
いり日すゝしくはるゝゆふたち
あつさをは忘るゝ風のふきくるは　伊勢　池田梅子
ゆふたちすらんをちのやまさと
ゆふたちの雨しのきし木のもとに　伊勢　安井あや子
いまよひの月のかけをなかめん
たびひとの心もしらでふりてきぬ　淺草　笹川ふさ子
ふしのたかねのゆふたちのあめ
降りかゝるおともはけしき夕たちの　東京　古谷みつ子
はれてすゝしきのきのたまみつ
きみとわかそのなか垣はへたてぬを　東京　新海わか子
わけてふりゆくゆふたちのあめ
はたゝかみとゝろ〳〵とおほそらも　東京　香妻ちか子
小くらくなりてかゝるゆふたち

はれ渡るそらもにはかにかきくもり　三河　石川楽子
さためなき世を見するゆふたち
風まぜにきほひてすくるゆふたちも　肥後　筑紫春子
はれてすゝしききしのかけはし
わかやどののきはをすきて風さわき　肥後　德永識子
むかひのさとにかゝるゆふたち
ゆふたちにちまたのちりの跡もなく　肥後　德水廣子
いとゝすゝしきゆふくれのそら
風はやみいちひとさわくゆふたちも　肥後　德永多瑠子
やかてとやまにいり日さすなり
時の間にはやくもすきてはたゝかみ　東京　關根達子
とほくなりゆくゆふたちのそら
水かれてなけくやま田のたみくさも　大阪　伊勢村春子
うるほひみゆるゆふたちのあめ
ふりくるもたゝ時の間になるかみの　和泉　福原蓮子
おともきゑゆくゆふたちのそら
くら嶽はくもに隠れてみゑすなりぬ　肥後　鶴田貞子
かふしのはしのゆふたちのあめ
はたた神なりはためきてゆふたちの　肥後　佐々小琴子
くものふるまひたゝならぬかな
うれしくも庭にふりけりゆふたちは　松山　上原信子
よしよの空のみこれわたりしを
いち人ないやさわかせてときのまに　東京　林環子
日かけのこしてすくるゆふたち
かせかなる池のはちすにおとたてゝ　岐阜　佐藤そう子
ふるもすゝしきゆふたちのあめ
ゆふ日かけくつろふ窓におとたてゝ　廣島　衣笠澄子

ふりくるあめもすゝしかりけり

ゆきかよふ人もとたえてやちまたの　のきはたきなすゆふたちのあめ　肥後　田代綾子

足とくもはやをちかたにすきしきぬ　いまひとふりのゆふたちもかな　東京　北島操子

はらはらとふろかとみれは雲はれて　あとなくなりぬゆふたちのあめ　肥後　千知波橘子

ゆふたちのすきにしあとの雲まより　はれてそ見ゆるとほのやまのは　茨城　荒野たに子

七月五日兼題　人の新盆を弔ふ文

天

神田區美土代町三丁目一番地　田中秀子

久々御不沙汰致し候處、皆々樣には御障りなく入らせられ候由、目出度存上候。月日に關守なしとは古より云ひつたへる如く、はやいづれの家にても御靈をまつる時と相成候。御前樣の御姉上樣は、去年の冬御身まかり給ひ、今年は初盆にて候へば、さだめておはし出る事多からむかし。御生前は人の見るめもうらやましき程にて候ひしに今はかげもとゞめさせたまはず、萬見る物聞くものにつけかなしくもなつかしくもおはしまさんと、察上まゐらせ候。此菓子一箱池のはちすの花。一枝折添へ進候まゝ、御手向下されたく候。

あなかしこ。

地

長崎市新町十三番地　八尾いへ子

露子の君のかぎりの御有樣みたてまつりしより、うは玉の夜は燈火けたれし心地して、又ならうなげき悲しみ、夢現ともわきがたう侍るを、かゝなむればはや年の半をなん過しつる事、今更ながら、驚かれぬる。あはれ今日なん御靈むかへの日とて何かとそうぞき給はんと、おもひ玉ふるに付てもおはしましゝ、昔をおもひおこさせ玉ひては、やからたちの如何ばかりか、御袖をしぼらせ玉ふらん。げに去年のこよひは、共に遠つ御祖の奥つきにまうでともし火かゝげつゝ、空だのめなる行末

の事など、たのしう物語り玉ひし言の葉ばかりを殘し給ひて、花も咲あへずきえ玉へれば、おひたまへる御名さへ、かこたれて、かへらぬくりごとのみぞ、うちかへされ待る。おゝん爲にはひとの國のはかなきわざ抔は、せさせ給はず、風の音の遠き神代の御手風に習はせ給ひ、立かへりまたも此世にと、ぬさおき給ふおんことの、たふとくおぼえまつれば、色づきそむることの葉の露ばかりなるをかいつけてたいまつる。御前に手向玉ひねかし。いづれ夕つがたまうのぼりて、御靈床をろがみまをすべくなん。

かしく。

人

東京本郷區丸山福山町十番地　名木山勝子

池の蛙の聲きくも、螢とびかふ樹間にさまよふも去年にかへて今年は何となう淋しさを覺え、樂しかりし事も、今はなかなかに愛ひの種と相成申候。さるは、露子樣去年の今頃は、あな思ひ出すも、袂そぼちて、申されず候よ。幼きより睦じう交りまつり候君の御事とて、朝には袖を連ねて學びやに向ひ、夕には手引きあひて、小川の邊り螢を追ひ、あるは池の蓮をたゝへ、はた、松かげの月を歌ひ候て、かたみに行末を忍び、胸にみちたる希望の光は、ともに望の月のそれよりも輝きていと樂しう御座候ひき。さるに露子の君には、夕を待たぬ朝顔の花よりもはかなく消えさせ給ひし事、眞のことゝは、今だに思はれず候てなむ。一しは此程は思ひ出でられ候。御二方の君をはじめまつり、御姉君樣にも如何許り御心細き御事におはしますらんと、深く推しまつり候。生者必滅といふことは、佛ののりにも御座へども、未だ花の蕾のこれよりこそと思ひまつる君を、何とて嵐は無常にも散らしまつりしものやと、あまりに恨めしき御事に存じ奉り候。心ばかりは如何樣に思ひまつり候とも、拙き筆の聊かも皆々樣を御なぐさめ申すこと能はず、誠に殘念に御座候。實に今年は露子樣の新盆に當らせられ候まゝ、いとなめげ

なる事には侍れど、粗香一箱進らせ候。何卒御たまのみまへに御備へ下され度、願上まゐらせ候。其内私も御おくつきの御前にぬかづき候て、日頃好み給ひし草花手むけ、御靈なぐさめまつる心得に御座候。追慕の念堪へ難くて、唯さへ拙き筆のいとゞ亂れ候を、あはれ願はくはゆるしおはしませや。いとひろきみ心もて。

かしこ。

東京　田　中　良　子

定めなき世の習とはいへ、御母上樣御事、去年の秋しもあだし野の露と消はうせ給ひしより、如何に物うく御すごし遊され候はむと、かげながら御いたはしく存居候。私なども御やかたへ參りては、種々御世話樣に預り、やさしき御言の葉など賜はりし其世の御事おもひいで、今更に、いとも／＼悲しく覺は候、今日よりは何方も盤むかへんとて、三日の間はなきたまをなん、まつもならはしに候へども御わたりにはわきて新盆の御事故、一入御なげきもまさりぬべくさま／＼の調度とゝのへさせられ、御供養遊され候御事と存上候。御孝心深き御許樣の御事故、朝な夕な御したひ遊ばし候は去事ながら、行水のかへろ事なき、浮世の常と御あきらめ被遊、折々の御供養專一に、日頃こゝろざしたまへろ學びの道いよ／＼御はげみ被遊候樣祈入候。此桃の實少しには候へども今年は殊の外出來宜敷候間御たま棚のはしへ御そなへ被下度、まづは右まで草々。

長門　岩　田　章　子

其後はいかゞ渡らせ給ふらん、承らほしとこそおもふ折しも、去年は、もろ共に踊見つる盆を、今年は獨り涙にとの御文、拜しまゐらするだに、先づ、思ひの糸のは絶はぬ迄、しどろ／＼にもつれ候。去りし年、わがやどの新盆に、御心のかず／＼つくされし御身が、今は却りて、同じ嘆きに姿の慰め受け給はんとは。今更昔の夢を今の現に見ろ心地致し、嘸やさぞと、御心の程身にしみ深く御察し申上候。さりながら、只徒に嘆くは、佛のためにもよからずとかや。わきて、御忘れ形身の撫子もおはしますことなれば、その生ひ先色うつくしう咲きいでさせ給はんことこそ、亡き君へのこよなき御供養、くれ／＼も、こを力草におぼし[illegible]給はん事のみねんじまゐらせ候。あやし心に思ふこと餘りにいきつらねんは、却りて御心痛むる種にもやと、先づは斯くこそ、あら／＼かしこ。

なほ筆末ながら、御母上樣へ、御新盆のおん聞よしなに御[illegible]み申候。

長崎　内　藤　[illegible]　子

秋風涼しく吹わたり、山々に棚引雲のたゞずまゐ、訴ふるが如き蟲の音も、哀に聞きなさるゝ折から、御ありさまうけたまはらまほしうこそ。御おほばの刀自、ゝおもはぬ方に、棚引雲とかくれませ給ひしは、昨日と思ひ侍りしも、行駒の足なみ早く、[illegible]るうらんぼん近うなり侍れば、形見の御袖も今さらに、ひ[illegible]りぬべしと、おしはかりまゐらするも、いと悲しうなん。[illegible]にても夏山の百日のをこなひに、その母のあまちしらし、[illegible]こびに因みて、おんために、うらん盆會を、おこなはせ給ふ[illegible]との尊く有がたきにつけても、供へ玉ふ高つき、折しきの[illegible]は、醍醐の法味となり、手向け給ふ眞清水は、すみの山の甘露となんうけ給ふべければ。燈籠に花蓮を添てたい奉るにこそ。[illegible]向け玉ひれかし。來ん日はまうのぼりて、御前を拝みまつり、まゝ

世の故事を語りあかし給ふべくなん。かしこ。

大阪　桝田登子

殊更らびたるならねといづこにも盂蘭盆會とて、魂まつりすなる今日になん。そこには、ことわきて玉棚よそひ、おまし清らに、あか汲み、花つみ、野山の物ものを机に盛しもて、かしづき給ふらんとこそ。まことや御伯母君の、世にましゝふしは、かしの實のひとり子のやうに、かきなでうつくしみしを、かゞふりし身は、今も猶柞葉の母のやうに、戀ひ偲ばるゝを、あはれ年月は夢と過ぎて、はやひとめぐりになり侍る哉。此一包は、軈て興ぜさせ給ひし沈香にて侍り。御前の火取にくゆらせ給へかし。心ばかりの手向草になん。やがて身のせちみを終へ侍らば、まうのぼりて御靈をおろがみまつらんと思ひ給ふれば猶づは御まのあたりに、聞え上ぐべくかし。かしこ。

長崎　日高和子

ちりなだにすゑじと、いつくしみたまひし御方の、かへる雁の聲も悲しく雲がくれたまひしを、昨日とこそ思ひしが。またぬ日數の積りて、今年もいつしか文月の半ともなり侍りぬ。あはれ一年に一度歸り來ますならひは、御國の古ぶりとなん承れば、先づみたまの御方々の御手とらしてそ歸りたまはん。されど御姿を御覽するよしのなきを思へば、淺茅生の淺き心には露のみぞまさり侍り。健かなる御双方はらからの御達、何くれと御瓮に物調し供へ給ふは、古事者夏山にこもりおはして、茶摘み水汲み三世の佛に物し給ひしみ數にもかなひていと尊く、去年までは同じまどゐにおりつるなどおぼし出らんそのおんなげき、如何ばかりなるべき。共にはみてうれしかりつるも、今は昔となり侍るを悲しみ、燈籠に添ひて來る此うりのなかごの紅は、來る夜と明けどと打すして、泣く涙の染めたるなり。よべよりたれこめたれば、まうのぼること心にまかせず、ねもごろにながみきこゆたまひれかし。

あなかしこ。

雜報

●兩陛下の御消息　聖上陛下が日夕萬機の御親裁に御多忙なるは、常に拜聞する所なるが、伺承る所に依れば御健康上の爲め、機務の御餘暇を以て日々數回禁苑内に於て御乘馬、其他の御運動あらせらるゝといふ。かく陛下親しく御攝生に叡慮を寄せさせ玉ふ故にや、龍體の御健康は彌々益々御壯健に渉らせられ、侍醫の拜診に依れば、御肥大の龍體は追々御堅緊と爲り、時に御風氣に感ぜられし御癖も、此頃は全く其跡を絶ちて、本年は一回も御假床に入らせられたる事なき程なり。眞に近年に例し少なき御健康あるやに拜し奉ると

ぞ。又皇后陛下にも、近年は一層御衛生を重んせさせられ、定時の御日課を終らせ給ひたる後は、時間を期して御運動ありせられ、時に和洋の史書を繙かせられ、數日間御取調べの上、御手づから御記錄相成りたる書冊も既に數帙に及び、內外慈善事業の事に付ては、一層御心を傾けさせ、時々有難き思召を香川大夫、高倉典侍等に下し給ふ事もあり。御餘暇を以て數百首の國風も遊ばされ、近侍の人々に斯道の御奬勵あり。尙國民女子教育に就ては、種々有難き懿旨もあらせらるゝやに伺ひ奉りしが、華族女學校を始め、敎育部面の行啓請願は陛下の喜びて御聽許あらせらるゝ所にして、時々芝、新宿、代々木、濱等の離宮若くは御用邸に行啓仰出さるゝは、一には御健康上の御爲め、一には農產、漁業等に付深き思召より出でさせられたる爲めなりと漏れ承りぬ

●第二皇孫殿下の御降誕　申すも惶こき儲の宮御兩方の君には、琴瑟の御交りいと睦まじく、重ねて皇孫の御降誕あらせらる。皇室の御繁榮、皇礎の御固め、皇御國に生きとし生けるもの、誰かはこを祝ぎ奉らざるべき、皇太子妃殿下には廿四日の夜まで、御平常の如く御安眠あらせ給ひしに、翌二十五日午前四時二十分頃御產氣の御催しあらせられ二回計りの御產水ありしのみにて、七時三十分に至り、御安々と御分娩遊ばされぬ。その日は、恰も皇太子妃殿下の御誕生日に當らせらるゝ由にて、奇しくも第二皇孫殿下が、此日を以て御降誕遊されたるは、偶然とはいへ重ね重ね御愛でたき御事なりと、大宮人等は申し合へりとぞ。かくて御後產もいと御輕く濟させられ、御母子兩殿下とも、御健勝に渉らせらるゝよし承りぬ

●御命名　御誕生の王男子は去一日左の如く御

命名相成りたり。

御　名　雍仁（ヤスヒト）

御稱號　淳宮（アツノミヤ）

御名を雍仁と命せられしは書經に「黎民維雍」とある一節より採らせられ又淳宮と稱せられしは「德淳」の古典より出でたる御命稱なりと拜承す。

●殿下の御乳人

當分は御母妃殿下の御乳をめさせらるゝ事なるが、曩つ頃より、其御乳人として、身分素性身體とも些か申分なき女性を弘く御尋ねありしが、こゝに淺草區田原町二丁目九番地平民中村タイ（二十七年）と云ふ者こそ相應しけれとて、遂に同女に此榮譽ある奉侍を命せられ、尙他に兩名の御乳人が御介添申す事となり岩崎ナホ、高橋トクの二人は御產婆として、戶田ヤヲ、田中ノブ加藤マサの三人は、何れも御看護婦として、御誕生の當日名譽の奉侍を辱したりとぞ。



●各內親王殿下の御避暑●●●●●●●●

常宮周宮兩內親王殿

下には佐々木御養育主任の供奉にて本月二十日頃一先小田原御用邸に成せられ、暫時御滯在の後、更に箱根離宮に入らせられ、富美宮、泰宮兩内親王殿下には、林御養育主任の供奉にて、本月二十二三日頃直に箱根御用邸に成らせられ、何れも夏期中、同地に御避暑遊ばさるゝよし。

●戴冠式延期　去月廿六日擧行せらるべき英國皇帝戴冠式は皇帝御不豫のため、延期あらせられたりといふ

●愛國婦人會　その目的は戰死及準戰死者の遺族幷に重大なる負傷者にして、廢人に屬せる者の救護は、即ち本會の目的とする所にして、其會員徽章の一部に『半襟一掛』の四文字あるは是れ彼の奥村五百子が耳順の老軀を以て、北清の戰地に入り、親しく其實況と軍人の勞苦とを視察し來りて大に遺族救護の良法を設け出征軍人をして後顧の憂ひ無からしめんとし、即ち本會を創始し、熾んに同胞姉妹に說くに『願はくは君達が半襟一掛の用を節し、其資を積みて救護費に充てよ』との旨を以てせるに因めり。以て本會趣意のある所を知るに足るべし。●その役員は、會長は岩倉公爵夫人理事は一條公爵夫人外七人、評議員は二條公爵夫人外五十二人にして、孰れも熱心に會の擴張に盡力するが中にも、松前子爵、原亮三郎、佐藤進の三夫人の如きは、首唱者奥村五百子と共に最も鋭意盡力し、其効蹟尠なからず、後備少將佐藤正氏は會計監督たる囑託を受け、員外相談役二條公爵等と共に亦勵精其職に盡し居れりと、●その會員は貴顯富豪の夫人母堂等擧て奔走することなれば、其成蹟著るしく、昨年創立以來、本年三月に至る僅々一年間に得たる會員は府下の三千百八十三人

を最とし、總計一萬三千八百七十人の多きに達し四月一日以來昨今までの入會者は未だ正確に調査し得ざるも、三千餘人はあるべしと。我國各種の團體多しと雖も、赤十字社を除きては、斯の如く短時日間に多數の同情者を得たるもの無かるべし。嘗て前二回の戰役出征軍人の遺族救護は、創立の際と云ひ、殊に其調査を地方廳に一任せるが爲め十分に目的を達し得ず、被救護者の數多からざりしも、會の基礎既に確立したるに附きては、爾今府縣廳のみを頼まず、會自ら必要の調査を遂げ、會旨の遂行に盡力すべきは勿論、天災地變等に際しての救護も、彼の凍死軍人に對するが如く、最も迅速に執行して遺憾無らしむる都合なりと云ふ

●夏期講習會　神田區三崎町の國語傳習所にては例に依り來八月一日より同月廿五日迄夏期講習を爲す筈にて學科並に講師は左の如くなりといふ

日本文法平田盛胤、文學士横地清次郎、文學史文學士佐々政一、國文講讀文學博士木村正辭、文學博士小杉榲邨、平田盛胤、國語教授法川島庄一郎、課外講義審美學醫學博士森鷗外、言語學文學博士上田萬年、講習中帝國博物館に就きて小杉博士の説明示教あり

●鑛毒地救濟婦人會　同會は去月より被害地窮民病者を施療することに決し、芝區愛宕下町二の五鑛業停止起成事務所を假施療所に充て、和田劍之助氏擔任し、鑛毒地民を診察するよし。

●慈善音樂會　巖本善治氏が兼て女學生にして學資に窮する者を扶助せんとて設けたる女子實學團の爲めに去月廿八日及び廿九日上野音樂學校に於て音樂會を催し、其收入を以て同團寄宿舍建設の費用に寄附されたりといふ。

●女子成美塾　故塚田硯山氏の妻女政子は今度亡夫の遺志を繼ぎ、硯山氏の高足辰巳文學士等と謀りて、女子成美塾を神田一ッ橋通りに設けたるよし。

●新潟高等女學校落成式　同校にては去月十八日を以て高等女學校落成式を擧行し、文部大臣代理柳澤普通學務局長、外五百餘名の來賓ありて甚だ盛會なりし由。

●大島郡の女學校　山口縣大島郡屋代村龍心寺住職は、女子教育の普及を計らんが爲めに、佛教龍心寺女子學校を設け、毎朝午前五時より八時まで、算術、作文、讀書、習字等の普通學科を授けて、目下生徒三十餘名を收容せりと。



●長岡高等女學校工事着手期　新潟縣古志郡立長岡高等女學校の設計は、既に九分通り結了し、學舍敷地も三千坪、道敷三百坪の寄附地も彌々確

定せるを以て、建築認可次第工事に着手の筈なるが本月上旬より着手するを得べき見込にて、同校は本年度内に全部竣成せしめ、來學期に於て二百名の生徒を募集して開校する都合なるが、建築の重なるものは、本校、寄宿舍、特別教室、體操場、倉庫等にして、經費は建築費二萬千三百六十九圓八十一錢五厘、圖書費四百四十三圓、器具費千二百二十二圓七十二錢合計二萬二千四百三十五圓五十三錢五厘なりといふ。

●酒田高等女學校落成式　酒田高等女學校は去月十五日新築落成式を擧行したるが、田中縣知事以下百四十餘名の來賓ありて、頗る盛況なりしといふ。

●稀なる節婦　甲州東八代郡富士見村舊小石和區の高野松右衞門方にては、長男佐太郎(二十五)其妻阿菊(二十)及び佐太郎の弟某等の四人暮しなるが昨年中佐太郎は大口山に登りて、大負傷をなし、爾來躄同様となりて起居も自由ならず、父松右衞門も、本年二月中旬より病氣となり、二人とも稼ぎもならぬ身の上なれば、元來不如意勝の生活は一層困難となり、阿菊が女の手一つにて父と夫の介抱をなしつゝ、一心不亂に稼業を勵み、一方には弟を通學させ居りしも、佐太郎の病氣は段々に手重くなりしより、阿菊は大いに心配をなし、如何にもして今一度夫を健全なる元の身體に回復させ度と思ひ、斯る時には神賴みの外はあるまじとて、躄の夫を車に乘せ、一里餘も隔たりたる不和村まで神詣でをなし、一日も怠らずして、祈をるとは、近世稀なる節婦と云ふべし。

●淸國女學生　今般來朝せる淸國女學生八名中四名は、永田町下田歌子女史の門に入り、追て華族女學校に入學の筈にて、他の四名は小石川指ヶ

谷町呉稚暉氏谷寓に在り、中小學より漸次女子師範學校に入學せしむる筈なりとの事なるが其氏名年齢を擧ぐれば左の如し

曹麗雲　年二十四歳、陳彦安　年二十二歳、華桂芳　年十九歳、胡彬華　年十五歳、周佩珍　年十三歳、俞文婉　年九歳、馮元賽　年十三歳、呉芙　年十四歳

○夏衣裳の栞　大丸呉服店の調に據りて、本年の婦人夏衣裳最新流行のものを紹介せんに、先づ

△十六七歳の令孃向　上着地質は、紋絽か霞絽にて、色合は極淡泊とした素赤、又は淡藤色淡空色等なり。高裾模樣の落染、又は曙染、遠山の景に朝露の樣を描き、金銀泥にて胡蝶の戯る丶風情を寫し、又は須磨を遠見にし、光琳風の鵆を褄下より幽に飛ばせたるも好し、其浪も地染と青白絲に箔を取混せ、銀泥の砂子を置かば、高尙にして優美なり。但し粧ひ着なれば、五つ紋付にて、紋の大さは鯨尺一寸位が適當ならん、襲は地質絽或は生練を用ゐ地色は極淡の紅梅、又は淡鳩羽色など面白し。(仕立上代價三十八圓內外)▲長襦袢は紋絽縮緬又は旭織にて、地色は朱鷺色又は桃色となし、友禪染の周圍許り夏草の模樣を光琳風に白にて染上げ、胴の所には、蜻蛉と蝶を二つ三つ飛ばせたるなど、誠に高尙の好みなり。半襟は白絽縮緬へ、銀絲にて淡泊と濱千鳥の縫を置くなど好し。(仕立上代價十八圓內外)▲帶は、色合着付の配色工合により相違あるべきも、先づは淡勝色淡柿色、淡鳩羽色など最も流行せり。地質は絽繻珍織にて、五釜位の龜甲崩しに、鳳凰の丸模樣にて銀通しのもの。(代價三十圓內外)又は銀無し(代價二十圓內外)其他友禪絽にて、二釜物の亂菊に流水の模樣彩色入り(代價二十圓內外)など流行せり。

常磐鐵道 避暑地案内

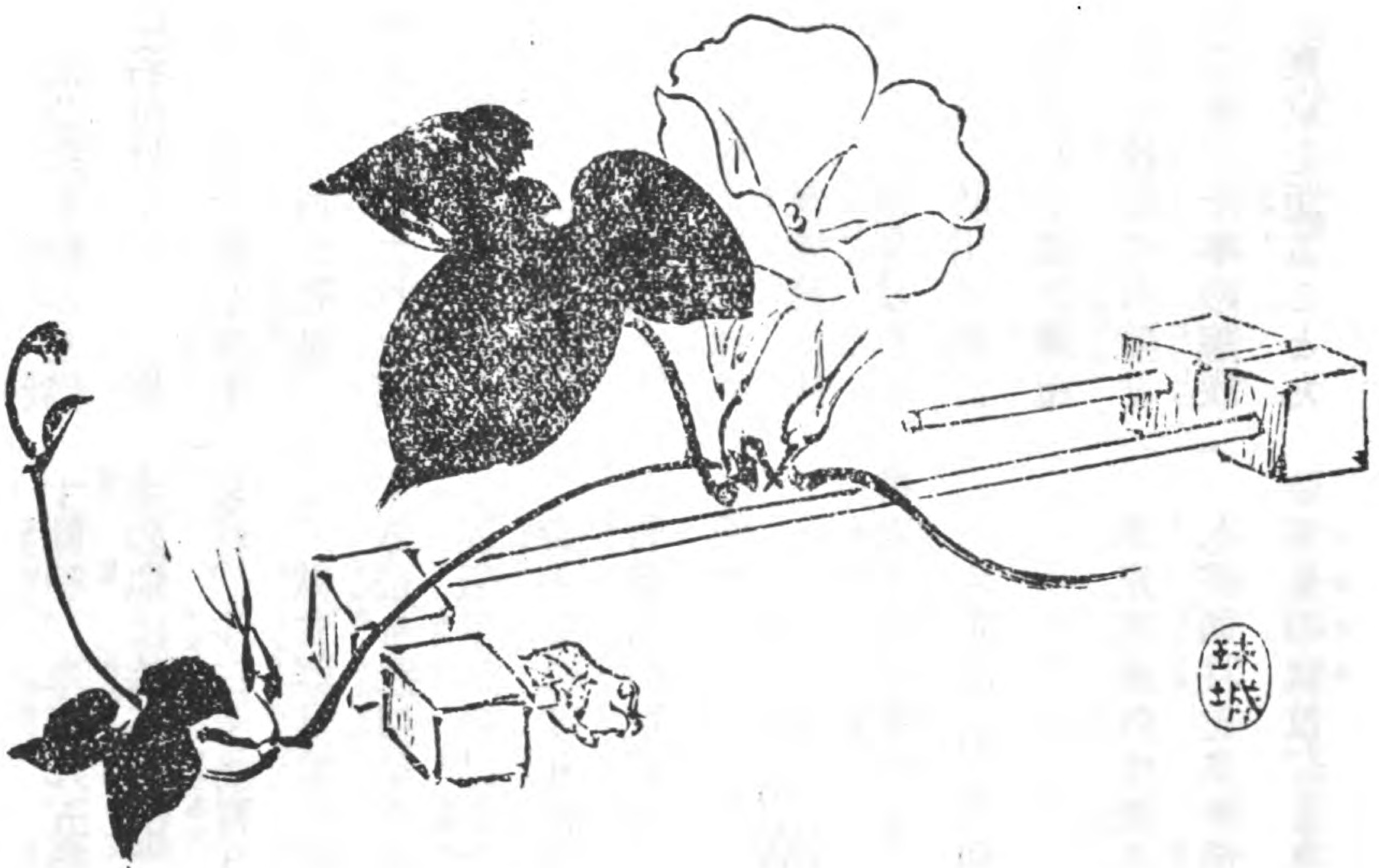
常磐兩州沿海一帶の地、山秀で海濶く、岬角遠く出で斷崖高く聳え、沙白ぐして松靑し、其風光の明媚なる登臨吟賞に宜しく、氣候の温和なる養痾衛生に適し、之を彼の關西なる須磨舞子明石等の各勝地に比して寧ろ優るあるも決して劣る所なし。而も世人の多くは耳を尊んで目を卑しみ、只管彼の優美と妍麗とを羨み說きて、已が眼前咫尺の地に此の勝境あるを知る者の少なきは遺憾と謂ふべし。今や山ほとゝぎす初鰹と歌へる初夏新綠の季節は既に過ぎ去りて三伏炎熱の候は目前に迫まり來ぬ。されば大方愛讀の諸君は避暑に最も適當なる土地を選ばるゝに忙はしき事ならむ、仍て先づ玆に常磐兩州沿海の勝地を紹介し、夏期六十日間を此の清涼世界に優遊娛樂せられん事を請はんとす。

抑常磐兩州の勝地が尤も避暑遊賞に便宜なるは東京を距る近きにあり、常磐鐵道に由れば孰れも五六時間にて到着することを得べく、假使東京に在て幾多の事業に關係し繁忙を極むる人にても緊急の用務を處置するの餘暇を以て便宜一遊を試むるに難からず、況や其他大抵鐵道線路に接近し居れば鐵道を下りて後更らに車馬を雇ふて山坂を上下するの勞苦を受くる少なし。老人小兒を同伴せらるゝ塲合には尤も便利とする所、而も、汽車賃は暑中三割引なりと。

大磯小田原等は東京を距る遠からす、風景も亦美なれども、如何せん近年は世の所謂政治屋なるもの雲の如く集まり蜂の如く簇がりて其煩雜に加へて俗臭の紛々に堪へ難きを、須磨舞子明石は好しと雖も道途遼遠にして往復に數十時間を空しく費

すの不便あり、用務の繁多なる人は云ふ迄もなく、一家を舉けて避暑旅行を爲さんとする場合には、其娯樂は以て其煩勞を償ふ能はざるの感あるべし、されば常磐二州の海岸こそ避暑には最も適當の地と謂ふなれ、仍て再後沿道に於ける勝景の寫眞版を本誌に連載して、其土地の風景及び傍近に於ける名所舊蹟の概要を説明すべし。

本誌に揭げし口繪貳葉、其一は水戸常磐公園好文



亭の圖にして其二は助川海邊眺望の圖なり、好文亭は天保年間水戸藩主權中納言徳川齊昭（景山と號し玉ふ、烈公は其諡なり）其地を相し、身自ら繩張して經營し玉へる所なり、公園近く仙波の湖水に臨み、廣袤數十萬坪、園中には數千株の梅花、躑躅、萩、等を栽えたれば四季折々のながめあり、海内に公園の數多けれど、人工を多く用ゐずして天然の景勝を占めたるに至りては、之を第

一と稱するも過奬にはあらじ、烈公衆と樂みを偕にするの意を採りて偕樂園とは名付け玉へり、好文亭は君臣政治の餘暇に會飮して、詩を賦し歌を詠せる所、三層樓あり、此に登れば、西に筑波、東に磯港等、山海の風景一目に集まる、之れをば樂壽樓と名付けらる、其額面等は皆烈公の自書し玉へるもの、山河に仰俯すれば、座ろに今昔の感に堪ふる能はず、水戸停車場を距る二十町なり』

助川は常陸海岸中第一に指を折らるゝの勝地にして啻に景色の他に優れるのみならず、氣候最も佳良にて冬は温暖に夏は淸涼なり。且つ海岸は概して飮料水の不良に苦しむものあるに、助川は適當の良水に富み、海岸には玉簾を掛けたる如き瀑布あり、海水に浴したる後此の淸水に投じて身體を洗淨すれば身心の爽快言ふべからず、十年の痼疾も忽ち一掃するの思ひあらむ。東京を距ること九十餘哩、車行凡五時間にて達す、停車場の前面數歩の地に旅亭松風館あり、海岸高き處に築造せられ、沙白く松靑き美景は居ながらにして翫ふべく、飮食器具等の設備能く行き届き、來客を待遇する最も懇切なりと聞く。

因云本誌の記者介洞翁は目下常磐沿海の地方漫遊中なれば其詳細の報道は之を次號に揭載して行遊者の指折に供せむ

●新刊略評

●女流文學叢書（第二編）

（廣池、山本、和田、松尾四氏校訂標注）

東京神田　東洋社發行

和泉式部外十數人の歌集を收め、之に畧傳を附し、頭注をさへ施したれば、和歌を學ばうとするものには、よき友なるべし

（定價八十五錢）

●女訓の栞 三輪田眞佐子著 東京日本橋大倉書店發行

婦人に必要なる幾多の小品文を秩序的に編輯したる者にして、文章また流暢、將に一讀の價値あり。

●淵都乃響 松韻會編纂定價廿五錢東京神田東洋社發行

松韻會とは、今様歌復興のため、國學院學生の組織せる團體にて、その詠草を發表したるは即ち此書也。偶ま誦すべきものありと雖も、冗長なる駄作少なからず、おほむね、内容を忘れて、字句修辭に流れしものゝ如し、かくの如くにして果して淵都を動かすや否。諸氏の猛省を促す。卷頭にあげたる萩野博士の詩論、有益多趣味なれども、附錄なる丸山氏の詩中、(十六頁)「水戸烈公はあらざるか、丸山 作樂 はあらざるか」と養父を褒めたるあたり、殊に上出來なり。

●菅公事蹟 井上哲次郎口演定價拾五錢東京京橋國文社發行

本書は、井上博士の口演したるを、田中氏の筆記せるもの也。平易は菅公の事蹟を敍述し、而もその評論中庸を得て、衆人の好伴侶たるを失はず。

●少女讀本花の卷 堀内新泉著 定價拾八錢 國光社出版部發行

本書は家庭小說に於て、獨得の技能あり、觀察ありと稱せらるゝ新泉子が、心を勞し處を焦がして組織せるものにて、目次の花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり、の六項に分たる、就中玉椿の一篇、あはれにいぢらしく、讀もてゆくうちに自ら淚落ちて紙の沾ふを覺えず、之を讀みて泣ぬ者は、人心のなき人にやあらむ。毎篇の終りに唱歌毬歌を添へたる趣味深く目新し。近頃世間に多く出づる家庭教育

書の中、第一の好書たるや疑ひなし。

●口繪に就て

●宮島ぬい子　山形縣南置賜郡米澤市直峯町宮島中右衞門の三女なり。明治十九年四月綠綬褒章に金拾圓を添へて下賜せらる●橋本むめ子　栃木縣安蘇郡富岡の農なり。明治二十三年三月實兄辰次郎と共に綠綬褒章を賜はる●小林しん子　和泉國日根郡尾崎村の農小林宗四郎の女なり明治十八年一月綠綬褒章を下賜せらる●淺井てふ子　甲州西八代郡市川大門村の人淺井周慶の次女也明治十五年十一月綠綬褒章を賜はる●佐藤つる子　岡山縣後月郡出部村大字上出部佐藤政五郎の二女にして明治二十四年十二月綠綬褒章を賜はりたり
△以上は何れも孝貞比類なく、世にあり難き家庭の花とも實とも稱ふべき人々にして佐藤つる子は曾て本誌に於て江湖に紹介したりしが其の他の分は折を見て文學士大町桂月氏の筆にありたる詳傳を掲ぐることゝすべし

●國光社印刷部　本社印刷部は、嘗て其一部を示したることありしが、今又、內部の寫眞を掲載して、諸媛の一覽に供せむ。
前一葉は二階にして、左方は文選課あり。原稿を受付くるや、直にこゝに廻して、文字を拾ひ、右方植字課にて、之を組み立て版成りて前面中央なる校正課にて、之を正しかくて再び植字課にてその差替をなす。さて完全に出來上りたるものは、階下なる器械場に下し、器械にかけて印刷する也。左方は一度に三十二面、右方は十六面八面ずり等合せて數十臺あり。皆瓦斯インジンの力を以て廻轉し、夜を日に繼ぎて業務に從事せり。此外鑄造、紙型等種々の工場あれども、此には畧しぬ。

國光社出版圖書目錄

工藤武重謹著

孝明天皇御遺德

菊版美本全一冊
定價金二十五錢
郵稅金四錢

謹で按ずるに先朝 孝明天皇は曠古の君なり、不幸にして事蹟尙湮晦に屬し、聖德未だ外に露れず、是れ頗る憾むべしと爲す。此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし月卿雲客諸官人の實歷談に依り、以て汎く逸事遺聞を網羅したるものにして、庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず。

從六位内藤耻叟序正三位文學博士栗田寛著

天朝正學

菊版美本全一冊
定價金三十五錢
郵稅金四錢

栗田先生は水藩の碩學にして、夙に義烈二公の遺意を奉體し、こゝに此の書を著はし、皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ、大に二公の本志の在る所を明にし、世人をして本末を辨別し學ぶ所を過らざらしむ。臣子の本分を全ふせんとする忠愛の士、幷に史學文學者の參考に資するや大なり。

伯爵副島種臣男爵尾崎忠治兩君題辭宮内鹿川著

王學指掌

洋裝美本全一冊
定價金壹圓
郵税金拾錢

王學の吾人身心の修養に大益あることは、既に天下識者の認むる所にして今更論辯を要せず、本書は著者が古傳習錄及び文錄等より、この學の講究に最も必要なる條項を擇び、系統的に之を編纂したるものなれば、一讀の下直ちに之を理會することを得べし、實に近世王學を修むるものゝ一大好書也。

伯爵松方正義子爵渡邊國武兩君序
農商務大臣男爵平田東助君譯

商工經濟論

獨逸大博士ロッシエル氏原著

總クロース美本
上下二冊定價
金一圓八十錢
小包料百里迄十六錢
以外卅二錢

著者は泰西經濟學派の泰斗、譯者は我國獨逸學者の翹楚、其議論の卓拔にして譯文の精到なるは敢て贅言を要せず、心を商工業の發達に致して國家の富强を圖らんとするの士は、必讀の價値あり。

男爵高崎正風序本居豐頴序故富士谷御杖述

土佐日記燈

菊版大和綴美本
全三冊定價
金一圓五十錢
小包料百里迄十二錢

富士谷御杖翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず。抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣が深く憤る由ありて、ものされたりといふを、本として言詞は更なり、文意をもいと委しく解なし、廣く考證されたれば、國史國文に志ある士は机上一日も欠く可らざる良書なり。

國光社編輯

日本教育

菊版全一冊
定價郵稅共
金二十五錢

從來教育に關する學術的の解說及訓練管理の細目を詳述したる著書尠なからざれども國家の特性本質に鑑みて國民養成の大綱を示せるものは甚だ乏し本書は此の缺乏を補はむが爲に我が日本の教育に就きて論述せる者にして教育界現時の宿弊を矯め邦家千載の教育主義を明にせむとする者也。

伯爵東久世通禧君題字
高等教育會會議員湯本武比古君序
東京感化院長高瀨眞卿講述

學校家庭 修身一夕話

新刊

洋裝菊版美本
全一冊定價金六十錢
郵税金八錢

本書は修身倫理の大綱を説き、東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に叙述せしものにて、趣味饒多、近來稀有の好書なり、苟も子女教育に留意せらるゝ諸氏は必ず一讀あれ。

紅塵庵俗禪譯　富永永洸書

國の譽 獄の花

極彩色口繪挿畫數葉
菊版美本
定價金五十錢
郵税金八錢

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に坐し、惡魔の如き法官殘忍なる獄吏の下に苦悶するに當り、高尚優美なる妙齡の一少女が、神聖無垢なる愛情より遂に其の幽閉を救ひ、最名譽なる儀表の下に最純潔なる結婚を爲すに終る、實に斬新奇警なる小説にして記述の精妙讀者をして恍然たらしむ、幸に一讀の榮を賜へ。

山崎忠和著

文久物語

一名寺田屋騒動

寺田屋騒動は維新史中の悲劇として世人之を知るも其の眞事實に至つて今尚隱密の間に伏在せり、此書の隱微を發き秘密を明にし田中淸川等の奇傑が機變百出の壯圖を始め志士慷慨家の言動紙上に活躍し絶壯絶慘を極むるの狀髣髴として目睹するが如し。

彩色精版挿畫入
洋装全一冊
定價金二十八錢
郵税金六錢

肝付海軍大佐題辭　小笠原大尉序文及作歌
伊東海軍大將手翰　木村海軍大尉校閱

西圭一　野口衛佐美合著

新案 海軍遊戯法

訂正第三版
菊版美本詳圖入
定價金二十錢
郵税金四錢

本書は我海國男子を養成するに適切なる良書にして、其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戯法を、至極簡易明瞭に解きたる者なれば、世の父兄たるもの、宜しく一本を繙て、以て家庭の資とすべき有益無比の書なり。

白耳義大學教授ラヴレー氏原著　文學士寺内淳二郎譯

奢侈亡國論

現今の世、人靡然として奢侈に流れ豪奢淫佚自ら得たりと爲すもの擧世滔々みな然らざるはなし、原著者茲に見るあり奢侈の定義動念不正を論じて一代の頽瀾を將倒に挽回せんと試みたり、譯者亦流麗の筆を以て之を譯出したれば繙讀の間趣味津々自ら禁ずべからざるものあり。

新刊　袖珍洋裝美本　定價郵稅共　金二十二錢

少年武士道史傳

戰國時代以降三百年間の史迹に稽へ武士道の標本とすべき八人を擇び各有名なる大家の筆により少年家庭の讀本に充て未來の國民をして此氣風の涵養に便益を得せしめんことを期し茲に此史傳の刊行を計畫せり行文は凡て平易流麗を旨とし勉て少年の德性を啓發するに便せり。

全部八冊菊版美本　一冊定價拾九錢　郵稅金四錢

●第壹篇既刊　山中鹿之助　文學士大町桂月著　飯沼珠城畫

●第貳篇既刊　上杉謙信　文學士三好物外著　飯沼珠城畫

女鑑

明治三十五年七月五日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百五拾六號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷